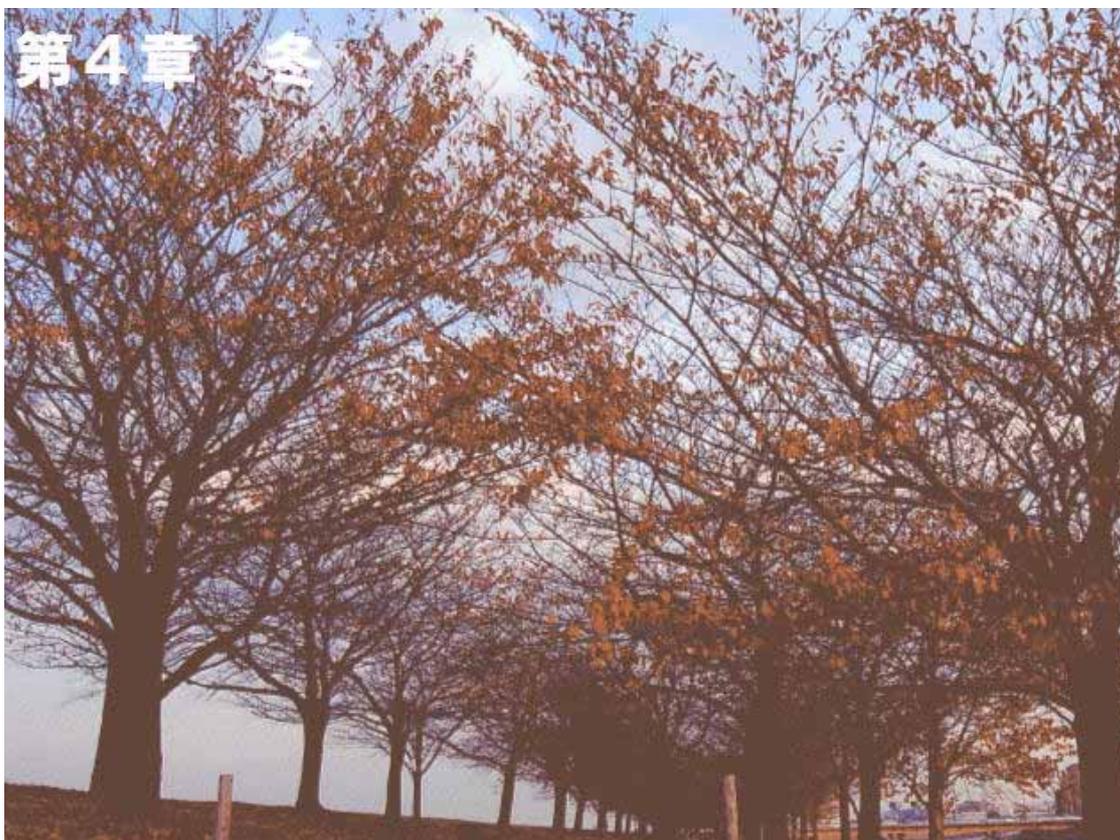


漂着モノログ 第四章 冬.....	328
十二月の巻 .....	328
自然再生論（前編）.....	328
自然再生論（後編）.....	335
検証 .....	339
re-re-reset.....	348
十二月の巻 おまけ.....	356
スローダウンな師走.....	356
くりすます近づく.....	359
それぞれの Holiday.....	365
微熱？ それとも.....	372
一月の巻 .....	377
クリーンアップ初め.....	377
CとSのR .....	385
一月の巻 おまけ .....	391
アプローチ、ソリューション.....	391
ジレンマとその先（前編）.....	402
ジレンマとその先（後編）.....	407
距離 .....	413
わたしたち .....	417
二月の巻 .....	422
雪中動静 .....	422
降りつもる、降りしきる.....	429
二月の巻 おまけ .....	436
蒼氓 .....	436
二月の巻 .....	447
耐寒と体感の間で.....	447
二月の巻 おまけ .....	451
祝 × 4 .....	451
魔女の筒条書き .....	458
三寒四温七日 .....	465



#### 十二月の巻

##### 自然再生論（前編）

十二月というのは何も予定を入れなくても丁度いい、とは云うものの、これをやらないと年を越せない、ということもある。河川事務所か、はたまた其処の一課長か、どこかの発案かはいざ知らず、ヨシ原や干潟の保全のためとやらの再生工事の話が持ち上がって以来、どうにも落ち着かない日々が続いていた訳だが、今日は一つの決着を付ける待望の一日。センターの御三方は朝からせわしなく、昼食もそこそこに切り上げる状態。会議スペースや受付の準備をしていると、助っ人スタッフとして、先週決まったばかりの新たな理事候補男女一名ずつ、それに前々からの役員さんで、例の課題論文「流域考察」で合格を得た理事候補がやって来た。この方、ご年配ながらフットワークは良く、地域事情通、そしてちょっとした女流作家だったりする。論文が通らない道理がない。

「あ、玉野井のおば様、いらっしゃい」

「先生はまだ？」

文花と一言二言交わし始めた矢先、当の先生がゆっくりと現われた。今日から師走なれど、走るほどいそがしくはない先生である。

「よお、緑のおばさん、しさしぶりだなあ」

「ホホ、先週はごめんなさいね。三連休だったから、つい遠出しちゃってね」

おばさんと言われても別に気を悪くすることなく、この通り余裕の返答ぶり。緑のおばさんがのが引っかかるが、何を隠そう、お名前が緑さんだからである。特にペンネームはないので、何かを書き著す時は、そのまま「玉野井 緑」で出している。同年代、かつ物書き同士、てことで、掃部のおじさんとは話が合うようだ。時は十三時、話を聞く会開会まではまだ三十分ある。

理事候補の顔ぶれが固まってきたところで、櫻も徐々に打ち解けてきた。新しい候補二人と、受付のセッティングなどを今はしている。千歳は先週同様、プロジェクト関係の調整に励む。河川事務所からは石島課長と、随行が一名いらっしゃるそうで、発表用資料はPCに入れ込んで来る旨、聞いている。配付用資料も当日持参だとかで、即ち事前には何の情報もない、ということ。何らかの予備知識があった方が進行上は円滑なのだが、出たところ勝負というのも大いに臨むところである。コーディネーター役を仰せつかった千歳は、柄にもなく武者震いしている様子。スクリーンに映し出すPCデスクトップ画面のピントがさっきから合いそうで合っていないのですぐわかる。

受付客第一号は、弟子のお嬢さんである。本日の役回りは言わずもがな、先生のアシストだが、少々気負いが見受けられる。受付表に名前を大きく書き過ぎて、

「あらら、小松 南になっちゃった」

「実が落ちちゃったって」

「十二月ですもんね、いろいろ落ちる．．． って櫻さん、何よお」

「エへへ、改めまして南実さん。あの私、何て言うか、お詫びしたいことがあって．．．」

「あ、だったら、私も」

受付でのほんの一角などと言っては不可ない。実に実のある、奥深いやりとりなのである。だが、この続きは何だかんだで明日に繰り越されることになる。今日の会はそれだけ大波小波の何とやらだったのだ。

開会十五分前、聴講者がポツポツ来るのに混ざって、河川事務所の二人が現われた。資料をギリギリまで仕込んだ甲斐があったか、これでバッチリ然とした堂々たる登場ぶりである。

「やあやあ、掃部先生、今日はお手柔らかに頼みますよ」

「ま、ちゃんと出てきたんだから、感心感心。来たからには、いい話聞かせてくれる、ってことだよな？」

「今日の資料はちょっとした自信作でございます」

いつもなら平身低頭になるところ、今回は<sup>きつぜん</sup>屹然と応じている。お付きの人物は、受付に配付用資料などをセットしつつ、配り始めた。千歳は預かったPCをプロジェクトにつないで試験投影中。舞台は整いつつある。

この後、運営委員候補の男女二人、チーム冬木からも男女二人、十月の回の参加者なども集まり、開会定刻にはすでに三十余名に達していた。つまり会場はほぼ満席。

「皆さんこんにち。今日から十二月。歳末ご多用のところ多くの方々にお越しいただき、ありがとうございます。」

司会進行役は、櫻が務める。いつもなら気の利いたフレーズの一つや二つも出るのだが、

会の性格上、粛々とやっている。否、素顔の櫻に注ぐ会場の視線が妙に熱いもんだから、不覚にも硬直してしまった、ということらしい。こういう時はさっさと開会挨拶に振ってしまった方がいい。

「．．．行政担当者から直接お話を聞く機会というのもそうそうないと思います。今日はまずお話を伺って、その是非を皆さんで考えてもらいながら、よりよい案などを見つけていければ、というのが趣旨です。単に『反対』とか『中止』とかじゃなくて、対案なり協働プランなりを出していただく、といった感じになりますかね。当センターとしては、ちょっと硬派な催しですが、議論を通じて、体を温めてもらおうというのもございます。室温は予め低めにしておりますので、どうぞお気兼ねなく．．．」

文花も随分と挨拶慣れしたものである。室温設定について文句を言う客もこれなら出るまい。沸く客席に一礼して着席すると、櫻とアイコンタクト。

「あ、それでは早速、本日のお話『干潟とヨシ原の保全に向けた試み』について。石島課長、お願いします」 文花まで変な視線を送るもんだから、課長のプロフィール紹介がすっ飛んでしまった。ま、石島を知る人は、全体の三分の一はいるので、さしたる支障はなからう。

櫻が司会席に戻りかけた時、見慣れた青年が受付でウロウロしているのが目に入る。

「八宝さん、いらっしゃい」

「へへ、毎度の遅刻、すみません」

「今ちょうど説明会が始まったところ。でも、席がねえ．．． あ、受付に座っててもらえばいいんだ。二十分ばかりお願いしていい？」

櫻は先週と同じようにカウンターから会場とスクリーンを眺めることにした。時折、配付資料に目を落としては、静かに溜息。対照的に課長の方は息巻きながら熱弁している。

話の流れは概ね、一、荒川下流における自然再生の現況、二、その再生を妨げるゴミの実情、三、再生効果を上げつつある消波用造作物の紹介、そして、

「今、当の干潟と同じような箇所を調査しているところです。調査のモデルとして最初に指定させていただいたため、一部に人手が入ってしまいましたが、まだ工事が本決まりになった訳ではありません」

と弁解しながらも強気なことを仰る。「決まった訳ではないが、進める前提．．．」そんな言葉のウラが読み取れる。油断ならない。

今のところ機材系の千歳は、スクリーンを監視しながらも、配付資料に入念に赤入れしている。さらにその傍らでは普段は円卓にあるおなじみのノートPCを起動させ、議論になりそうなポイントを打ち込んだりしている。いつでも投影できるようにプレゼンソフトを使うあたりはさすがである。それにしても、立場上、中立じゃなきゃいけないのが悩ましい。頭の中では、言いたいことが漂流・漂着し出している。

「で、今回の再生、つまり消波実験の要点は、次の三点にまとめられます」

1．波からヨシ原を守る 2．干潟の安全性を確保する 3．ゴミの漂着をできるだけ遮断する これらが箇条書きでスクリーンに映し出される。千歳はすかさずそれらを打ち直して、唸る。「漂着を遮断？」

単に話を聞くだけなら、ここで質疑応答が入って、おしまいになってしまうところだが、今回は違う。櫻があわてて駆け込んでくる。

「は、失礼しました。石島課長、どうもありがとうございました。では一旦休憩に入ります。14:10からは対話の時間、進行役は当センターの情報担当 隅田に代わります。よろしくお願いします」

プロジェクタをつなぎ替え、ワイヤレスマイクを点検し、赤入れ資料を読み返す。こういう状況だと、櫻も近寄り難いようで、何となく距離を置いている。南実としては話しかけに行くチャンスではあるが、やはり緊張感を保つように先生の隣でスタンバイモード。八広は何とか席を見つけて腰を下ろす。程なく会場は静まり、第二幕「対話」が始まる。

「この時が来るのを心待ちにされていた方も多いと聞きます。ここからは、対案・対話タイムです。私、隅田が進めさせていただきます」

特にツカミをどうこうするでもなく、千歳も無難な感じで切り出す。だが、期するものがあつたようで、次に面白いことを持ちかけた。

「早速ですが、現時点での意識調査をさせていただきます。工事の是非は又キにして、『消波』そのものの必要性を問いたいと思います。必要だと思われる方は、石島さんのいらっしゃる側へ、必要でないと思われる方は、その逆側へ。どっちとも言えない、という方は様子を見ながら両者の中間あたりに、それぞれお席を移動してもらえませんか」

スクリーンには、要と否とで矢印を振り分けた図が大写しになっている。なかなか手筈がいい。

「ご面倒かけました。ご意見を整理していく上で、目に見える形にしておこうと思ひまして... 今のところ必要派の方が多いようです。では、不要派の方からご質問なり対案を、と思ひますが、一応、ポイントに沿って、ということをお願いしましょうかね」

第一幕で提示された三つのポイントが再度スクリーンに現われる。対案が出たところで、ここに書きなぞらえようという設定である。まずは、1.波からヨシ原を守る について、不要派の挙手を求める。手が一斉に挙がるようなことがあればヒヤヒヤものだろうが、こういう時はえてして静かなものなので、多数派の石島課長は悠然と見守っている。

「では、ここは代表して、掃部さんをお願いしてよろしいでしょうか」

小さく手を挙げてはいたので、指名しやすかったのは確か。コーディネーター席の隣、スクリーンの直下に座ってもらい、一席持ってもらうことにした。

「結論から申しまして、1.については『波が来ても平気』、2.については『し瀉は安全を確保するためにある訳ではない』、ということです。3.はまた後で議論するとして、とにかく消波するには及ばない、というのが当方の見解であります」

対立構図を作るつもりはなかったが、乗っけから単純論法で「反対」が示されたようなものである。歩み寄りを促すつもりはないが、溝を埋めていく必要はある。コーディネーターの腕の見せ所だろう。千歳はひとまずスクリーン上に先生の言い分を書き足していく。

「で、石島さんにお尋ねしたいのは、法的根拠でございます。察するに自然再生推進法ってとこだとは思ひますが」

まだまだ余裕の石島氏は軽く一言、「左様でございます」

「皆さん、ここで『推進法』てのがクセ者な訳です。再生を推進てのはどういうことか。

工事の上塗りを押し進めるような名称だったのがそもそもの間違い。自然を生かした川づくりと言いながら、コンクリの廃材を再利用したコンクリでもって、新たに護岸を作っちゃったなんて笑えない話もある。廃材利用＝環境配慮って勘違いがまかり通って、自然再生が自然再破壊になっちゃった。そんな不自然な例が後を絶たないんだそうです。とにかく新しく何かを造るっていう発想をどうにかしてほしい、ってのがあります」

ここで課長が拳手、千歳は前方に来るよう勧める。

「不適切例は重々承知しております。今回の実験は、あくまで多自然型のアプローチです。流域の粗朶<sup>そだ</sup>や石を使って沈床を設け、それ自体が自然の一部になるように配慮しています。ヨシ原、干潟、消波ブロックが一带となって、多様性を醸成することを目指そうと…」

「いやいや、それでも人工物には変わりはないさ。だいたい何であそこに設ける、し、必要があるのかが不透明。理由が後付けな感じがしてよ。つうか、場当たりのなんだよ。ま、バチ当たりと紙しと重<sup>あ</sup>ってとこだな」

「対応が後手になったらなったで、いろいろ仰るでしょ。早めに手を打つ、ってのもあるんですよ」

「今まで知らなかったんだろ。急に何だよって話さ」

段々ヒートアップしてきて、これはこれで観衆としては見応えがあっているのだが、調整役としては看過できない。

「ちょっと本旨から反れてきたようなので、1・2について整理します。自然志向の造作物であることはわかりました。ただ、それが本当に自然にとっていいものなのかどうか、そこを突き詰める必要がある、そんなところでしょうか」

「これは小生の持論ではありますが、基本的には自然に対しては余計なことはしない。するなら最低限の手助け程度でいい。そして新たに何かを造ったり加えたりというのは避け、あるがまま、本来のままを活かす。そういうことだと思います」

「本来の」は、十一月の回で画家の蒼葉からも出たフレーズ。そこをどう論破するかがポイントだったが、わかっていた割には詰めが甘かった課長である。反証する前に、千歳にひと区切り付けられてしまった。

「自然再生の本来的意義についての議論を深めたいと思います。ここらで質問などありましたら、お願いします」

こういう展開だと、手も拳がりやすくなってくる。必要派からは、人が介在するレベルはどう見極めるのか、不要派からは、人為的に造った自然地もこの際見直した方がいいんじゃないか、両派からそれぞれ含蓄ある質疑が出された。千歳はそれらをさっさと打ち込んで、スクリーンに投じる。

「河川事務所としては、市民・住民の皆さんの声によって動くことが多<sup>おお</sup>ございます。要望にお応えしていくのが優先なので、レベル等は設けておりません」

「そこだよ、お役所が何でも言うこと聞いてたら、御用聞きと同じじゃないか。これは要望を出す側にも問題があんのかも知れないが、何らかの原則を設けてそれに照らして対応するのが筋だと思う。小生の原則論は、あくまで自然の都合優先。人間のご都合で自然に手を出すってのは邪道な訳さ。どっかでしっぺ返しを喰うのがオチよ。レベルってことなら、自然が自力で回復するための最低線だろな。外来種をどかしたり、下草刈りしたり、そうそうゴミの除去もな」

一気呵成に畳み掛ける。だが、その次の問いについては、鷹揚な答えが返ってきた。

「ま、造っちゃったもんは仕方ない、という見方もあります。人為であっても自然は自然。長年経過すれば一定のシステムが出来上がってるでしょうから、それをわざわざ壊すこともない。要するにそれを以って反省材料とするか、懲りずに続けるか、そこが分かれ目な訳ですわ」

課長は青白い顔になっていたが、これで少し回復した。メリハリの利いたトークは掃部節の真骨頂。だが、フンフンと頷く向きが多いと見るや、ここでズバツと持論の最たる部分を持って来る。

「造っては壊し、壊しては造り、そういう時代ではありません。自然再生を進めるのであれば、むしろ壊し放しでいい。人工物がなくなれば自然てのは勝手に再生するもんです。再生の名を借りた新たな施しは無用。自然の声に耳を、自然の都合に目を、です。これは地域・流域の皆さんにも言えることですがね」

早くもまとめのような話が出てしまった。ここで要否について意識調査をすると、要らない派があっさり増勢することだろう。あまりにも自明なので、千歳はあえてポイントの三つ目に話を向けることにした。

「さて、自然再生に際して障害になる漂流・漂着ゴミですが、消波ブロックがそれを防ぐというのはちょっとどうかな、とも思います。進行役という立場上、意見を申し上げるのは憚られるのですが、再生工事を進めるためにゴミを引き合いに出しているような印象は否めません。自然再生論とはまた違った視点で、要否を問う必要を感じます。いかがでしょう？」

ここは先に石島課長が陳述を始める。

「先ほどの掃部さんの話を継ぐとすると、ゴミもあるがままでいいってことになるだろうかと。最低線ということで人が除去する必要は説かれてましたが、漂着するものの中には流木や枯れ枝なんかもあります。人工物と自然物を選別する手間は馬鹿にならないでしょう。ならばいっそ、となる訳です。ゴミの流れ着く量が抑えられれば、干潟やヨシ原に棲む生き物にとっても快適でしょうし」

説得力があるような、そうでないような。だが、元来そういう役割のためのブロックでないことは明らか。後付け観が拭えない。

先生も大いに一言あるのだが、弟子がいち早く手を挙げた。

「それは異議アリです。漂流・漂着は自然の摂理。ゴミもこの際、流れ着いてもらっていいんです。あるがままとは言っても、捨わなくていいとは言っていない。人が出したものは人が片付ける。それが最低ラインの手助けです。そもそも、目立つゴミが防げればそれでいいってことはありません。粒々、いや細かいプラスチックゴミなんかはブロックしきれないでしょう。生き物にとって特に脅威になるのはそうした細かいゴミの方です。ブロックできないなら尚のこと要りません」

その道の研究員に実証的な発言をされては元も子もない。要る派にも援軍がいればいいのだが、これで益々分が悪くなって来た。

「な、石島さんよ、要は生き物全体の為にはどっちがいいかってことよ。し潟に到達する量は確かに減るだろうよ。でも、流した先はどうかのさ。東京湾、太平洋、ってどんどんゴミは流れてっちゃう。一部はどっかの海辺に流れ着くだろうけど、それならできるだ

け発生源に近いところで回収した方がいい、って。違うかい？」

分が悪いことは承知しているので、ここはなだめるような口調で言って聞かせる。だが、それでは解決にならない。対案が求められる。

「対案ということではどうでしょう？ 流すのはNG、回収するのは大変、となると、どうすればゴミそのものを減らせるか、って話になりそうですが」

クリーンアップの発起人とリーダーはこの催しの主催者側スタッフなので、ここぞというところでの発言ができないのが何とももどかしい。千歳としては「回収するのは大変だけど、慣れてしまえば．．．」というのが正直なところ。文花も現場で鍛えている以上、説得力ある発言は十分可能だろう。だが、やはり口を挟めない。

どっちつかずの席にいた緑のおば様の手が拳がった。これには千歳も意表を衝かれた。

「ちょっと話が変わっちゃうかも知れないけど、ゴミが流れてると魚なんか迷惑よね。ホラ、六月の講座で先生教えてくれたじゃない。ソウギョだっけ？ あれが干潟に打ち上がっちゃうのも、実はゴミが原因だったりするんじゃない？」

先生はちゃんとその時と同じフリップを持って来ていたが、それは南実の隣に置いてある。気付いた弟子がパラパラめくって、その一枚を会場に示して見せる。照明をやや落としてあるのでハッキリは見えないが、文花もしかと凝視している。

「死因は水関係だとは思いますが、解剖してみないとわかりません。中から微細ゴミが見つかったら．．． あ、ところでブロックがあると、大魚が打ち上がるのも止めちゃいますね。そしたら、鳥がついばみに来られない、かも」

「し潟は、食物連鎖の舞台だからなあ。不本意な死に方でも、それならまだ浮かばれるってもんよ。ま、魚なんかの為を思って、水の良し悪しにも神経尖らしてる国交省さんなんだから、やっぱゴミを流して済ますてのは理屈に合わんわな。あの溶ける燈籠だって、水質汚染になるからってんで回収することにしてんだろ？」

「あ、ハイハイ。仰せの通りでございます。そこまで言われちゃ、しがたないです」

いつもの平謝り調になってきた石島のトーチャンである。「しがたない」と茶化すのが精一杯。

一家言を有する八広がここでようやく口を開いた。千歳としては、待ってました、である。

「ゴミを減らす、つまり発生抑制策については、やはり河川事務所としても打つ手はあると思います。いわゆる美化清掃ってことではずっと続いてますし、ボランティアな活動で拾い集めたものについてのサポートもある。でも、それはあくまで対症療法。もっと踏み込んで、もっと遡って、出させないところに力を入れてほしいです。抑制というか予防スね」

「省庁横断型とか、自治体連携型とか、そういうのって難しいものなんでしょうか。海のゴミは基本法とかで動きが出てきましたけど、河川の方は今ひとつ見えない。水面や川底の清掃、不法投棄物の処理、そうした大規模な作業は勿論評価できるんですが、あくまで管轄する河川において、管轄者として、ですよ。それと並行、いや予防の方により重点を置けば、そうした作業も減らせる。そのためには、いろんな省庁や団体や市民と組んで、かと」 南実がフォローする。さすが、higata@メンバーである。

「皆さん、ありがとうございます。ゴミを減らす話については、実際にどんなゴミがど

れくらい、というのをお見せしながら改めて。より具体的に解決策を探る場を別途設けたいと思います。ということで、今回の実験の是非に話を戻します。今聞いていて思ったのは、こんなところですか。どうでしょうね」

スクリーンには、木・林・森、それになぞらえる形で、干潟・川・海、と文字が並んでいる。「つまり、一部だけではなく全体、全体だけではなく一部。双方向から見る目が大事なのではないか、と。川も一つのシステムとして捉えると、どこか一部だけ良くしても効果が上がらないのは明白でしょう。ゴミの対策も部分的にではなく、全体で。自然再生についても然り。総合的な視点で考えた時、今回の消波実験はどういう意味を持つのか... その辺の説明はいかがでしょうか、石島さん？」

「場当たり、思いつき、そんな風に思われても仕方ないですね。システム論はごもっともです。その観点、確かに欠落しておりました」

少々酷ではあるが、ここで改めて聴衆の意識を探ることにした。だが、休憩を挟みながら、とすることで、場の空気を緩めてみる。スクリーンには「15:15 再開」と投影された。

### 自然再生論（後編）

第二幕、いやここからは第三幕である。予定では、十六時終了が目標。何らかの結論、落としどころを示すための大事な幕。大方の予想はついている。それでも、全員が納得の行く合意が得られることが肝要。対立の構図を残さず、うまく幕引きできればいいのだが...

「さて、どうやら要らない派の方が増えた気も致しますが、要る派の方もいらっしゃいます。これまでの議論を踏まえて、ご意見なりコメントなり、いかがでしょうか。ではまず、要る、の方」

要る派の意見として出たのは、遊び場や憩う場とするなら安全面は確保すべき、との積極的理由と、あって悪いものじゃないから、といった消極的理由。要らない派についてはあえて聞くまでもないところだったが、特に強く主張されたのは「進め方が良くない」という点だった。プロセスマネジメント的にも、今回の実験話は問題ありと見ていた千歳だったが、同じように見る向きは来場者にもあった訳だ。心動かされるも、心境は複雑。こうなると、自然再生論やシステム論をいくら積んでも、河川事務所の所為や作為を根本的に変えるには至らない可能性が出てきた。ここは結論を急がない方がいいかも知れない。

中間派の席は会場中央にはなく、第二幕開始時とは逆方向に大きく傾いていて、八広も緑も依然そこに居る。代表して八広が云うには、「とにかく皆で現場検証してから、じゃないスか？」 緑のおば様も小首を振っている。

明日はその検証日に当たる訳だが、方向性は決めておいてから臨みたい。検証結果によっては変更あり、としながらも、この時点での暫定合意案としては、

1. ヨシ原の一部は復元する（崖崩れを修復することで、干潟の安全を保つ）
2. 干潟は原則ノータッチ（本来の姿を尊重する）
3. 漂着ゴミは受け容れる（とにかく回収・分別等を続ける、抑制・予防も考える）

となり、消波実験はひとまず凍結することとなった。これで一件落着には違いないのだが、この合意形成の過程で、思いがけず新たな論点が浮き上がる。プロセスの読み違い？

と言っはマネージャーに気の毒だ。こうした対話の場においては、むしろ必然。それだけ議論が活発になっている、ということである。消波以前に増水時の対策が先ではないか、引き波禁止の指定はできないのか、干潟に通じる道を整備する（クリーンアップをしやすくする一助）のは、やはり人間都合になるのか．．．

何とかコーディネーターっぽくまとめてきた千歳だったが、こうも話が分岐してくると、さすがに收拾がつけにくい。スクリーン上には幸うじてその三点が表示されているが、解決案を書き足す予定の右向き矢印が付されたところで膠着している。一つ一つディスカッションしていくか。

「これらの論議は、消波実験の要否とは切り分けて、河川事務所としての見解をまず伺う、ということで、よろしいでしょうか、ね」

ご来館当初の威勢の良さが失せて、ローテンションなトーチャンである。是非は問わないので、ただ思うところを述べてほしいだけ。だが、萎縮してしまうと口も開けにくくなるもの。「そう、ですね。今夏のような増水があると、消波も何もないですね。正に水系全体で考えないといけません。いわゆる治水に関しては公共事業が欠かせない訳ですが、自然再生と対立する面が出てくるので、なかなか．．．今はわざと氾濫させるのも治水のうち、という考え方も出ていますが、現実問題、『あるがまま』ってことでは通用しないもんですから」

このくらい弱気な方が同情も得られるというものである。先生はこの答弁を受けて、

「いや、川ってのは生き物なんだから、そういうリスクはつきものさ。昔からそこに住んでる人間だったら、それは当たり前として受け止める。人がいい気になって、川をコントロールしようとするから役所も苦労するんだ。川の動きに合わせて人も動けばいい。ま、氾濫しやすい場所をわざと造る手もあるけどな」 穩便に返すのであった。

引き波禁止については、他の箇所も含め、再度検討すると言う。干潟へのアクセスについては、明日実地を見てから、と相成った。冬場はヨシも減退しているから、あえて整備するでもなからう、というのが大筋の見方ではある。

終了予定時刻まで、あと十分余り。通常ならこの辺りでまとめに入れば丁度いいのだが、「進め方が良くない」の件が引っかかっていた千歳は、まとめ代わりに新たな問題提起を試みる。

「さて、本来でしたら結論の確認に入るところですが、少々お時間をいただいて、違う角度から今回の実験話の背景を探ってみようと思います。お題はちょっとシビアかも知れませんが、こんな感じで」

大寫しになったのは、何と『なぜ、役所が良かれと思ってすることは、理解が得られにくいのか』。これには石島氏も付き人も苦笑せずにはいられない。第二幕から第三幕の間に退席した客は数人いたが、この場ではそれはなし。会場はどこからともなくどよめきが起きている。

同情ついで、という訳ではないが、この際、石島課長の気が済むように、もっと突っ込んで話を聞こう、という千歳ならではの配慮である。こうした探りはインタビュー経験が生きるようだ。早々に切り出してみる。

「進め方についてのご苦言がありました。私見を述べさせてもらうなら、プロセスが示

されないうちに、既成事実のように進めてしまう、それが一因ではないか、と。体質的な要素も大きいように思います。どうでしょう？」

「まあ、予算枠にちょっとした空きがございまして、それなら、という感じでした。下半期に入っていましたので、今年度中となると急がないといけません。拙速ってヤツですね」  
自戒気味に答える課長である。肩の力が抜けている分、今は滑舌である。

「あのぉ、例えば新しいものを造る方が手っ取り早いとか、点数を稼ぎやすいとか、そういうのってどうなんスか？」 八広がさらに突っ込む。記者会見のようなノリになってきた。

「そういう連中もいるにはいます。でも、小職の場合はちょっと動機が異なりまして、そのぉ．．．」 再び言い淀んでしまった。

「お差し支えなければ、教えていただけませんか。記憶には残るでしょうけど、記録には残しませんから」 会場は心なしか和んでいる。話をしやすい空気を作るのもインタビュアーのお役目である。

「公務員の分際で誠に面目ないのですが、これでも娘が二人おりまして、姉妹そろって当の干潟を大いに気に入っておるんです。長女は干潟の話題をきっかけに会話してくれるようになりましてし、次女も原体験が良かったのか、元気を取り戻しました。それで、娘たちがもっと安全かつ快適に過ごしてもらうにはどうしたらいいだろう、って、ま、勝手な親心なんです、ね」

私情を挟みたくても挟めない、公務員の悲哀を感じさせるエピソードである。千歳はまさかこんな裏話があるとは予想もつかなかったので、ちょっとしたお手柄ながら、拍子抜け。清と緑がパチパチと手を打つと、拍手は会場全体に広がった。インタビュアーに向けられた分もあるだろうが、娘を想うトーチャンへの賞賛が主であることは疑いない。

「何だよ、いいところあんじゃんか。それを先に言ってくれなくちゃ、な」

櫻も思わず声を上げる。

「石島さん、姉妹には伝えたんですか？」

「まさか。親の情はさりげなく、です。ダメですかね？」

「じゃ私がいづれ。明日ご一家でお越しになれば話は早い気もしますが。あ、お姉さんは受験勉強中でしたね」

「八八、勘弁してください。今回は凍結になっちゃった訳だし、お恥ずかしい限り」

「いいんですよ。その気持ちが大事。確かにお伝えします。トーチャンの話、良かったよって」

前の席にいた石島課長と掃部先生は、プロジェクタの光を受けながら、握手を交わす。どこまでどう合意形成が図れたのかよくわからなかったが、終わりよければ何とやら。千歳は最後に、「長々とありがとうございました。もう一度、よき父、石島湊さんに大きな拍手を」と締めめることで、まとめとした。河川行政がこれで変わるかどうかは定かではないが、担当者話を掘り下げて聞くことの重要性が認識できたのは大きい。

「という訳で、明日も今日と同じ一時半から、場所はその干潟になりますが、続きを行いたいと思います。検証が済んだら、実態調査を兼ねたクリーンアップをします。軍手、

レジ袋をお持ちの上、濡れても平気な靴でいらしてください。石島姉妹は来られないかも知れませんが、二人のためにも安全・快適な環境にしていこうと思います。ちなみに隅田氏はクリーンアップの発起人、私、千住はリーダー役をしております。今日は仲介役という立場上、二人とも発言を控えておりましたが、明日はしっかり議論に加わろうと思いますので、よろしくをお願いします！」

南実の潮時情報により、十二月のクリーンアップは午後開催というのが前々から流れていた。小梅は塾のため参加見送り。トーチャンズの試合予定はないので、父君は出て来れる見込み。ま、とにかく明日、である。

予定よりオーバーしているが、十六時十五分を回ったところで、文花事務局長より事務連絡が入る。センターの活動をサポートしてもらうための会員募集（仮入会）の件、ついでに創設準備中の運営団体名（NPO法人正式名称）募集の件、環境ナビゲーションサイト「KanNa」のPR、そして、

「今日の討議で話がありました、ゴミを減らす協議については、来年一月十二日午後の開催を予定しております。その後も地域課題解決イベントのようなものを毎月第二土曜日に定期開催していくつもりです。皆さんどうぞよろしく」

「って文花さん、いつの間に？」

「今、思いついたの」

「あのお、プロセスが不透明なんですけど」

「ま、皆さん、こういうことがないように、って。悪いお手本でした。失礼」

「せっかく温まったのに、今でヒヤっとしてしまいました。おっと、おあとがよろしいようで」

いつもの掛け合いを以って、無事終了。拍手はしばらく続く。起立して頭を下げていた千歳はそのまま動けずにいた。

湊、文花が握手を求めて近づいてくる。ちょっといいシーンである。

閉館まではまだ時間があるので、理事と運営委員の新候補各位、清、緑、八広、文花が議論の続きをしている。特に新理事のお二人は質疑で活躍したこともあり、言動に注目が集まる。今は脱ハコモノ論に興じているようだ。

「議論を現場に引き継ぐってのは、何かこう突き抜けた感じでいいスね」 八広が寸評を入れると、

「必ずしもハコがなくても、ってこと。人が集まればそこで何かが生まれる、それも現場。で、現場を焚き付けることで地域が元気に、かな？」 文花が軽くまとめる。

「でも、おふみさんはハコ入りなんだから。ハコがないと困るんでないの？」 先生がからかうも、

「いえ、ハコは卒業です。これからは私も外に出ます」 見事な宣誓で答えてみせた。事務局長にこう言われては、他の面々も動かない訳には行くまい。在来の、あるがままの環境を守る、サポートは最低限、これは川に限らず、どんな自然環境に対しても当て嵌まりそうなこと。明日はひとまず身近な干潟でそれを確かめることになる。

という訳で、会議スペースでは八人が雑談中。南実は一人円卓で、Comeon ブログを見な

がら議論のおさらいなどをしていたが、未だコメント投稿機能が付いていないため、もどかしさが募るばかり。論文ネタを探すことを思いつくと、下の図書館へ。センター閉館まで文花を待つことにした。カウンターにはいつもの二人。一応、明日の段取りなんかを打合せしているのだが、

「やぁやぁ、隅田クン、今日のご苦労でした」

「八八、まとめが今ひとつ、でしたが」

「いやいや、立派なもんですよ。さすがはマネージャー殿って感じ。惚れ直しましたワ」

脱線しているような、そうでないような．．． 千歳は温まるどころか熱くなっている。櫻は顔が火照っている。勤務時間中というのが悩ましい、いや恨めしいお二人さんなのであった。

## 検証

そして日は変わり、気だるい朝を迎える。クリーンアップに取り組み始めてから初、午後からの開催というのはどうも調子が出ない。リーダー、発起人ともに何とも間延びしたような感覚に包まれていて、いつになくノロノロしている。蒼葉はまたさっさと弥生と出かけてしまったので、櫻は一人遅い朝食（または早い昼食）をとっている。千歳はと言えば、目をパチクリやりながら今日の開始時刻をモノログ上の特設掲示板に一応入れ込んでいる。昨日の頃は、パタパタやっていた最中なので、余計に変。だが、ノロノロとは正反対な人達もいる。文花宅で一泊した南実は、十月の回よりもゆっくりでいいだろうとタカを括っていたのだが．．．

「初めて行くところが二箇所あんのよ。早くしないとマズイわぁ」

「だからカーナビ付けば、って言ったのに」

「それとこれとは別。あってもなくても、とにかく余裕持って行かないと何が起こるかわかんないから．．．」

「多少遅れてっても本多さん怒らないでしょ？」

「待たせても悪いでしょ」

落ち着かないながらも気合いは入っている。クルマを出す旨、自ら持ちかけてしまった手前、ここは確実にいきたい。先輩の律儀なところはわかっているが、どうもそれだけではなさそう。いつも以上にフェミニンにおめかししているところからして見え見えである。

業平の自宅兼オフィス到着予定時刻は十一時。そこから例の金森氏の小工場はそう遠くはないが、十一時半には経由することになっている。商業施設に寄って三人で昼をとって、それから干潟に乗り付ける、そんな段取りである。強行スケジュールな観は否めない。助手がいるからいいようなものである。

「私には時々厳しいこと言うのに、自分には甘いんだからぁ」

「まぁまぁ。一泊二食付きで、さらにお昼もご馳走してあげようってんだから。大目に、ね？」

ついつい後輩に頼ってしまう憎めない先輩なのであった。

昨日のうちにお詫びメールが入っていたのはいいとしても、論客のハクンが現場検証に

来られないのはちと痛い。higata@連絡メールはチェックしていた筈なのだが、てっきりいつも通り午前中開催と思い込んでいたばかりに、そうと知った時は後の祭り。午後はルフロンとデートである。(そのルフロン嬢も higata@メンバーなのだが、どうしたことだろう？ この理由についてはまた改めて)

ペースは狂うも、寒さをあまり感じなくて済むのが午後スタートのメリットだろうか。ゆっくり河川敷を散策できるのもありがたい。

花見に興じた河原の桜は、今や落葉の最中。それでも枝にはまだ多くの葉を残している。その色は橙とも朱ともとれる実に鮮やかな彩り。河川敷の斜面には落ち葉の絨毯ができていて、やはり同じ色合い。花見とはまた違う風趣を堪能する千歳だったが、桜と来ればこの女性が来ない訳がない。いつもながら絶妙のタイミングである。自転車を押しながらそろそろと近寄る。

「千歳さん？ どしたの？」

「あ、櫻さん。桜の木の下で櫻さん登場、さすがだねえ」

「フフ、それにしても綺麗ね」

「櫻さんもね」

時刻は十三時過ぎ。優雅なお二人とは対照的に、軽自動車三人組はドタバタ。桜並木の下あたりに来て、ブレーキ？

「おふみさん、装置倒れちゃいますよ」

「ごめんごめん。徐行してたのにね。私、つい強く踏んじゃうもんで」

「あ、あれ、おば様？」

曲がる所を間違えかけて停車したところ、助手席にいた南実が偶然目にしたのは、緑色のセミロングを羽織ったご婦人。クルマを降りて、声をかけに行った。

「あら、貴女は．．． 先生のお弟子さん？」

「ええ、昨日はどうも」

てなことで、正真正銘、緑のおばさんが当地にやって来たのであった。

「乗せてくださるの？ 悪いわね」

業平の隣にちゃっかり腰を下ろすと、早速ベチャクチャやり始める。

「あなた、ゴーヘイさんて仰るの？ カモンさんといい、面白いわねえ」

業平は言葉を返すも何もあったものでない。徐行運転とはいえ、現地はすぐそこ。「あ、先客がいらっしやいますよ」と言うのがやっつである。

今日の一番乗りは、そのカモンさんであった。

「おお、おたまさん、お迎え付きとはいいご身分だあな。さすが作家先生は違うわ」

「ホホ、時には楽しさせてもらわなきゃ」

「立ちっぱなしで旗振ってりゃ、疲れるもんな」

「そういうカモン公は釣竿振りでございますか」

太公望の先生は、片手に竿、もう片方の手には、十月の拾い物、疑似餌をいくつか乗せている。

「この時期はもともと少ないからな。何試しても食いつかねえわな。ま、春先でも、い

いのが釣れたらセンターに持ってくさ。そしてら、その場で料理教室。な、おふみさん、いいだろ？」

「へ？ 魚のですか？」

「そういうこと。それまでに少しでも慣れといてもらわねえと」

業平はバックドアを開けてもらおうと、本日の機材三点セットの点検を始める。当初予定では、簡易発電機と掃除機だけのつもりだったが、金森工場への取材に立ち会ってから、事情が変わっていた。その一大装置を表に出すか出さないか躊躇<sup>ためら</sup>っていると、千歳と櫻、それと詰所の辺りで合流した理事・運営委員の新候補数名とが寄ってきた。挨拶もそこそこ、千歳が冷やかす。

「これのことですかい？ また随分と大げさな」

「あぁ、これは例の情報誌の一件でさ。行って来たんだ金森さんそこ。その日にいろいろと話が弾んじゃって。で、これは今日貸してもらった一品。もっと大型なのかと思ったら、コンパクトなのが出てんだね」

清と緑も何事かと近づいてくる。

「... てな訳でその取材成果は、早ければ明日にでも出回ると思います。情報誌サイトにも部分的に載るでしょう」

「その後、そんな話になってたとはな。紹介した甲斐があったってもんだ。しかし、あのぶっくらぼうな金森氏が...」

信じられんと言った顔の清だが、技術者どうしというのはちょっとでも通じるものがあれば多くを語る必要はないのだろう。この装置、ちょっとした高額品なのだが、コンパクトなのは理由がある。現場で稼働させることの意義をわかっているからこそ貸与してくれた、ということらしい。

「クルマに何かあると大変だから、一旦降ろしましょう。あれ、南実ちゃんは？」

強肩の助手は独りで干潟の偵察に行ってしまったので、ここは業平と千歳と新顔男性の三人でどっこらしょ。廃プラを詰め込むタンクと抽出した油を貯めるタンクの二頭立て。これが噂の「油化装置」である。

原料となる廃プラは現地調達である。プラスチックゴミがそこにあるから、との期待は不謹慎ではあるが、幸か不幸か今回も袋ゴミはそれなりに散らばっていて、事欠かない。ご「予め充電しといたんで、すぐにでも動くんだけど、その油が出てくるまで一時間くらいかかるんだって。なもんで、先にプラ関係集めてもらっていいかなあ？」

さ「プラなら何でもいいの？」

ご「PP、PE、PS、何でもOK。でも純度を保つ意味では、識別しやすく洗いやすいのがいいかな」

ち「そっか、洗う手間、か」

ご「不純物が混ざってても平気なものもあるみたいなんだけど、これは簡易式だから。借り物でもあるし、より丁寧にやった方がいいだろね」

という訳で、容器包装系プラを中心に、汚れが少ないものを拾い集める、これが最優先事項となった。バーコードが付いているものは、可能な限りスキャン。データを蓄積してから油化するんだとか。現場でのネタが増えると、段取りも多段階になってくる。時す

に十三時半。戻って来た南実を含め、higata@メンバー中心に干潟端会議を始める。

本日のプログラムは、まずは現場の写真撮影、全員で干潟表面に散らばるプラを集める、業平は識別しながらスキャンとか洗浄とか、乾いたら油化装置へ、装置稼動中に、消波実験絡みの現場視察など、干潟がゴミを集めるメカニズムや受容能力を検証、十月実施時の手順に沿って、表層ゴミの撮影 大物回収 小物回収、表層分の分別とカウント、その間、ヨシ束の除去 埋没ゴミの回収、油が抽出できたら、発電機を動かす、掃除機スイッチオン（微細ゴミの回収なるか？）、可燃・不燃等、再分別 袋詰め、記念撮影後、解散．．．といった流れ。一般参加型クリーンアップの際も段階豊富だったが、それに匹敵、いやそれ以上に盛り沢山である。

これら十二の手順はリーダーの櫻から訥々<sup>とつとつ</sup>と説明された。新顔さんはこれですでにいっぱいいっぱいになっていたのが、現場を見たら悲鳴を上げそうである。櫻も千歳も、今日はまだ干潟にお目にかかっている。二人はおそろおそろ皆を率いて新ルートへ。

「きゃあ！」 かつてない声を上げてしまったのは古参の方だった。櫻はすっかり「あ」の状態でお口を開けたまま。二の句が出ない。今やヨシの群生の大半は朽ちている。そのため、崖地が露わになっていて、これまで以上にゴミが漂着しやすくなっていたのである。

「八八、リセットして、再リセットして、そんでもってまた今日もやるとなると、再々．．．」 千歳もすっかり動揺している。おちゃのこ再々という訳にはいかぬ。再にも程があるというもんだ。

一団を見かけて、他にも何人か集まってきた。理事・運営委員の新人候補は男女二名ずつがこの時点で揃った。昨日の聴講者もチラホラ来ているようだ。

「あ、失礼しました。改めまして、ここがその現場でございます。ゴミを集める干潟のパワー、これでよくわかりかと．．．」 櫻はこう言いながらも、呆れ顔。

「暫定とは云え、つい受け容れOKとか決めちゃったけど、こんなだと確かにねえ」 南実も自嘲気味になっている。

初めて当地を見る人達は、むしろその現実をしかと受け止めているようで、さほど驚いてもいないようだ。緑のおば様に至っては、泰然かつ自若。

「これがありのまま、ってやつでしょ。とにかくやるしかなさそうね」

「それにしても、石島のトーチャン、遅いな」

清が気付くまで、誰一人、肝心の人物が不在であることに思い至らなかった。娘達への並々ならぬ思いを吐露してまで事情を打ち明けたのに、これでは報われないというもの。

トーチャンの代理人が現われたのはこの時である。九月の登場時よりはラフな出で立ちながら、やはり貴婦人風。顔見知りや何人か見つけると、

「あ、皆さん、すみません。遅くなりまして」

「京<sup>みやこ</sup>さん、どうして？」

南実がいち早く対応する。文花は初対面ながら、親近感を持ったようで、すぐに自己紹介を始める。

「初音嬢、小梅嬢のお母様ですか。姉妹が麗しいのは母譲りってことですネ」

「いえいえ、似てるのはじゃじゃ馬なところでしょう」

姉妹の話は承知しているので、その母親ということで周囲の目は温かい。あのお騒がせ

課長の妻という見方はこの際なし。

「今後は事前に説明会を開くなり、とにかく素直に話をすることを心がけたい、と申し  
ておりました。皆様にはよろしく、と」

「了解しました。報告の中にはその旨記載して、聴講された方々はじめ、広く伝えるよ  
うにします」

昨日のまとめがようやく出た感じだが、まだまだこれから。実地見聞をしないことには  
結論が固まらない。

「それにしても、旦那<sup>タンナ</sup>は何だ、ってんだよな」

「当人がいないことには、ねえ？」

明らかに自分よりも年配の男女がいることにやっと気づき、細君は一寸焦る。

「ご挨拶が遅れまして。石島京と申します。いつも主人が．．．」

旦那が駄目な時こそ、妻の出番。一段と柔らかい物腰で以ってフォローする。京を代わ  
りによこしたという点では失点を取り返して余りある。これも策のうちか。

「ま、本人も反省してるんだらうけど、とどのつまり、話の進め方の問題だった、って  
ことさ」

「いいことをしたつもりでも、手続きがダメだとアウトですよ」

手続き関係は元来役所の得意技の筈なのだが、時と場合によるらしい。だが、この話、  
石島家でも通用するのではないか？

「てことは、お嬢ちゃん達にも何かと誤解されてんじゃない？」

「それよりも何よりも、主人は放ったらかしのことが多いですから。良かれと思うこと  
を理由とともども話して聞かせなきゃいけないのはむしろ、わたくしの方でしょうね」

干潟端会議はいつしか家族のお悩み相談会のようになっていた。緑は京にとっていい相  
談相手になりそうだ。

そうこうしているうちに現場に集う人数は増え、総勢二十名弱になっている。晴天、微  
風、午後の陽射し．．． 好条件はそろってはいるが、十二月の川辺行事でこれだけ集ま  
ることもなかなかないだろう。文花が思い描く現場、ここに在り。ハコはなくとも場があ  
れば、である。

千歳がデジカメを取り出すのに呼応するように、櫻は昨日の受付名簿を引っ張り出す。

「えっと、玉野井 緑さん、はい．．．」 上から氏名を読み上げていく。このように点  
呼をとることで、お互い何となく和むものである。自己紹介は割愛可。だが、

「そうだ、皆さん、ボランティア保険とかは？」

参加者の半数はボランティア保険には加入していないことが判明。ただし、今回の視察  
(+クリーンアップ)は前々から予定されていたことなので、行事保険は掛けてあった。  
堀之内先生の助言が役に立っている。

「じゃ皆さん、十分気を付けて」 と文花が会場責任者らしく声をかける。が、

「魚が苦手な方は特に。出てきてビックリ！で転んだりなさらぬよう」 櫻がおどかさ  
もんだから、斜面で滑りかけてしまう責任者さん<sup>なの</sup>であった。

「櫻さん、覚えてらっしゃい！」

「おお、こわ」

一行は注意を払いながらもクスクスやっている。ゴムボートが作った草分け道は、さらに幅を広げ、人々を緩やかに導く。干潟に通じるアクセスは、今のところ整備無用であることがまず立証される。だが、これは季節限定。夏場になれば背高草などで茫々となるのは経験者なら承知済みである。だからと言ってスロープだとか階段状の工作物を設けるのはどうかと思う。あくまであるがまま、でいいのである。

その新ルートだが、<sup>かよう</sup>斯様にオープンになったおかげで、ゴミの流入アクセスも良くなってしまったようである。それは今までは見られなかった怒涛の漂着とも呼ぶべき現象。六月がいればきつこう言うだろう。「ゴミも上陸したいのさ」こうなると否が応にも注意力が高められる。ペットボトルを除け損ねたり、スプレー缶を踏み外したりしたら、即、転倒である。弁えある視察団一行は、隊列を作り、全員無事、下り立つことができた。が、漂着物で溢れている上にこの人数。舞台は満員御礼となるも、どうにも窮屈だ。

崖地の崩落具合は二班に分かれて見に行くことになった。ガラクタを踏みつけないよう、かつヨシの枯れ枝が成すマットを踏みしめつつ、先発隊は下流側へ歩を進める。後発隊は干潟の中央部にて、長い枝が折れて干潟に刺さる図や、その周りに打ち上がった丸太、角材、板など木々のコレクションを鑑賞している。今のところは鑑賞レベルで構わないが、この後は力仕事が残っている。興々にして恐々、そんな観念だろうか。

先発隊は崩れた崖が新たな地形を形成していることに息を呑んでいた。その変化を知る者、初めて見る者、両者ともにインパクトを受けている。それはまるで切り立った入り江の如く。ポケット、隠れ処、<sup>とかく</sup>兎も角ここに一度嵌ったら、出たくなるような空間が出来上がっていて、すでに飲料容器等、漂着先を見つけたゴミのいくつかが安住するようにスッポリと収まっている。

自然の作用を目の当たりにした上、ゴミの抜け目のなさを認識することになる。これはどうしたらいいものか。合意案に従えば、補強なり補修ということになるが...

「自然の働きを学ぶってことじゃ、このまま放っておいて観察するのも悪くないわな」

「でもセンセ、ゴミも溜まっちゃうとなると自然作用が巧く働くかどうか...」

「わざと回収させるんだったら、この地形、面白いんじゃないか？」

「ゴミを取ろうとして崩れてきちゃったら、と思うとちょっと」

公募以前に理事候補として名を連ねていた四人が議論を交わす。他の先発隊諸氏は四人を取り巻きながら、頷いたり、発言したり、まちまち。埒が明かない感じなので、櫻、南実、京はじめ、後発隊も集まってきた。

「今日ゴミを取り除いて、安全性を確かめてみて、崩れそうならやっぱり固めてもらう、ってことでどうでしょう？」南実のこの発案を受けて、

「その後は経過観察して、また入り江になっちゃったら、それはそれで新名所ってことにすれば」櫻がまとめる。

何となく案が固まったところで、先発隊の一部はプラを集めながら業平のもとへ。彼は一人、干潟中央に散らばる袋類、特に[プラ]の識別表示が付いてそうなのを重点的に集めていたが、これは段取り違い。プログラムのは全員で、の予定だった。現場特有の何かが行の動きを急かしている。プログラムの方も怪しい。現場検証が先んじて、撮影係はその役を果たしていないように見受ける。

「いけね、廃プラ回収前ってのを撮ってないかも」

「私を置いてこっちに来ちゃうからよ。せいぜい、入り江のプラを撮っておくのね」

干潟に立つ前に何枚かは撮影しておいたから良かったものの、スローな彼にははあるまじき失態。しかも彼女の機嫌まで損ねてしまっただけではもう．．．である。穴があれば入りたい心境の千歳の足元には、夏場よりも大きくなっている巣穴がチラホラ。入れりゃ苦労はしない。

大人数に反応したか、枯れたヨシ群の間から何とヤブ蚊が出てきた。夏には見かけなかった筈だが．．．

「な、なんで？」

「私達、何か悪いことしたかしら」

「あの辺に殺虫剤のスプレー缶が転がっていたような．．．」

「いくら何でもそりゃ<sup>ひんしゅく</sup>蟻蹶でしょう」

「はいはい、お二人さん、ここはひとまず退散退散」

文花に追い立てられるような形で千歳と櫻は入り江を離れる。蚊の発生も自然の摂理となると、受け容れざるを得ないところだが、人によってはいつそヤブ地を消滅すべしと訴える向きもあるだろう。だが、十二月初旬にしては陽気な気候がもたらすのだとしたら、蚊の住処をどうこうしたところで効果は薄い。発生源を抑えるという意味で対症療法ではないかも知れないが、より根本的な策が求められることは判然としている。これは漂流・漂着ゴミについても同じ。

本日のプログラムのうち、アクセス通路の整備、崖崩れの修復、この二つの要否については一応検証が済んだ。あとは実際に波が来た時の状況考察を残すのみ。順序は前後してしまっただが、とについては、参加者の数人を交えて業平が進めているところである。となると、今はか。干潟のメカニズムとは言うけれど、根源に遡った抑制策についても討究したいところである。

「どうでしょうね、皆さん。これを片付けるのは人の使命ってのは実感していただけると思うんですけど、果たして干潟に甘えてしまっていていいものか、ということなんです」

「今あるゴミを何とかする、ってのと、出るであろうゴミをいかに防ぐか、その両面のことですね」

櫻と南実、いつしかいいコンビになっている。higata@メンバーで論議していてもいいのだが、折角の機会である。櫻は再び名簿を出して、指名作戦に打って出る。現場にいるからこそ成り立つディスカッションがある。それをわかる者でなければこうした采配はできない。

「そうそう、さすが櫻さん」 文花は満足そうである。

廃プラを片付ける中で思い至ったらしく、「生分解性プラの普及を」とか「容器や袋はデポジット化すれば」とか「捨てるのがもったいないと感じるような容器・包装にしたら」といった声が出たのには、文花・櫻・千歳もビックリだった。南実先生は、

「生分解にバイオマス、今は総称でバイオプラスチックって言いますが、これを普及させることは次善の策でしょうね。そうしないよりはした方がって、ことです。そもそもプラスチックじゃなきゃいけないのかって、買う前に考える方が先決。ね、櫻さん？」

「え、あ、そうですね。思いつきで恐縮ですけど、プラスチック依存度チェックとかってゲームソフトが何かあると、予防につながるかもって思います。どうでしょ」

一団はどっとなっている。勢い話はさらに深まって、買う時に購入者登録とかをして、購入量に応じた自動課金をしてはどうかなんてアイデアまで出てきた。それにヒントを得たかどうかはいざ知らず、いい加減な捨て方をした奴を洗い出せばいい、てなことを仰る方が現われた。緑のおば様である。

「探偵ごっこじゃないけどね、これを使えば何かわかるんでないの？」

作家は作家でもミステリー作家だったりするもんだから、小道具がまた凝っている。年季の入った虫眼鏡を出すや否や、置き去りになっていた釣り餌袋をつまんで眺めてみる。  
と、次には指紋を採取して照合するシステムがあれば犯人捜しもできるだろう、なんて話に。

「おたまさんよ、そりゃ面白えけどよ、処罰とかしようがねえだろ、それじゃ」

「自動で課金するってのは？」

「ま、じっくり考えて新作のネタにするんですな」

「ま、処罰どうこうはいいとして、漂着ゴミで以って何か一本書けそうね。ゴミのミステリーで『ゴミステリー』って、どう？」

「何だい、ただのゴミかと思ったら実は凶器だったとか？ ハッハ」

「先生は犯人役で出したげる。ヨシヨシ」

ちっともヨシヨシじゃないのだが、ご年配コンビの小噺で場はすっかり盛り上がっている。プログラムの脱線してしまった観はあるが、ゴミについての関心を高めてもらえたのなら結果オーライだろう。干潟がいかにゴミをキャッチするか、これは時間をかけて定点観察しないことにはどうにも明解にはならない。ただ、水位の高低差、つまり満潮時に漂着したものが干潮時に取り残される、という仮説は大いに説得力がある。消波ブロックで漂着が遮断されるというのはもっともな理屈である。

「下手に遮られちゃゴミステリー書けなくなっちゃうワ」

干潟にはお気の毒だが、こういうニーズもあるので引き続き受け容れてもらうとしよう。

議論は再び対策面に移る。参考意見として拝聴したいとの石島夫人の申し出もあったので、ざくばらんに並べ立ててみる。

ち「例のパーベキュー広場にリサイクルステーションを常設しちゃうとか」

ふ「いっそ、油化装置をゴミ捨て場に併設して各自試してもらったら」

さ「それは漂流・漂着前の対策でしょ。やっぱりもっと遡った対策も考えないと。ホラ、割れ窓の話じゃないけど、窓を割られる前にできること、って何かあると思うんだけど」

み「櫻さん、データカード使って調べるのって、正にそれですよ。世界全体で対策考えようって、ね？」

さ「あ、そうだった……」

き「ま、あとはミステリーでも何でも、作家先生にさ、時代に警鐘鳴らす一品書いてもらうってのも結構イイと思うよ。俺のはどっちかつつと専門書だけど、緑さんのは大衆向き。な？」

その作家先生は、今度は厚手の手帳を手になっている。早速何かを書き留め始めているよ

うだ。「そういう手もあったか」 higata@メンバーは一様に得心した面持ちで手を打っている。

一方の緑はデータカードの話聞いてキョトンとしている。

「あら、ちゃんと調べることになったの？」

「いえいえ、銘柄とか具体的な品目までは調べないので。引用できそうなゴミはしっかりメモしてもらった方が」 千歳がフォローするも、

「バーコードが付いてるのは、Mr. Go Hey が読み込んでくれますから、メモしなくても平気ですよ、多分」 文花がチャチャを入れる。

こういう日に限って船とか水上スキーとかが来ない。波の件はひとまずお預けとして、KanNa の特設掲示板にご意見などを書き込んでもらうことにした。管理者曰く、

「念のため書き込み用のIDを設定します。ご面倒かけますが、パスワードの代わりとしてhigataと打ってアクセスしてください。お名前は実名でなくても構いません。夕方にはわかるようにしておきますので、よろしく願います」 さすがは情報担当である。

緑は作品中の人物（女探偵？）さながら。虫眼鏡、手帳に続いて取り出したるは懐中時計。十四時を過ぎ、短針と長針が重なる時分になっている。それを見てリーダーが声をかける。

「では皆さん、ここで第一部はお開きとします。第二部、クリーンアップは今から十分後、二時二十二分になったら始めようと思います。お荷物はクルマのトランクへ」

十四時を過ぎたくらいから、グラウンドでは社会人野球チームが練習を始めていた。少年野球ならあまり心配は要らないんだろうけど、社会人となると気がかりなことがある。そう、自分でもかっ飛ばした特大ホームランである。試合が始まる前に、油の抽出を終えられればいいのだが、取っ掛かりが遅れた分、微妙である。文花のクルマが盾にはなっていると云え、リスクにさらす状態で実機を稼働させるというのは、業平にとっては本意極まりなかった。が、それ以上に本意でないのは、クルマはどうでもいいのか、と誰かさんに責められることだろう。グラウンドの様子を気にしつつも、然るべく手を打つことにした業平は、クリーンアップ開始前にそそくさとヨシの枝を集め出す。

「業平君、どしたん？ 段取りではまず大物ゴミが先で、枯れ枝は後じゃ．．．」

「いやいや、おふみさんの愛車にさ、ボールが飛んで来たらヤバイっしょ。取り急ぎボンネットとフロントガラスをカバーできればいっかな、って思った訳」

「ああ、試合始まるのかあ」

三十男の動きがあわただしいので、ひと休みしていた参加者各位もザワザワし始めた。手順を再確認していたリーダーは「何事？」となる。女性研究員は「ああ粒々が」と気が気でない。

視察団の数名が退場したのと入れ替わるように、やって来たのはチーム冬木の二名。当人と若手女性の組合せなので、思わず「ご関係は？」とツッコミを入れたくもなるが、そうは言っていられない。

「本多さん、先月はどうもお世話様でした。おかげ様で．．．」

「ちょうど良かった。榎戸さんお願いします」

「？」

乾いていて、夾雑物が少なそうな枝を選びながら、フロントガラスに並べて行く千歳。それを見て冬木は合点が行ったようだ。クルマの持ち主も遅れ馳せながら現われて、ザワザワの発端を了知する。

「あらあら、中古なんだから別にいいのに」

「いえ、何かあってクルマ動かなくなっちゃうと大変なんで」

つい自己都合な本音が出てしまった業平だが、文花は意に介さない。

「ま、ただ片付けられちゃうよりは、ヨシも本望でしょう。ヨシヨシ．．．」

**バック**ドアを開け放って屋根代わりとし、油化装置はその下に持つてくることで、とりあえずの安全策も講じた。屋根の上にも枯れ枝を並べて万全を期す。三人の男手があれば、造作なく済んでしまうものである。

PM 2:22 になった。第二部のスタートである。

re-re-reset

結構な人数に残ってもらっているため、分担を決めた方がいいのだが、プログラムのよりも が部分的に先行してしまったこともあり、まずは段取りの組み直しから始める。着手前の撮影は済ませてあったので、A．男衆中心に大物ゴミの除去、B．並行して表層ゴミの回収、C．表層分の分別とカウント、D．スクープ系などの撮影、ゴミステリー用の記録、E．残る漂着ヨシの撤収 埋没ゴミの回収、F．微細ゴミは掃除機に任せてみる、あとは当初プログラムの 以降と同じ、ということで到着。

「途中、波が来たら手を休めて、皆さんで検証を．．．」

櫻がこう言い出したところで、待望の波が来ることになる。下流から上流に向かって程よい速さでプレジャーボートが過ぎて行った。退潮が進んでいたのも、干潟面は広く、装置担当 兼 荷物番の業平を除く全員、至近距離で波を検証する恰好となる。当地特有の小刻みな断続波は、皆々の緊張感と照応する。うねりはやがて幾重もの波を起こし、干潟に到達し始めた。

「キター!!」

「は、激しい」

新任理事候補の男女もさすがにたまげていたが、程なく出たご感想は、「波も余興のうちでは？」とか「わざわざブロックする程でもないような」と至って冷静。初めての体験者の声によりけり、ということからすれば、やはり消波実験は無用になろう。京は他の面々の分も含め、ひたすらメモをとる。千歳はデジカメをずっと構えていて、動画モードで撮っていた。動いている波 = 動かぬ証拠、である。

十四時半、やっとこさ段取りAがスタートする。清と緑のご年配コンビは別行動。女性陣は、各自持参のレジ袋にペットボトルなど目に付く容器類を放り込んでいるが、そのあまりの量に袋が追いつかず効率がよろしくない。中程度の袋を手にして文花は、取っ手の付いたプラカゴを見つけると、方針転換。これも現場力のうちか、漂着物を見事、クリーンアップ用具に仕立ててみせる。手当たり次第にポイポイとカゴに入れていたらすぐ

に満杯に。

「文花さん、カッコイイ！」

「この冬流行のマイバスケットよ」

「じゃ、あとはお任せしちゃおっかな」

「次は櫻さんの番。残念でした」

冗談はさておき、実用性が高いバスケット作戦。大量であっても軽量の物であれば、こういう形でドシドシ運んでしまえばいいのである。文花と櫻が何度か往復するうちに、流木類など大物も大方片付いていた。この時点ですで見違えるようにはなっている。再々リセットの目処が立ってきた。

表層になお散らばるは、殺虫剤などの各種スプレー缶、栄養補給系ドリンクの瓶類、喘息用か何かの吸入器、そして化粧品やら日用品やら．．． 毎度、ドラッグストア並みの品揃えである。

今回の特徴は、とにかく飲料・食品関係が全体的に多いこと。ペットボトルを筆頭に、缶飲料もパック飲料も数十単位。食品缶とそれに対応する金属フタもあれば、卵のパック、果物を包むネット、大小ストロー、納豆のお一人様用容器、さらにはクイックメニュー店のテイクアウト用味噌汁カップまでである。これらは一同手持ちのレジ袋に<sup>こぼ</sup>って集められていった。

サッパリした新名所、入り江の辺りを歩いていた清と緑は、段取りBの様子を眺めながらも、目の前の屈曲した枯れヨシの合間を覗き込んでいた。

「ありゃりゃ、あんなところにも何かの袋が」

緑が指差す先に釣竿を差し入れる清。枯れてはいても、手を伸ばして掻き分けて、というのはちと厳しい。竿の先に刺さったのは、

「八八、ぼた餅だとよ」

「崖からボタもち、と」 手帳に綴る。

「何だよ、それじゃダジャレじゃねえか」

「もし毒が入ってたら？ ただの餅じゃ済まないわよ。被害者は正に崖っぶちだった訳。ダイイングメッセージになるように、崖に置いて流されないようにした。スリリングでしょ？」

「先が思いやられるわ．．．」

「何ですって！」

「おおおお、これだからシ、ヒステリー作家は困るんだ、シシ」

作家先生が杖でも持ってたら、ピンピンやられそうな一幕である。

さて、段取りDの記録の片方はこんな調子なので、ここは古参の撮影係がしっかりしないとイケない。だが、回を重ねて見慣れてしまっているせいか、スクープ系と言ってもピンと来なくなっている。ある程度個別には押さえてあるが、モノログに掲載するレベルとなるとどうだろう。物流用木製パレット、ブラウン管テレビ、カーテン状の繊維製品、今日はそんなところで落ち着きそうである。

業平の隣で、南実による即席分別講座が開かれる。

「データカードの見本をご覧くださいとわかる通り、何が発生源か、というのは概ね見

当つくと思います。でも分けやすいのは可燃か不燃か、とか、プラか金属か紙か、といった素材別、でしょうね。今日は試しに素材で分類しましょうか」

主だった廃プラはさっさと集めてカウント済み。油に変身中のもの以外は<sup>ひとところ</sup>一所に固めてあって、細々したゴミについてはあえて現場に残してある。今、平地に拡げてあるのは、割と手に取りやすく、識別もしやすいものばかり。種々雑多ではあるが、皆さん分別盛り。テンポよく<sup>え</sup>振り分けられていくのであった。それにしてもペットボトルをこうして集めてみると、その量の異常さがよくわかる。量二つ分くらいにはなりそうだ。

小型ゴミや埋没ゴミを除き、この時点で暫定カウントを行う。今日はカウンタ要らずのルフロンさんがいないので、センター備品の手動カウンタを使って主だった品目を数え上げる。結果は次の通り。

ワースト1(3)：ペットボトル/百二十三、ワースト2(5)：食品の包装・容器類/六十二、ワースト3(2)：プラスチックの袋・破片/五十五、ワースト4(1)：発泡スチロール破片/四十八、ワースト5(4)：フタ・キャップ/三十七(\*カッコ内は、十一月の回の順位)。順位に変動はあれど、上位品目は不動である。後続は二十から三十ほどの品目が肩を並べる。ボトル缶を含む空き缶類、スプレー缶、紙パック類、個別包装類、レジ袋、硬いプラスチック破片などなど。漂着硬球、日用雑貨、ストローが十前後と続く。

データ入力画面は、更なる version up が施され、南実の言っていた素材別での入力もできるようになっていた。文花はケータイを取り出すと、画面にアクセスし、その新しいテンプレートを呼び出す。発表のあった分を入力し終わると、あとは目に付く塊を数えながら、ピピとやっている。現場での操作性は確立できてきた。あとは、協賛金を頂戴できるレベルに仕上げつつ、PC版のリリースを待つばかり。

十五時を回った。ここからは段取りのEに移るところだが、Fの方も準備が整ったようだ。装置稼働からすでに一時間以上が経っている。発電機を動かすに足るだけの油が採取できたかどうか、注目が集まる。

「おお、いい色だ」

薄い黄色の液体を取り出すことに成功。五百 ml ばかりあるので、全く動かせないということはなさそうだ。簡易発電機に注入し、エンジンを動かし、干潟へ持って行く。粒々が多く散らばってそうなところに設置したら、お次は廃品掃除機の出番となる。プラグを発電機につないだらスイッチオン！ ノズルの先には大きな漏斗状の特殊吸引装置付き。

「金森さんに相談したら、業務用の漏斗に格子網の円盤を取り付けてくれたんだ。これなら間違えてカニとかに当てても吸い込まないだろうって。小型の袋は難しいけど、概ね三立方<sup>せんち</sup>糶未満のものならこれでOK、かな？」

人手では拾いにくい発泡スチロールの断片、プラスチックが微細化したもの、そして勿論粒々も。吸殻も小さいものなら吸引することがわかった。努力した甲斐あって、発電機が止まることも掃除機が故障することもなく、まずはめでたく実機試験終了。吸引の音が止まると、どこからともなく拍手が沸き起こる。だが、

「ねえ、Go Hey さん、この掃除機を充電式にすれば何もこんな大がかりなことしなくて

もいいんじゃないの？」 文花が軽くツッコミを入れる。

「ま、いい感じだけど、水にも強くないとね。あとは吸った粒々を自動で選別してくれる装置があるとありがたいんだけど」 先輩に釣られて後輩も続く。

「油化装置も不思議よね。自分で出した油を自分が動くのに使えないのって何か変じゃない？」 櫻もなかなか手厳しい。

ある意味、モテモテな業平だが、こうも立て続けに来られちゃたまらない。しかもどの声もごもともだから余計にツライところ。

「いやぁ、これはこれで立派なソーシャルビジネスモデルでしょう。充電し損なうことだってあるだろうし、現地で油が調達できるってのはとにかく素晴らしい！」 冬木が助け舟を出す。油化装置が充電式ってのがまた微妙ではあるが、その場で役立つ実機モデル、という点では合格だろう。

業平と南実は吸い上げた粒々関係をバケツ水に浮かべて、あぁだこうだとやっている。他のメンバーは、段取りEを行うも、今までと違うのは枝を持ち上げてそのままバサバサやってから陸へ持ち運ぶスタイルになっていることだろう。埋没ゴミは思ったほど出てこなかったのど、漂着ヨシを退かしたところで再び掃除機を稼働させる。消波実験は不評不発だったが、こうした家電製品を使った実験は好まれるようで、発電機が止まるまでとは言わないが、皆で代わる代わる試している。今となっては貴重な油だが、こういう使われ方は許されよう。微細ゴミは一朝一夕では吸引しきれないのである。

厄介モノのペットボトルについては、半分程度は再資源化可能と見た。別働隊が洗い上げて、十五時半には半乾きになる。その傍らでは、可燃・不燃等の再分別が進行中。木製パレットは足場か何かに使えそうとのことで現場放置。ブラウン管テレビは金森工場行き。その他の再資源化関係も今回はクルマで運ばれることになった。可燃少々・不燃多々の袋詰めが終わり、千歳がステッカーを貼る。プログラムはこれにてほぼ終了。あとは再々リセット (= re-re-reset) 後の干潟にて記念撮影となる。

撮影係は、新ルートの入口から見下ろすような感じでデジカメを構える。早くも沈みかかっている夕日が干潟から川面にかけて残照を落とす。その紅がやけに眩しくて、シャッターを押す手が震える千歳だった。(「夕日が目に沁みる」アゲイン?) その後は冬木が情報誌用に撮る、何人かのケータイ所有者も入れ替わり立ち代わり、と続く。流域の人気スポットである何よりの証左である。

さ「今日は皆さん、長々とありがとうございました。ご意見ご感想は例の KanNa 掲示板の方にぜひ」

ち「合言葉は『干潟』。半角小文字・ローマ字です。書き込み、お待ちしております」

毎回恒例、一同礼&拍手を以って散会。社会人野球の試合も丁度終わる頃合いになっていた。

結局、ホームランボールが直撃することはなかったが、クルマまであと十メートルというところに一球転がっているのを見て higata@各位はザワザワ。引き揚げる選手めがけて、南実が遠投で返す。今は本塁側がザワついている。

「ちょっとヒヤヒヤものでしたね」

「ガードしといたに越したことはないって、よくわかったわ。サンキュです」

業平と文花が微笑み交わす脇では、クルマから降ろした枝を結束機で縛る先生と、それを見守る女探偵が居る。千歳と櫻も何となく一緒。つまりクルマの周りには都合三組の男女がいて、ちょっとイイ感じという次第。離れたところでなお残っているのは、冬木、京、南実の三人。

「それにしてもジャンパーとか衣類も流れ着くなんて」

「河川敷生活者が着てたものかも知れませんか。あの状態だとさすがにリサイクルには向かないんでしょうけど．．． あ、京さんが勤めてたスーパーって自社ブランドの衣料品、回収してるんですよね？」

「ええ。でも自社品だからって、漂着衣料ってのはやっぱりねえ。漂白ならまだしも。ホホ」

冬木がここで冴えたことを云う。

「自社ブランドの食品とか飲料とか、そういうのの容器包装類ってのはどうですか？ 洗って乾かして持ってけば引き取る、そんなサービス」

「特定できればそれは．．． ああ、いわゆる事業者責任ってやつ？」

「抑制策の一つにはなるでしょうね。売ったらそれでおしまい、じゃなくて再資源化できるものはしっかり回収して次に活かす。CSR以前の話。社会的責任として当然と言えなくもない、かな」

冬木としては情報誌ネタ、南実としては企業へのアプローチネタ。京は元勤務先の話ということであれば取り次ぐのは十分可能。夫君の名誉挽回の心算<sup>つもり</sup>はないが、今日の第一部での談議がしっかり頭に残っている以上、何らかの貢献はしたいと思う。いや、少しでも役に立てるなら願ってもないこと。CSRつながりで言うなら、冬木はそのスーパー本部の担当者とはすぐにでも話ができる。

かくして、干潟端での何気ない雑談は「三方好し」に通じる要談となり、新たな展開への布石が打たれることになる。三人から七人に増えたところで、まとめとしてはこうなった。文花曰く、

「じゃあ、京さんから店長に話をしてもらって、うまく行けば本部のCSR担当にも同席してもらおう、と」

南実が継ぐ。「榎戸さんと私とで話を聞いてきます。本当は漂流漂着の話もしたいけど、まずは事業者責任に沿った取り組みを伺おうという趣旨で」

ここで業平が一石を投じる。

「今日スキャンした中に実はさ、そこの自社ブランド品も混ざってたんだ。それって何か使える？」

「現物があればよかったけど、原料に戻しちゃいましたよね」

「あ．．．」

「いいですよ。次回、一月もやりますよね。その時にしっかり証拠を押さえれば。もし見つからなくても、今回の読み込みデータがあればないよりはいいでしょうし。となると、話が大きくなるから．．．」

これで同席者を増やす必要が出てきた。業平はPC持参で必須、それと現場に詳しい人物が要る。千歳か櫻か両方か。対談形式とすると人数バランスを考慮しないといけないか

ら悩ましい。それでも higata@にこの話題を振ってみて、出れる人には出てもらおう。先方とは年内に日程調整して、年明けどこかで一度、と相成った。

十六時ともなると段々暗くなって来る。清と緑の著述家コンビは、日が沈みきるまでは散歩するんだとかで、仲良く去って行った。今日はスクーターではなくバス+徒歩で来た京はクルマに便乗して、早速店長に会いに行くと言う。南実も同じく商業施設までは同乗。文花は運転席、助手席には業平。クルマ組はこの四人というのが決まったところで、取り残された観のある冬木がポツリ。

「皆さん、忘年会とかは？」

「ハハ、そう来ましたか。メーリングリストでもそういう話なかったから何とも。でもホラ、音合わせ会はしますよ。年の瀬の祝日だけど。それが代わりですね」

「櫻さん、それって僕もいいんですか？」

「あの楽曲データ聴いてピンと来るようでしたらぜひ。ねえ、ソングエンジニアのお二人さん？」

文花はカラオケ会には居合わせなかったもので、音楽的傾向どうこうというのは定かではないが、この音合わせ会には参加する意向を固めている。これに冬木が加わるとなれば、higata@メンバー十人全員が揃うということになる。

「そうそう、見てて思ったんだけど、あの発電機ってアンプスピーカーもOKだよな」

「燃料をしっかりと充填すればね」

「てことは、ここでも演奏会できる訳だ。まあ小規模だろうけど」

「ははあ、千ちゃんの考えてることわかってきたぞ。音楽を通じた訴え。違う？」

「大衆小説の話がヒント。ゴミについて考えてもらう曲ってのもアリかなあって。荒川とか干潟とかは想定してたけどさ、メッセージソング風も一つ」

と、主にエンジニアのお二人で音楽放談中。同じ頃、気になるリズムセクションの二人はと言うと、何と都内某所のスタジオでドタスカやっていた。こちら、弥生に斡旋してもらったとのことで、なかなか要領がいい。だが、

「これハチ、そこ早い！」

「こういう曲あんまし叩いたことないから」

千歳原曲、業平編曲のダンスブルナンバーがモニタースピーカーから小出しで流れている。間奏に差し掛かったところで待たがかかった、という一幕である。

「こっから舞恵のコンガが入るんだからさ、ドラムがうまく橋渡ししてくれないと」

「コンガらがっちゃうってか？」

舞恵はその辺にあったカウベルのバチで一発。ハチ君、とんだトバッチリ？

音合わせ会に先立って、ということではあるが、千歳と業平の知らない間に話が進んでいる。今日は全部で四曲、音、いやリズム合わせをする予定というから見上げたものだ。

クルマは詰所脇で停まり、ステッカーを貼った袋が冬木と業平とでせっせと下ろされる。クルマが戻ってくるまでの間、干潟端では、京と千歳、南実と櫻、という組合せで何やら話をしている。

「昨日は結局お話できなくて．．． 南実さん、何て言うか、勘違いしてたみたいね、

私」

「いいえ、私こそ紛らわしい真似して。自分でもよくわかんなかったんだけど、そう、兄を彼女にとられちゃう妹の気持ち、ってとこだったみたい。ま、兄と妹の組み合わせだと、妹の方はなんてゆーか、こう張り合おうとするでしょ？ どうもそういうのが抜けてなくて。勝手に櫻さんをライバル視してたってゆーか。やーね」

南実はまだ涙目になってきた。櫻はレンズを落とさないためにも、ここはぐっところえる。

「小松、いや南実さんでいいのよね。今後もどうぞよしなに。お願いします」

櫻が手を差し伸べると、南実は両手で受け止めた。

「兄、いや千さんをお願いしますね。櫻姉」

「姉ってか。あんまり変わんないのに、何か変」

「学年は一つ違うでしょ？ 十分お姉さんよ」

京とCSRの話なんぞを真面目にしていた千歳だったが、笑い声を聞いて新姉妹のところにノコノコやって来た。

「あ、千歳さん、いいとこに来た。南実さんの隣に並んでみ？」

「は、はい」

「ウーン、そうだなあ、確かにどっか似てるような．．．特に目、かな？」

「ヤダな、櫻さん。思い出し泣きさせる気？」

今更ではあるが、千歳は南実を見入ってみる。

「千さんまで、そんな。見つめないで」

南実が千歳に寄せる感情は恋愛のそれとは違うことはわかった。だが、その逆は？ 櫻はふとこんなことを考える。「もし、私より先に南実さんと出会ってたら、どうなってたんだろう？」 千歳も正直わからない。顔がどこかしら似ていれば親しみを覚える、情も移る。これは自然な流れだろうけど．．．。

笑顔も似ている気がするが、決定的に違うのは、えくぼの有るか無いか。これまでも少しは気付いていたが間近に見たのは初めての千歳。南実のえくぼは魅力的である。その近く、頬を伝うのは涙の細い線。心動かされない訳にはいかない。

「こ、小松さん？」

「あ、平気平気。夏女は冬に弱い。寒風がね、目にしみるというか」

「．．．」

四人を乗せたクルマが発った頃、西の方角では深い青が拡がって来ていた。千歳はまだボーッとしている。

「今日は廃プラも消化しちゃったし。手ぶらで帰るのって初めてネ。千歳さん、聞いてる？」

「あ、ええ。それはそれでいいんだけど、今日って櫻さん恒例、いいもの、やったっけ？」

「八八、玉野井のおば様があれこれ出すもんだから、圧倒されちゃって、その」

初姉のはデジタルだが、櫻が持って来ていたのはアナログの温湿度計。

「安物だからあんまり正確じゃないけど、片手で持てるのがポイント。ちなみに今は．．．  
十 ? 湿度は四十%。この時期にしては、寒くないし、乾いてもない、か」

「櫻さんといると、暖かいし、潤うし、へへ」

「何だかなあ。熱でもあんじゃないの？ これで計って差し上げましょうか？」

十六時半である。冬至に向けて日脚はどんどん短くなっていて、夕闇が包み始める。別際にこういうセリフが出るのも無理はない。

「暗いなあ、怖いなあ。一人で帰るの、ヤダなあ」

「妹さんに迎えに来てもらったら？」

「へえ、そういうこと言うんだ。やっぱ、どっかおかしいんじゃない？」

「へへ、冗談冗談。まずは拙宅でひと休みして行ってくださいな。で、お帰りの際はちゃんと自転車でお供します。OK？」

「そう来なくちゃ」

一方、クルマ組の四人は、商業施設に到着したところである。

「あ、京さん、レジンペレット、また使います？」

掃除機で集めたペレットは選別され、ジッパー袋に入れてある。色とりどりなので見るだけでも楽しい。

「実は以前いただいたペレットで試してみたんですけどね。隙間ができないように無理やり伸ばしてたら何だかただの円盤みたいになっちゃって」

「型抜きは何を？」

「ハートだったんだけど」

「それが円形に？」

前の席の文花も業平もこれを聞いて大笑い。

「初音さんも丸いの好きですもんね。夫婦円満でのもありますし。よろしいんじゃないでしょうか」

「ホホ、じゃあまたトライしてみます」

そんなやりとりを残して、後部座席の二人は下車した。南実の両手には袋いっぱいのペットボトル等々。不審な感じがしなくもないが、元店員が付いていてくれるので、何とかなるだろう。

運転手は文花、助手は南実ではなく業平。川沿いの道路をしばらく走って、最初の赤信号で停まったところで、ようやく運転手の口から言葉が出る。

「Go Heyさん、十二月二十四日ってどういう日？」

「はあ、今年は振替休日だなあってくらいですね」

「じゃお休み？」

「昼間は人と会う約束があるんですが、その後は別に」

「そう．．．」

何ともまどろこしい会話だが、ズバツと聞けない・言えない、そんな事情が互いにあるようで。

リズムセクションの二人をスタジオに案内した後は、まったりと青山通りを散策しながら表参道界隈へ。優雅な午後のひとときを過ごして、今は某シアトル系カフェで熱めのコ

ーヒーを啜りながら語らう。弥生と蒼葉である。

「で、二十四日空いてるっていうから、早めにお昼ご馳走してもらって、その後はスタジオで特訓しようってことになったの」

「まさかそういう展開になるとはねえ」

「本多さんの音の創り方って何かイイのよ。八十年代風なんだけど、重くてグルーブがある感じ。でも、あたし所々いじっちゃったもんだから。とにかく一度スタジオで鳴らしてみ、その場で補整する。この際だからベースも生で、て訳」

蒼葉はカップを手にしたまま、こんなことを呟く。

「実は私、ちょっと気になってたんだ。でも、弥生ちゃんがイイ感じそうだから」

「エ？」

「いいの。これで決まり。やっぱり今年は彼に逢いに行く。メールがダメなら直接行動よ。ついでにセーヌ河の漂流ゴミなんかも見てくる」

「何か、スケール大きいし」

「ま、も一つのきっかけは姉さんね。去年までは一人で過ごさせるの可哀想だったから、気が紛れるように付き合ってたけど、今年のクリスマスはおかげ様で見通し立ったから」

「そっかあ。でも、お二人さん、どこまでいい関係になったんだろ？」

「こないだ、私じゃましちゃったみたいなのよね。その後、どうなってるかは不明。遅咲きでいい、みたいなこと言ってたから、まだまだ、と思われる・・・」

「櫻姉のことだから、ちゃんと仕掛けるわよ。何かがあるとしたら、二十四日、でしょうね」

フムフムと頷き合う応援団シスターズなのであった。コーヒーはようやく程よい温度になってきたが、この手の恋愛談話はそうそう冷めない。青山の空も濃い青から今はすっかり黒に変わっている。

十二月の巻 おまけ

スローダウンな師走

櫻が千歳宅に来る時は何かひと仕事、というのが定着したようで、ひと休みでは済まなかった。二部構成（現場視察～リセットクリーンアップ）だったこともあり、一人でダラダラと書くのはしんどい。二人で意見を交わしながら記事にした方が、単調にならないし、立体感も出てくる。漂着物の物に引っかけてのモノログだったが、対話の中から書かれたとなると、ダイアログである。ブログタイトルについては、正に「物議」を醸しそうだが、十二月最初の漂着モノログは、かくして二日の夜のうちに更新される。共同執筆による今回の一件は、higata@でも忽ち話題を呼び、それに釣られてか、メンバー個々のやりとりも活発になっていった。

櫻⇄南実、文花⇄業平の二組は、二日の展開からして何となくわかるが、弥生⇄舞恵、業平⇄八広といった音楽つながりの組合せもあって、目が離せない。冬木の情報誌は予定よりも遅れたものの、週明けには間に合い、サイトの方も無事更新。higata@には更新御礼の一文とともに、次号予定として、データ入力画面を紹介する件のお伺いが流れる。一月

号と言っても年内には発行手配をかけないといけないため、切迫している。だが、開発者や管理者の方は先行して動いていたので飄々たるもの。ほぼ同じタイミングでポンと返事を打つ。「ケータイ版の新規利用者登録、いつでも受付OK」「PC版、案内画面は八日にセンターでお披露目予定」だそう。お披露目の際の反応をもとに、入力画面(PC版)の仕様をまた考えて、その翌週にでも弥生に作業してもらおう、というのが千歳マネージャーの手筈である。

KanNaの特設掲示板の方もそこそこ賑やか。現場に湊が現われなかったこともあってか、言いたい放題な向きも認められる。管理人としては悩ましいところだが、どれもごもつともではあるので、特に削除するでもなく静観の構え。「良かれと思って、というのはわかったが、まずは話を聞かなくては」「対症療法の繰り返しは傷を深めるだけ」「本来の姿を考えるための教材だと思えばいい。自然のことは自然に委ねたい」ここまででも十分と言えるが、さらには「ゴミは来ないに越したことはないが、来るものは拒まずでもある。干潟での回収、大歓迎」という書き込みまで。初日の討議、二日目の視察、プログラムとして一体感を持たせた成果があったと言うべきか。辛辣ではあるが、勇気づけられるメッセージ。それらはそのまま八日の理事候補会合でも取り上げられ、一文書として練られていくことになる。

ご夫人からも報告はあっただろうが、仲介団体からの一筆というのはまた重みがある。河川事務所宛に消波実験に対する見解書が送られたのは、課長から話を聞く会の十日後のこと。課題解決アプローチとしては適度な速さと言えよう。

設立準備中ながら、法人としての形が整いつつあるのは事実。それは一つの強みになる。そして、役員連名でこうした書面が出せた、ということが何よりも励みになる。ちょっとした事件があると、時に地域力・現場力が高まる、という話を一部の面子は聞いていたが、それを図らずも実感できたという訳である。回答書の内容によりけりではあるが、石島課長にはひとまず感謝しないといけないかも知れない。

七人全員が揃った八日の会合では、この他に、設立総会の詳細、開会までの工程決め、総会までの間の仮入会の促進(総会後に会員として移行してもらうためのルール決め)、総会議案、特に定款案の早期決定、部会行事をどうするか(有力案は、一月のゴミ減らし協議を皮切りに三月まで三回、部会設定を模索しながらお試し講座を開くというもの)、公募中の法人名称案の中間発表を受けて(決定は一月の講座終了時を予定)、等々が付議された。これらに加えて千歳からは、例のデータ入力画面(PC版)の説明と紹介がなされ、概ね高評を得る。情報誌で先行案内するも、PC版実演は一月の講座で行えば集客にもつながるだろう、という話でまとまった。ニーズを探る上でもデモは重要。当日の反応次第では、サービスの有料化なんかも視野に入って来そうだ。すると今度は、法人の収益基盤、監査体制、運營業務委託時の備え等の話に膨らむ。途中、休憩を挟みはしたが、そんなこんなでぶっ通し状態。十三時に始まり、延々五時間。閉会と閉館はほぼ同時刻となった。

盛り上がるのはいいとして、その分、議事録をまとめるのは大変になる。議題ごとにメインとサブを交代しながらPC速記をしていた千歳と櫻だったが、さすがにヘトヘト。議長の花もマーカー片手に青息吐息。速記官を置くか、センター休館日に行くか、何らか

の工夫が今後は必要になりそうだ。

センターの関係各位にとっては、前半の方があわただしい師走となった。歳末にかけてドタバタするのが世間だとすると、こっちはその逆。後半はむしろスローダウンとなる。今日はその境目となる第三土曜日だが、早くもそのスロー加減を象徴するような事態に。お留守番の二人の会話もこうなる。

「じゃ、矢ノ倉さん、今日はビッグサイトに直行ってこと？」

「業平さんにいろいろと教えてもらいながら見学するんだそうで」

「土曜日の『エコプロダクツ』って、それなりに人出があるだろうからなあ。お目当ての展示を見て回れるかどうか」

「文花さんの狙いは、ちょっと違うと思うな。教えてもらうってのは口実よ。デートしたいだけじゃない？」

マスクをしてない文花さんのこと。きっとクシャミにさしな苛まれてることだろう。

議事録署名人の玉野井のおば様、代表理事候補の掃部のおじ様のチェックを経て、議事録がようやくまとまったのはこの日の夕方。元気印の文花が帰って来た。

「どうでした？エコプロ」

「ええ、楽しかったわよ。ハイ、お土産！」

「楽しくて当然。デートだもん」

「あくまで環境市場調査でございます。誰かさんの七夕デートとは違うんだから」

なんて言いながらも、大きめのマイバッグから愉快そうに収集品を取り出す文花。カレンダー、エコバッグ、各種ノベルティ文具、ケータイストラップ、その他試供品の数々。ふ「どれでもお好きなのどうぞ。って言っても、お二人さんの場合はどれも共有か」

ち「あれ？ これって生分解性？」

ふ「ああ、そのゴミ袋ね、バイオマスマーク付きのサンプル。そんでもってこっちの手提げ袋はバイオプラマーク付き。農林水産系と経済産業系でそれぞれ協会があって、似たようなものなんだけどマークが異なる、つまりタテ割りね」

さ「どっちにしてもこれが普及すれば環境負荷は減る？」

ふ「消費者にとってはわかりにくいけど、結果オーライかしら。でも、一緒に取り組むことが何よりの負荷削減じゃない？」

ただのデートではなかったことは、集めてきた資料の量からもよくわかった。商品パンフレットの一例で言うなら、

さ「それにしても、バイオマスCDにバイオマスシューズって。DVDとか運動靴が漂着するくらいだから、これってアリかも知れないけど、新商品開発競争に歯止めをかける方が先のような．．．」

ち「これは？ 水溶性ファスナー？ 溶かせば済むってか」

ふ「まああ。私としては、この簡易式の緑化システムがイチ押しね。野菜用のキットもあるみたいだし。センターで地場野菜、どう？」

来月の講座ネタとしても使えそうな最新の情報が今ここにある。商品の開発競争の見本のような観もなくはないが、ゴミを抑制するための解決策も少なからず含まれている筈。

情報源人物、矢ノ倉文花の本分を見た思いの二人は、改めて敬意を表することにした。

ち「おそれいりました。事務局長殿」

さ「デートしながらもここまで抜かりなく、とは」

ふ「だから、デートじゃなくて．．．」

さ「はいはい、調査でしょ。二人の距離の」

ふ「もおっ！ カレンダー没収！」

さ「それは彼の、カレンダー」

千歳が止めない限り、ずっと続きそうなこの漫談。観客としてはさらにけしかけたいところだが、あいにくお開き、いや閉館の時間になってしまった。外は真っ暗。来週まで、つまり冬至まではただひたすら日没が早まっていく。

日脚が反転するのが待ち遠しい。だが、待ち遠しいのはその翌日のメンバー集合会か？ いやいや、さらにその翌日が本命だろう。三者三様なれど、想うところは同じ。素適な聖夜が待っている。

### くりすます近づく

冬至**当日**。巷では三連休の初日だが、センターは開館日。天気が今ひとつパツとしないのは、この姉さんの仕業だろうか。午後三時、階下からザワザワと声が聞こえてくる。

「ちわっす！ 皆、元気い？」

「いらっしゃい。雨女さん、と八宝さん。あ、小梅さん．．．」

「へへ、今日から冬休み。塾お休みだし、遊びに、いや勉強しに。そしたら、偶然お二人と」

「勉強？ 冬休みの宿題とか？」

「それは明日から。今日はマップ関係の情報を、と思って」

「それはそれは。じゃ、情報担当の隅田クン、お願い」

「はい、先輩。ではお嬢様、こちらへ」

千歳は小梅を円卓に案内すると、いきなりweb講習スタイルに持ち込む。グリーンマップ関係の情報は紙媒体もなくはないが、全国や各国での実例をすぐに呼び出すにはやはりインターネットに限る。しかし、どうも様子がおかしい。

「ところで小梅さま、僕のどこがいいって、櫻さんから聞いた話、まだ覚えてる？」

「エ？ まだ聞いてなかったんですかぁ？ 本当にスローだ」

「一つは聞いたけど、あとはお得意の笑顔で誤魔化されちゃって」

「そのスローなところと、一緒に居ると和むところ．．． あ、言っちゃった」

検索サイトをパタパタやっていた千歳の早手が止まる。小梅は舌を出しつつ、カウンターを見遣る。当の櫻さんにはこやかながらも、クリスマスの飾り付けがどうのこうのと舞恵と議論しているところ。

「そっかぁ、そしたら和ませて差し上げないと．．．」

「大丈夫ですよ。そのまま。櫻さん、千兄さんと居る時、いつも楽しそうだもん」

「クーツ、グツと来るねえ」

今日のこの「クーツ」は過去二回のとは違う。兎にも角にも、小梅にはやられ放しの千

兄であることには変わらない。

「あ、スローマップだって。いつの間に作ったんですか？」

「はあ、函館かあ。僕にピッタリ？」

PCに向かっているのにスローな千歳というのも珍しい。

ハコダテが出てきたところで、ハコモノ論好きなハコ入り娘さんとハクンはと言うと、

「で、法人名はどんな感じになりそうすか？」

「何となく絞ってはみてるんだけどね．．．」

文花は得意のマーカーでボードに候補名を書き並べていく。いきいき地域、エココミュニケーション、環境ソリューション、地域元気、さらには、Area Social Responsibilityなんてのまで出てきた。

「これと組み合わせる下の名称は、協会、ネットワーク、プラットフォーム、あとプランニングとか」

「プランニング．．． 計画にしちゃってもいいんじゃないすか。例えば、地域元気計画、略称は『地元』」

「NPO法人 地元？ ちょっとなあ。ちなみにセンセは『NPO法人 五カン』なんてどうだ、とか仰ってたけど、それもねえ」

「自分だったら、やっぱ『現場』とか『<sup>ばぢから</sup>場力』とか入れちゃうかも、です」

「『場』と来たか。ルフロンにbaクンて云われてるだけのことはあるわ」

「baは八なんすけどね、そう言われてみると確かに相通じるものが」

こんな状況なので、年内の決定は難しそうだ。どっちにしても**名称募集**は仕事納めの日まで。正式決定は次回の理事会で、となる。

「で、監事の件なんですけどね」

舞恵は早速、候補者リストを持って来ていた。都合三名。

「どの方もいつでもOKって感じなの？」

「別に非常勤とかで入ってもらって訳じゃないですよ。監査とか会合とかに出てくる分にはどなたも平気でしょう」

「すると、後は地元通とか、市民活動に理解があるとか、かあ」

「会ってお話されますよね。年明けたら都合に応じて連れてくるようにしますワ」

銀行としても社会貢献に力を入れつつある分、話が通りやすくなっているようだ。舞恵の一存でそこまで可能というのが俄かには信じ難い事務局長。だが、それにはちょっとした裏話があったりする。一つお楽しみである。

帰り際、ルフロンは再び櫻に絡んでいる。

「だから、エコなX'mas でのをここで提案すりゃいいんよ」

「図書館てゆーか、当建物を代表して一階のロビーにツリーがちゃんとあったでしょ。センターはいいのよ。LEDだってチカチカやればそれだけ電気も食うんだし」

「ブログに出てたじゃん。その何とか装置で油取って、発電すりゃあさ」

やっぱりお飾りが好きなルフロンは、このシーズンを<sup>お</sup>措いて他にいつ当所をデコるのか、

という論調。対する櫻は、エコを発信する施設だからこそあえてシンプルに、という路線を譲らない。エコとデコ、果たして調和し得るのか。

「まゝまゝ、二人とも。お客さんが笑ってるわよ」

円卓脇では八兄と千兄が明後日の予定だか何だかを話し合っているが、それはスルー。カウンターでの応酬に聞き耳を立てていた小梅は、検索を中断してクスクスやっている。

「しょうがないなあ。これならいいでしょ」

ボードを反転させると、カラーマーカーで以って器用に一本の小振りな木を描き出す。都合よく赤・青・橙・緑・黒と各色揃っているのも、デコも容易。大きめの赤リボンが利いている。ツリーを中心にクリスマス装飾風のイラストが散りばめられると、忽ちそれらしいムードになるから不思議だ。立体ではないが、これは快作。

「あとはアルファベットを並べれば完成です。じゃ、さっきモメてたお姉さん達、どーぞ」

櫻が MERRY と書いたまでは良かったが、舞恵は何を思ったか、

「くりすます、と」

「ちょっと、アルファベットって、イラストレーターさんご指定だったのに」

「この方がカワイイじゃん」

「それじゃ何か、クリがおすまししてるみたい」

仲直りになったんだか、そうでないんだかよくわからないが、即席イラストのおかげで場が和んだことには違いない。小梅は「くり」のところに、すまし顔の栗を付け足して、さらなる笑いを誘う。

一年で最も短い日が沈みつつあったが、雨雲に隠れてはわからない。ただ、日没時刻になったことは認識できたので、三時からの来客の動きがあわただしくなる。

「んじゃ、初姉んどこ行って来るし」

「あ、よろしくお伝えくださいまし。小梅さんは、どちらへ？」

「一緒に行きます。英会話、面白そうだし」

「そっか。でもその先生が『くりすます』なんて書いてんだから、思いやられるワ」

「フン。ほんとは Happy Holiday でいいんよ。櫻姉が先に MERRY なんて書きちゃうから」

「Holiday? そりゃ当館は明日から休みだけど。クリスマス当日はホリデーじゃないもん。おあいにく様」

「ま、いいや。続きはまた明日ネ」

「はいはい。クルクルくりくりルフロンさん」

漫談になりそうでならないのがこの二人の掛け合いの特徴。仲が良いことの裏返しであることは皆わかっているのも、誰も止めたりはしない。それにしても、クルクルにくりくりとはまた言ってくれたものである。これでリズム合わせ中に、ビックリはまだしもギックリとかがあったら笑えないが。

\* \* \* \* \*

日頃の行いが善いせいか、午後になったら晴れてきた。だが、せっかくの好天もスタジオオ入りしてる間は関係なし。十四時から十七時までの三時間で、四曲は最低通してみよう、

というから欲張りなようなそうでないような。取り急ぎ、まずは楽曲データを流してみる。ここでの仕切りは勿論、Mr. Go Hey!!

「一、二曲目は千ちゃん作曲、三、四曲目は不肖業平の作です。全面的に編曲などしていますが、業平作については弥生嬢のアレンジが一部入っております」

「へへ、恥ずかしながら。すでにお聴きいただいととは思いますが」

「まずは音がちゃんと出ないことには．．．」

いつもなら、ここらでツッコミが入るところだが、今日は控えめな弥生嬢である。

タイトルが決まっているのは一曲目の『届けたい．．．』のみ。二曲目は八広の詞が付いたところまでは行ったが無題。業平作曲分は、一応流域環境なんかをモチーフにはしているが、詞も題もまだ。てな訳でとにかく音合わせが優先ということになり、今日の日を迎えた十人である。楽器を持って来ているのは、千歳（<sup>guitar</sup>G）、弥生（<sup>bass</sup>B）、舞恵（一部軽量の<sup>パーカッション</sup>Per c）程度。小道具関係で言えば、八広のスティック、業平のハイスペックノートPCといったところ。冬木はピック、南実はリードを隠し持っていたりするが、どうやら必要に応じて、ということらしい。鍵盤楽器はスタジオ常設なので、櫻はその手の持ち物はなし。蒼葉と文花はオーディエンス役ということになる。

櫻はすぐにもでも合わせられるのだが、やはりおとなしく口ずさむ程度。リズムセクションの二人も空打ちこそしているが、肩を揺らすにとどめている。作曲者の千歳は、アンブからの音像が鑑賞に堪え得るかどうかをチェックしている様子。

「八十年代アイドル歌謡曲に通じるものを感じるわぁ。いいかも」

最初は音響にビビっていた文花だったが、自身のカラオケレパートリーと通じるものを感じたようで、好感触。これに実際の歌が乗ると、どうなるか。聴衆の反応がすぐに得られるのはライブセッションのいいところである。

「じゃ一曲ずつ演ってくるとしますかね。各員、配置にどうぞ。ベースは抜いちゃいます。リズム隊は、クリック音だけでいい？ 櫻さんは、と．．．」

「鍵盤の練習、先にします。OFFをお願いします」

「了解。で、千ちゃんは？」

「鍵盤とぶつかっちゃうかも知れないから、今は聴き役に回ります」

男性二名と女性三名、この組合せが楽器側と聴衆側それぞれにできる。按分としては良好である。各奏者からスタンバイOKの合図が出る。八広はヘッドホンを付け、カウントを打つ。業平が難なく同期させて一曲目スタート。弥生のベースが少々危なっかしかったが、影の練習の成果あって、無難に間奏のどこまでは行った。

「この曲、ソロって何が入るんだっけ、千歳さん」

「ギターソロは想定してないから、櫻さんがシンセで。または、サックス？」

南実は自分に向けて指差すと、「え？ そうなんだ」

弥生が気を利かせて、「あ、デモ用があるから。今、持って来ます。でも、リード．．．」

「実は持って来たんだ。本体だけ貸してもらえれば」

「やったぁ、サックス。いいぞ、こまっつぁん！」

何故かルフロンが大喜び。デモで仮想管楽器ソロは聴いていたが、楽曲が陽気な割にはインパクト不足と感じていた。やはり生に限る、ということらしい。

リードは多少使い込んであるものの、別の管に馴染ませるのには時間もかかる。吹き込んで暖める必要もあるのでそれは尚更。南実がウォーミングアップしている間、歌姫は徐々に鍵盤とヴォーカルの同時進行を始めていた。ソロが入らない状態で間奏も流し、「届けたい・・・」一つの形を見るに至る。

サックス奏者を交えての通しに入ったのは、スタジオ入りしてから四十分後のこと。仮に一曲五十分で音合わせができたとしても、やはり三時間ではキツイということになる。まして聴き慣れた一曲目でこれだけ時間がかかるとなると・・・

だが、ここぞで何かをやってくれる南実嬢は、しばらく吹いていないとか言ってた割には、仮ソロの進行に近い形であっさり吹きこなして魅せる。孤高さが売りでもある人物ゆえ正にソロ向き。ソロはソリチュードに通じ、時に翳を伴うものではあるが、ここでは逆。脚光を浴びるため、と言っていい。その力強い演奏は、強肩・豪腕に加え、彼女の肺活量が並みでないことをも証明した。

という訳で、割とすんなり一曲目は音合わせができた次第。十五時になる手前である。この後は一曲四十分ペースで行けば、予定通りこなせることになる。果たして？

二曲目は櫻が当初手こずっていたダンサブルナンバー。コード進行をピアノ主体に変える version にアレンジし直したため、今の櫻にはどうということはない。より重く響くピアノ音を選んで、ベースに重ねる。

出だし順調、かに見えるも、業平が調子に乗ってイントロを長めにしたもんだから、リハーサルはイントロ部分で一旦ブレイクとなる。弥生は手を休め、まずは内蔵音源のベースを流すことに。かくして楽器側には、業平、櫻、八広、舞恵、そして千歳が回る。

元々はカッティング調のギターを鳴らしながら歌う想定で作った曲だったが、そのギターリスト氏は自前のギターを冬木に預けて、リードボーカルに専念することにした。もう一度イントロから。千歳は深呼吸してから最初の歌詞をマイクに乗せる。初めて彼の歌声を聴く文花の顔と言ったら、そりゃもう、である。千歳は一寸<sup>ちよつと</sup>笑みを浮かべるも、そのまま歌世界へ。ドラムを叩いている詩人さんが書いた詞だが、流域を訪ね回っている際に得た情感を散りばめているとかで、歌ってみると実にしっくり来る。歌詞カードを見ながらではあるが、とにかく歌唱に集中できているので、時に情景を思い描くこともできる。

歌を介して詞が視覚化されたならしめたもの。蒼葉嬢はずっと目を閉じて聴き入っている。が、心の中で画が浮かんでいるのかどうなのか。一つ画家さんにも感想を聴いてみたいものである。

テンポが速い分、サックスで即興、というのはさすがに難しい。となると、今度はこの人の出番である。

「一応、ピックは持って来たんで、ちょっとやってみましょっか」

「普段はコード進行専用で使ってるんで、弦がビククリしちゃうかも知れませんね」

アンプに通さない状態で何となくシャカシャカ弾いていた冬木だったが、間奏のところでギターソロを入れようじゃないか、という提案を出してきた。干潟では何かとお騒がせな彼のこと、一部のメンバーはどうせフライングとか我が道系とか、とあまり期待してなかったのだが・・・

曲者というのはやはり一味違うものである。エフェクタを使っていないせいもあるが、抑えが利いていてなかなかの好演ではないか。ルフロンはコンガを叩くののを止めている。決してこんがらがっている訳ではない。

弥生が入ったり、八広が抜けたり、何回か通しで演ってみた。画家さんは云う。「何か川の流が見えた気がした…」この蒼葉の一言により、曲名が決まる。名作(?)『Down Stream』の誕生である。

三曲目はミディアムスローながら重厚な一曲、四曲目は弥生アレンジにより多少メロディアスになったが、やはりドラムとベースが要になるダンスチューン。詞がまだなので、歌い手も決まっていないが、今日のところは、ギターとベースがどこまで対応できるかが見所。千歳と弥生はへろへろになっているが、リズム隊はてんで元気。八広は勢い余ってクリック音を飛ばすくらいのノリである。極秘特訓した甲斐はあった。ルフロンも余裕たっぷり。蒼葉にウィンドベルをいじってもらったり、文花にはカウベルを叩かせたり、メンバー総出のセッションを仕立てるのに一役買う。

難度の高い曲ながら、二曲とも一応の音合わせはできた。閉場時間まで残り少々。詰め切れてない部分を話し合う面々である。三曲目はグランドピアノ系のおまけを足し、間奏にはサククス、歌は千歳に頑張ってもらおう、ということで仮決定。四曲目は、千歳はギター専門というのはすんなり決まるも、ボーカルをどうするか、で引っかかる。本来なら櫻で行くところ、鍵盤は欲しい、されど歌いながらはちと困難、ということで難航しているのである。だが、曲調が些か<sup>なまめ</sup>艶かしいこともあって、この女性にお願いすることにした。

「そうねえ、『キャットウォーク』に似た感じあるし、歌えるかも」

「んじゃ、蒼葉さん想定で詞、書きます！」

八広は毎度の如くデレっとしながらも威勢がいい。舞恵は珍しくノーリアクション。「ま、えーわ」だそう。洒落で済ませられるくらい、今の彼女にはゆとりがあるということである。

最年長の女性が一言。「それにしても皆、達者ねえ。特に楽曲データよね。あそこまでいつの間に仕込んだんだか」

「昔、作っておいたのを復刻したようなもんなんで。一からだったら、とてもとても」

「隅田さん作も？」

「業平君ほど持ち合わせはないですが、やっぱりストックしてあるのを加工して、再生した次第です」

「再生か。そうよ、再生。いいじゃない。無題の曲は一つそれをテーマにしたら？」

聴衆の声は貴重である。ニーズに応じてこそ、詞も生きるというもの。八広は舞恵に早速尋ねてみる。

「reviveって再生？」

「そりゃ、蘇生だワ。自然再生ってことなら、renaturationなんてどう？」

楽器や機材を片付けるメンバーを横目に、モデルさんがガタガタと動き出す。こっちはこっちで大荷物である。

「蒼葉さん、そのスーツケース。これからどちらへ？」

事情を知らない業平が引き止めるように訊ねる。

「あ、半蔵門線で押上まで出て、そこから京成線で．．．」

ルートを訊いている訳ではなかったのだが、いきなりパリとは言えないから説明が長くなる。

「えっ、エールフランス？ 今から？」

「フライトは十時前なんだけど、クリスマス時期ですからね。早めに出ます。皆さん、よい年末年始を。櫻姉は留守番よろしくネ。Salut!」

「はいはい。Bon voyage!」

「やっぱモデルさんは違うわ」 八広がまたトボけたことを言うので、今度ばかりはルフロンも黙っちゃいない。

「ったく。明日、覚えてらっしゃい！」 手持ちのマラカスで彼氏の腰の辺りをひっぱたく。これぞくりくりルフロンのギックリ攻撃である。思いがけず強力な一撃だったので、ハクン、ビックリ!となる。

弥生と文花が同じ場に居る手前、業平としては下手に明日の話はできない。ここへ来てモテモテなのはいいが、トライアングルの当事者になってしまった、というのはいただけがない。そんなことなど知る由もない年長さんと年少さんは今は仲良く談笑中。

「そっか、おふみさん、明晩はちゃんと予定入ってるんだ」

「そういう弥生嬢は？」

「明日になったら．．． ま、成り行き次第じゃないでしょうか」

傍らで聞き耳を立てていた業平は、自分の名前が出なくてひとまずホッとしていたが、成り行き云々というのを聞いて、目を白黒させている。こうした駆け引きはノリでは対処できない。どうする？ どうなる？

### それぞれの Holiday

無粋な言い方をすれば振替休日だが、特別な意味を持つ人達にとってはただの休日に非ず。一人よりは二人で過ごしたいと思うのが自然だろう。今回のコース設定は、櫻主導ではあるが、止せばいいのに千歳がひと捻り挟んだものだから、何とも不思議なスケジュールになっている。ディナーは早めということなので、それぞれランチなどを撮ってから集合、で、十三時半の待ち合わせとな。櫻はダテ眼鏡なるものを着用し、彼氏を待つ。

此処は品川駅西口の某商業施設屋外にあるフリーのテーブル席。彼女の視線の先は駅方面。定刻をちょっと過ぎた頃、幾分見映えのするロングコートをなびかせて、待ち人が視界に入って来た。だが、いつもながら鈍い彼氏はすぐには気付いてくれなかったりする。

「ん？ 櫻、さん？」

「何だかなあ。至近距離にならないとわからないのかね？ 隅田クンは」

「どしてまた、眼鏡？」

「美女が一人でポーッとすると、目立つし何かと面倒でしょ。顔隠しです」

「神隠しならぬ顔隠し？」

「千歳さん来たからもういいんだ。外します」

先月のお上がりファッションの上にファー付きのセミロングコートという出で立ち。眼鏡を取って立ち上がると、女優級の優美さが放たれる。「おお．．．」彼を感嘆させる作戦、まずは成功したようだ。「ほんと素直なことで、フフ」

ホテル併設の建物のエスカレーターに乗っかるも、映画や水族館がお目当てではない。高輪方面に通じる坂道の中腹まで運んでもらうため、というからちゃっかりしている。その先はなだらかな坂。上がりきって左に行くとユニセフハウスが見えてくる。

「あら、やってるかと思ったら、お休みなんだ。クリスマスカード買いに来るお客さんとか少なくないと思うんだけど」

「ある意味、書き入れ時なのよね」

「ま、当センターも休みだから人のこと言えないけど」

子どもたちのためにサンタ役を買って出るスタッフもいるから休館なんだろう、とか勝手な推量をしながら、御殿山方面へ歩き進んでいく。途中、櫻は小粋な感じの脇道を見つけると、

「こっちこっち。予め調べといたんだ」

緩やかなカーブ、風情ある階段道、ちょっとした見晴らし。まち探検が得意な櫻らしい選択である。直線距離では四百メートルはある筈だが、品川イーストのビル群がここからだと近くに見える。

「グリーンマップ的には[すばらしい眺め]、かな」

「でも、あのビル、海風をブロックしちゃうんでしょ。[考えさせられる眺め]ってとこね」

今度は唸ってしまった彼氏を引っ張って、いいものならぬ、いいところに櫻は向かう。段々を下り、右折してしばらく歩くと、瀟洒な一角に辿り着いた。ここだけは別世界。ヨーロッパピアンな街路と建物で構成されている。そして建物の一つはクリスマス専門店。

「聞いたことはあるけど、住宅街の一隅にこんな」

「通年やってるんですけど、やっぱクリスマス時期じゃないとネ」

店内はカップルの姿が目につく。同じようにゆっくりしていてもいい筈だが、長居はしない。電車やバスの時間を逆算して動いていることもあり、雰囲気を少々楽しめればそれでいいんだとか。

「では、プレゼント協定に基づき、ここはお互い低予算で」

気障な演出等は無用。大層な品を交換し合って、重い思いして歩き回るのもナンセンス。ここはあえて、ワンコインでお釣りが来るくらいの簡素な一品をその場で買って交換しよう、ということにしてあった。これが彼等なりの協定である。

「じゃ櫻さんは、これ。でも、本当にいいの？こんなプチギフトで」

「非常用、いやキャンドルナイトで確実に使うでしょうから、ありがたいです。んで、千歳さんは縁起物で、と」

お互いに中味は承知の上。包装を簡略化していることもあり、クリスマスプレゼントと称するには違和感もあるが、食事の席で手渡すとなれば、それ相応、となる。

店を出たら児童遊園を經由する。坂上に通じる階段を遊具の一種と見間違うのも無理は

ない。とにかく上って下りて、また上り、である。効率的にはどうかと思うが、探訪が共通趣味のお二人には、こういうのがたまらない。目的地どうこうではなく、道程そのものが目的だとすると、これでいいことになる。

御殿山に通じる道を再び散歩する千歳と櫻。時折風が強く吹き付けるも、街並家並に気を取られているので、正にどこ吹く風の何とやら。時計は二時を回ったところで長針短針が重なろうとしている。ここで大通り、即ち八ツ山通りに出た。

「左手のイチョウ並木の先は八ツ山橋、直進すると原美術館とかかな。どうします？」

「信号ちょうど青だから、直進」

「Let's Go!」

Go と来れば、気になるのが Go Hey 君。今はお約束通り、弥生嬢とスタジオでセッションを始めたところである。

「ねえ、Go さん、昨日できなかった五曲目、先にしましょうよ」

「へ？ だって昨日の練習の続きが先じゃ．．．」

「あたしが一番いじっちゃった曲だもん。直すんだったら、早めが良くない？」

「いやあ、あんな感じでいいと思うよ。ただ、アイドルポップ調だから、歌い手がね。櫻さん向きじゃない気が．．．」

一寸間ちよっとを置いて、弥生が切り出す。そう、彼女はガールポップシンガーである。

「歌い手さんなら、ここにいるじゃないですか。千住姉妹が歌って、あたしが歌わないってこともないでしょ？」

「そう来たか。いいかもね。でもベース弾きながらって．．．」

「八八、そこまでは考えてなかった」

ここはとりあえず二時間の予定。番狂わせがなければ、文花との待合せ、新宿十七時は楽々のはず。はてさて？

ちょっとしたお屋敷が連なるのは、さすがは御殿山というだけのことはある。しかし、十二月二十四日にありきたりでないところを巡るという点で、お二人も御殿山に負けず劣らず流石である。丁字ていじに行き当たったところで左折。ここからは御殿山通りとなる。やがて桜並木が現われ、JRを跨ぐ橋が見えて来た。

「この桜ってどうなんだろ？」

「花見の時期にまた来ますか？」

「そうねえ．．． ま、花見もいいけど、千歳さんとはもっともっといろんなどこ行きたいな」

腕を組まれて、やや硬直するも、会話の方は至って滑らか。

「そりゃどうも。こっちは櫻さんと居る時はいつもお花見気分だけだね」

「まあ、おめでたい人（ウフフ）」

六月君が見たら大喜びしそうなトレインビュースポットに到着。山手線から新幹線まで実に十の線路が横並び。時間が許せば、ひととおり眺めていたい気もするが、そうも行かない。程なく、右端、下りの新幹線車両が徐々に加速しながら通り抜けて行った。のぞみ

35号である。見送りながら、櫻は小声で、

「ルフロンたら、今日から泊りがけでどこそこって言ってたなあ．．．」

目が合い、ギクとする千歳。ここは話題を切り替えねば。

「ハハ、さすがは先行カップル。でも奥宮さん、この年末に休みって取れるものなの？」

「何だか企画書が通ったとかで、ひと区切り付いたからいいんだって。でも、どこ行くんだろ。クリスマスに温泉てこともないだろし。西か南か」

「案外、今の列車に乗ってたりして」

「こういう時、GPSとかあると面白いのにね」

自分達の真上でまさかそんな話が交わされていようとは、である。

「ハ、クション！」

「だいじょぶ、ルフロン？」

「もう花粉で飛んでんだっけ？ 流行に敏感なものも困るわぁ」

千歳の勘は冴えていた。八広と舞恵はその車内に居た。

「ま、新神戸まで時間あるから。これで昨日の続きでも、どう？」

「そうそう、詞、付けなきゃ」

メモリオディオを彼氏に渡すと、彼女は大きくリクライニングをかける。

「煙草吸えないし、舞恵は寝てるさ。富士山が見えてきたら起こしてちょ」

「寝たまま富士山通過すると、きっと夢に出てくるよ。その方がいいんじゃない？」

「イブなんだからさ、富士を肴にホワイトクリスマス、ってのもいいっしょ。乾杯用のワイン缶もあるんだし」

「聞いたことないし」

肘で突きながらも、頭を彼の肩に乗せてみるルフロンさんであった。

御殿山通りは下り坂。下りきって突き当たるは第一京浜である。ここからは平地。京浜急行沿いにさらに南へ歩く歩く。

「それにしても京急って、いろんな車両が走ってるのねえ」

「六さんに聞きゃ、どれがどこ行きとかすぐわかるんだろね」

「動体視力働かせりゃ私だって。あら、佐倉行き？」

高架を快走する快速特急。その行先は確かに京成佐倉である。奇遇というか、おめでたいというか。

「櫻を佐倉に連れてってー、何てネ」

今日も絶好調なサクラさんである。

そうこうしているうちに、<sup>しんばんば</sup>新馬場駅に着いた。だが、目標時刻ギリギリ。ホームに着くや、すぐに新浦賀行きが入って来た。

「で、大森海岸まで行って、バスですか」

「そのバス、本数が少ないから」

「それをクリアすれば、あとはゆったり、か．．．」

予定駅で降り、しばらく待つ。大森駅を出たバスがソロソロと入ってくる。ここからバ

スに揺られること約二十分。目指すは、東京港を臨む一端、東京湾西岸で最も突き出た地である。

「千歳さんも面白いとこ、ご存じねえ」

「そこと空港の間に京浜島てのがあって、そこも飛行機ビュースポットなんだけど、季節によって使う滑走路が変わるみたいだね。冬場はそれほど見映えがしないんだって。ただ岸壁を見下ろすとテトラポッドとかに漂着ゴミが溜って凄いことになってるんだとか。つまり空は冴えないけど、海の方は見応えがあるって訳。調査に行く分には有意義なんだけど、今日はね、そういう日じゃないから．．．」

「で、城南島かあ。あっ早速、飛行機！」

十五時二十分、二人はその人工島の浜辺を歩き出す。川における人工的な波には慣れ親しんでいるが、自然作用による本場の波を二人して楽しむのは今日が初めて。東京湾と聞くとパツとしないが、ここは一応海である。

「てことは、この打ち寄せてるのって、海ゴミになる訳、か。でも、枝とか藻みたいのはゴミじゃないわよね」

「一見したところ、人工物とかなさそうだけど、よくよく調べると粒々とか出てくるんだろね」

「粒々か。南実さん、今日どうしてるかな？」

羽田を発つ飛行機は結構頻繁。蛇足ながら、只今上空を目指している一機は小松行きである。

「飛行機で小松方面とか？ なーんてね」

「そしたら、千歳さんも北海道行かなきゃ」

次に飛び立つは、正に千歳行き。離陸シーンがよく見えるだけでも十分なのだが、ついでに何処<sup>どこ</sup>其<sup>その</sup>処<sup>ところ</sup>行きというのがわかるようになっているとより楽しめそうだ。

当の小松さんとは言う、あいにく機中の人ではなく、河畔の人だった。楽曲データをCDにコピーし、それをCDラジカセから流す。寒風に負けないよう、いや風を吹き飛ばすかの勢いでサクスを鳴らしている。昨日は叶わなかったセッション二曲目、その間奏部分を念入りに練習中。南実の居宅近くには造成干潟があって、そこを望む場所に今は居る。最下流に当たるため、正に Down Stream を実感しながらの演奏である。揚々とやっているようだが、目にはうっすらと光るものが。誰かに届けたいこの音色。風に乗り、東京港を超え、城南島に届くか。聖夜の日だけに何が起きてもおかしくはなさそうだが．．．

「何か風の音が心地いいというか．．．」

「千さんも詩人ね。大丈夫？」

ありきたりを意識的に回避しただけのことはあって、今、城南島のつばさ浜には、カップル一組のみ。他に誰もいないんだから、はしゃぎ回ったりしても良さそうだが、やっぱり違う。打ち上がった固まりを屈んで解きほぐしているではないか。

「あら、紙コップ。はい、千歳さん、プ．．．」

「出たあ、得意のしりとりに。プ、おっとプルタブ」

ケータイもないし、データカードもないから、調査はお預け。代わりに、手と頭を使っ

た遊びに興じる二人。

「ブルーベリージャムの、パックね。はい次」

「黒、の鉛筆かな？ これって」

「へへ、爪楊枝、発見」

「じ、かぁ．．．」

いいタイミングでジで始まる物体が離陸する。目に入るものだったら、何でもいいモードになっている。

「城南島、でもいいけど、ここはジェット機、かな」

千歳は立ち上がって、銀色の機体を見送る。櫻も腰を上げ、彼に寄り添いながら、同じ方向を見つめる。

「き、キ．．．」

機転、だと終わってしまうが、その機転を利かせる櫻。眼を閉じると、

「kiss かなぁ」

ジェットの音でよく聞き取れなかったが、千歳は轟音の勢いに乗じ、千載一遇を実践する。

「あ．．．」

機体が上昇するに伴い、轟音はエコーを残しながら小さくなる。代わりに聴こえて来るのは、そう「Soar Away」である。二人、動きは止まったままだが、心は宙を舞う、いや舞い上がっている。互いの温度を確かめ合うように離れない。

十と数秒が経つ。再び見つめ合い、そして俯き合う。波の音が帰って来る。

「千歳さん、私．．．」

言葉が出ない千歳は、ただ黙って彼女を抱き寄せるしかない。冷たい海風のせいもあるだろうけど、足が震えている。口を開いたのは次の轟音が去ってからのこと。

「やっぱりここじゃ寒かった、ね」

「私は平気。でも、しばらくこのまま、が、いい．．．」

お次のバスまでまだ三十分近くある。このままでもいいのかも知れないが、千歳は熱があるような気がしたので、そっと櫻の手を引き、陸側へ引き返す。足元にはしりとりし損なった、割り箸、輪ゴム、ストローなんかが転がっている。平時なら拾って帰りそうところ、今回はそのまま。二人ともすっかりのぼせている。

ベンチに腰掛け、海と飛行機をぼんやり眺めているうちに、正気が戻って来た。

「ス、よ。千歳さん。続き続き」

「隅田、千歳です。はい、どうぞ」

「せ、千住、櫻と申します。フッフ」

ジェットがしばし遮った後、

「ら、ですか。1. 2. ラ、ラー」

やっぱり熱がある千歳は、セッション二曲目を<sup>おもむろ</sup>徐に口ずさみ始める。

「千歳さんたらぁ」とか言いながら、櫻も何となく声を合わせる。南実のサクスがこれに重なったら、川と海とのセッションか。

Down Stream から流れ出た漂流物は海を彷徨<sup>さまよ</sup>う。ことゴミに関しては川から海へ連鎖するのは望ましくないとされる。だが、音や歌の流れ、つながりが川と海とであったとしたら？ その広がりはずっと無限大。

城南島循環バスに再度乗り込む二人。フワフワ感が残っているので、終点まで乗って行ってしまいそうな心配もあったが、そこはリーダーとマネージャーの組み合わせ。

「えっと、野鳥公園を過ぎたから．．．」

「じゃ、押しますね」

降車ボタンが連動したのかどうかはいざ知らず、山手線の某駅では弥生のスイッチが入ったところである。

「ねえねえ Go さん、何かこう引き止めたりとかって、あっても良さそうなんだけど」

「ごめん、どうしても行かなきゃいけない。てゆうか、弥生嬢、今夜空いてるの？」

「え？ まあ、その．．．」

「ツッコミたいとこだけど、どうしよっかな」

最近毒気を見せない弥生がちょっと気がかりな業平である。こう云えば食いついてきそうなところだが、あれれ？

「SNS で知り合った人とか、楽器屋で働いてた人とか、何となくお付き合いしてたりはしますけど、特別な夜を過ごすって程じゃなくて」

「そ、そうなんだ．．． そやつら、何を考えてんだか」

「あたし、Go さんと過ごしたかったけど、先約があったんじゃないネ。でもその女性って本命？」

あせる業平。女性と過ごすとは言ってないのだが、つい口が滑る。

「いや、本命ってゆうか、その、八八」

弥生のツッコミのこれは変形、いや進化形か。

「やっぱ、ある女性と一緒にってか。ま、いいや今日は家族とイブします。でも．．．」

「でも？」

業平は珍しくドキドキして来た。こんな風に割って入るのは急いでる証拠。

「起業とか特許とか、相談したいんだな。時々デートしてほしいかも」

そんなことを言われて見送られちゃ、改札をスイスイ通れる筈がない。IC カードがピピと行かず、引っかかっている。

「面白いなあ、Go さんは」

弥生はピピ、いや今日のところは、ビビである。電撃作戦、うまく行ったらご喝采！

さて、流通センターで降車した千歳と櫻は、モノレールに乗って、空港へ行く途中である。エアポートでクリスマスイブとはまたいいことを考え付いたものだ。

「毎度お手軽ですけど、一応予約は入れたので」

「ま、今夜は割り勘だね」

窓の外では離発着シーンが展開されている。昨日から昼間の時間が少し長くなっている。ので、気分的にまだ明るい印象を受ける。尾翼に西日が煌き、その反射がグラスにも映る。

白ワインに紅が差し込んだら、「乾杯！」 だが、櫻は一瞬、グラスに口を付けるのを躊躇い、指を唇に当てる。その仕草に千歳はメロメロ。やはり手が止まったまま。が、そのおかげで彼女の唇に薄く紅が注してあることに気付く。

「どしたの、千歳さん？ 白ワイン、お嫌い？」

「何かグラスに口付けるのもったいなくて、ね」

「そっか、姫様の唇、奪っちゃったんだもんね。そりゃそうだ」

櫻はニコニコしながら、ワインを含む。千歳は姫の唇とワイングラスとを見比べるばかり。紅が濃いのはどちらでもない。彼の頬が何よりも紅くなっている。

微熱？ それとも...

心なしか赤い顔で誰彼を待つフェミニンさん (X'mas version) が、新宿駅のサザンテラス口に佇んでいる。代々木駅方面にある社屋タワーの大時計は、その長針を水平に倒そうとしていた。

「Go Hey って名前の割には、遅いわねえ . . . 」

自動改札では、ピピではなく、ピピピピとか余計に鳴らしてまたしても引っかかっている誰彼さん。文花はピピと来たようで、様子を見に来たところである。

「あ、おふみさん」

「まあ、そんなところで遊んで。遅い訳だ」

思いがけない引き止め工作にはあったものの、何とか待ち合わせはうまく行った。

「たく、ケータイかけたのに出ないしさ」

「車内では常時OFFにしてるんで」

「ま、いっか。お誘いしたの私、だし」

業平は、文花の X'mas おめかしに内心「萌えー」の念。チャーミングと言え、弥生を想起することが多かったが、女性はいくつになってもチャーミングになり得るんだなあと、ふと溜息。

「文花さん、何かいいかも」

「そりゃ、センター三人娘の一人ですからね。ファンクラブ、入る？」

「会費は？」

「Go Hey さんなら安くしとわよ。でも遅れて来たからなあ . . . 」

イイ感じである。

イルミネーション見物はあとでいいんだとかで、連絡ブリッジを通過して、南口～西口のデパート内を突き進む。目指すはカジュアルなパスタ店。

「LLサイズでも値段同じなんですよ。ワインも飲めるし」

「文花さんてお嬢だから、もっとスゴイ店がお好みかと思いきや」

「お嬢様ってのはね、店を問わないものよ。誰とどう過ごすかの方が大事。ま、気の持ちようよね？」

お一人様、ワンコインでいただけるミニボトルワインをお互いに注ぎ合いながら、まずは乾杯。リーズナブル志向の客は少なくなく、店内は満員。注文したLLパスタが運ばれて来たのはそれでも十五分後のことである。

しばらくはおとなしくクルクルやっていたご兩人だったが、

「Go Hey さん、海の幸、お好き？」

「文花さんのは、野菜たっぷりですか」

「とっかえよっか」

「あれ？ だって魚介ってダメなんじゃ」

「生きて動いてるのがね。食材になってる分には大歓迎」

カップルが多い同店だが、大皿を交換し合ってるなんてのは案外少ない。傍目にはラブラブ？ ともあれ業平はトマトソースが意外と辛かったらしく「萌え」ならぬ「燃え」状態。笑いを抑えつつも、そんな彼をじっくり見入ってしまう文花である。今日のところは、仕事の話はなし。

「ところで、おタバコは？ ここ全面禁煙だけど」

「おかげ様で禁煙継続中ですから。ま、タバスコで我慢、て手もありますけど」

「じゃ、かけて差し上げましょうか？」

「ハハ、これ以上、熱くなっちゃかなわんです」

彼の中では確かに熱くなっているものがあつた。弥生のことにも気になるが、やはり...

「南実ちゃんとかタイプだった？」

いつものように唸っていた業平だったが、この突飛な質問には吹き出さざるを得なかった。帰ってきた魚介系のうち、ホタテなんか滑って、思わずヨコになっている。

「ハハ、言われてみれば、ですね。でも、打ち返して吹っ切りましたから」

「ああ、十月のあの時ネ。あれはよかった」

「そういう、おふみさんは？」

「そうねえ、掃部<sup>カモン</sup>センセのお相手しなくて済んできたし、気になってた人は櫻ファンだったことが先月わかったし」

「へ？ それって？」

「ああ、おすみさんじゃないわよ。オホホ」

「ハックション！ うう...」

「あら、大きなクシャミして。だいじょぶ？」

「また誰かが噂、それとも...」

「風邪でもひいた？」

ワインが回って熱くなってるんだろうくらいにしか考えていない呑気な彼氏である。こっちはプチプレゼントの交換を終え、メインディッシュが下がったところ。デザートはじき現われる。

「ホイップ増量とか、ムリかなあ...」

「ハハ、下手に増やすとまた櫻さんのドッキリが」

「ま、お口の周りに付いちゃったら、今日はそのまま、ネ」

またしてもメロメロになってしまう千歳。対照的にシャキッとしているのは、いただいた縁起物、金色のブタコインである。ブタの鼻を突きながら、不敵な笑みを見せる櫻。小作戦はまだまだ続きそうだ。

さてさて、十七時過ぎに新神戸に着いた舞恵と八広は、地下鉄なんかを乗り継いでイルミネーション眩い港町に来ていた。ガス燈が名物だが、この通りはケヤキの並木道でもある。ケヤキの身になれば必ずしも有難いとは言えないだろうが、その白を基調とした電飾にその女性はずっかり酔っている。ちょっぴりアルコールが入っているせいもあるが、こちらは彼女の方がメロメロ。

「ハクン、どうよ。散文とか、抒情詩とか」

「その煌びやかで柔らかな光のもと、笑みを交わしながら、人は行き交う。そして静かに想う。陽は沈み、魂は鎮まり」

ルフロンの目はウルウル。作詞家のやることは実に心憎い。

とうに十八時を過ぎた。二人は飛行機を間近に見物できるデッキに来る。滑走路のLEDもウルウル系なのだが、どちらかと言うと上空が気になる。聖なる夜に向けて広がるは夕闇、明滅を始めるは星々。惹き込まれるように眺めている。

城南島と違い、他にもカップルなぞがチラホラいるが、櫻は構わない。流れ星を合図に作戦開始。

「さくらのラは、ラブのラですよ、千歳さん」

「そっか、『咲く Love . . .』か。って、しりとりの続き？」

「フフ、続きも何も。もう咲き過ぎちゃって、どうしていいか、わかんないの」

彼の唇には仄かにクリームが残っていたようで、重ねてみたら甘い感じがした。それが程よい刺激となり、つつい長く熱くなってしまう。千歳はいろいろな意味でフラフラだったが、もう倒れることはない。ただ、飛行機の行ったり来たりが、どこか遠くに感じられてならない。

空港快速は疾く、乗り心地もなかなか。これに居心地の良さが加われれば、もう言うことはない。それでも甘え足りない彼女は、彼の手をとり、囁く。

「千歳さん、恋から愛って、やっぱりプロセスネタ？」

「櫻さん . . .」

右に埠頭公園、左は競馬場 . . . なんて歌が聴こえてきそうなロケーション。二人が座しているのはその競馬場側である。車窓からは都市の灯りが入ってくる。だが、鮮明に見えたり、ボンヤリしたり。

千歳は瞬きしながら答えを考える。京浜運河の上を滑走するモノレール。加速するのに合わせて、彼は彼女の手を握る。

「振り返った時、こういう過程を経たんだなあ、ってのがお互いに共有できてればいいと思う」

「てことはあ . . . 加速しちゃっても別にいいって、ことかな？」

快走していたモノレールだが、天王洲アイル近くに来ると、速度を落とし始める。

「僕は相変わらずスローなまま、かも」

高輪の脇道から見渡した品川イーストが、ここからはウエストの位置に見える。ビル群が眩い、という訳ではないが、今度は櫻が頻りに瞬きする。

「そっかあ。やっぱりクールなのね。でもいい。いいんだ。それが千歳さん、だもん . . .」

「あ、いや、努力は、します」

そう言いつつも、どうも声の通りが良くない。クールというのは合っている。だが、微熱があるとしたら？ クールじゃ済まないのは本人が一番よく知っている。

\* \* \* \* \*

微熱という意味では、櫻も同じか。クリスマスの当日は、朝からボーっとなっていていけない。どこまで進展があったのかは不明だが、文花がえらくシャキシャキしているので、実に対照的である。

「あらあら櫻さん、まるで恋わずらいみたいじゃない。隅田さんと何かあった？」

「え？ 何かって．．． そりゃあもう」

「あ、聞いた私がおバカでした。聖しこの夜で、よしよしってね」

「清？ はあ、掃部先生がどうかしまして？」

「ダメだ、こりゃ」

櫻は唇をかんだり、口に手を当てたりを繰り返す。どうにも動作が緩慢なので、冬木の流域情報誌サイトが先行更新された件を確認するにも、手間取っている。

「あ、データ入力画面、出てる．．．」

PC版も何とか形が整い、協賛金の受払についても話がついた。情報誌一月号の小特集に、今般めでたく例のシステムが紹介された、という訳である。ただ、当法人名同様、これといった名称が決まっていなかったのが泣き所。カウント画面だったり、ケータイ入力画面だったり、その場でお世話になるのは画面が中心なので、これまではその程度の呼び方で済んでいた。対外的に公開した際のことは、higata@の人々は正直深く考えてなかったのである。櫻はようやくハツとなる。

「えっと、エドさんから来たクリスマスメールに、Return でいっか」

余談だが、サイト更新の案内はクリスマスカード代わりに送られたものだった。特集掲載はプレゼント、ということらしい。この辺のセンス、さすがは Mr. Edy である。

程なく櫻発 higata@宛、「システム名称どうしましょ？」メールが発信される。その文末には、特に管理者、開発者、仲介者のご意見を伺いたい、と添えてある。

「千歳さん、これ見て来てくれればなあ。逢いたい．．．」

小梅が描いた<sup>平</sup>2Dツリーを見ていたら、思わず泣けてきた。ツリーはグリーン、されど心はブルー、そんな櫻のクリスマスである。

午後早々には、弥生と業平から同報返信が入ってきた。

「弥生ちゃんが『数えて Go・送って Go』、んでもってその Go さんが『弥生集計』って。この二人、どうなってんの？」

文花は苦笑しながらもご機嫌斜め。櫻は憂い顔で千歳からの返信をただ待っている。

閉館時間を過ぎてなお、第一指名の彼からのメールは来ずじまい。この時期になると、差し迫った業務もないので、文花はさっさと帰宅してしまった。

「どっかに出かけてるとも思えないしな．．．」

あわただしく施錠し、自転車に飛び乗る櫻。寒いとか何とか言ってはられない。風を切るように橋を渡り、早々と対岸にこぎ着けた。

息を切らしながら、部屋番号を押す。ガランとしたエントランスに、呼び出し音が空しく鳴り続ける。応答があったのは、彼女が解除ボタンを押そうとした、その時である。

「あ、ハイ。どちら様？」

明らかに声が囁かれている。

「私、櫻です」

「おお．．．」

扉が開くと、櫻は一目散。宅の前に着くと、呼鈴を押すよりも何よりも、玄関扉を叩く叩く。

「千歳さん、大丈夫？　じゃないか．．．」

「あ、今は何とか動けますから。でもうつしちゃうとマズイよね」

普段着に着替えてあるも、マスクをしている。可笑しくもあったが、ちょっぴり泣ける。逢えてうれしや、されどお風邪の兆候に気付かず情けなや、そんな心情か。

「メール来ないからさ、飛び出して来たんだ。でも、まさかね。お熱は？」

「櫻さんに来られちゃ、また上がっちゃうかも」

「はいはい、そりゃどうも。どれどれ？」

風に吹かれて来ただけあって、櫻の手は温かくはなかった。だが、その冷や冷やした感じが千歳には心地良かった。こりゃ微熱じゃ済まないのでは？

「寒かった、ってことですね」

「いやぁ城南島は僕の発案だから。ただ、バスの間隔が一時間でのはやっぱり長かった、てことかな。それより櫻さんは？」

「昨日はポカポカだったから。特にここが」

彼女は口唇を示しながら、微笑む。ただでさえ熱があるのに、こう来られては倒れてしまう。「八八、ま、横になっててくださいいな。何か買ってきますから」

日中は冴えないクリスマスだったが、櫻サンタさんの来訪で途端に晴れ晴れ。千歳はようやくメールをチェックし、システム名称の一件を知る。「数えて、入れる、サポートシステム、だとすると．．．」ある単語のおかげで、急に元気になってくる。だが、今日のところはお預けだろう。

\* \* \* \* \*

二十八日はセンターも仕事納め。前日までに資料類の棚卸は終えていたので、今日は専ら大掃除である。午後からは頼りになる(?)男性が来る予定。櫻はさっきから落ち着かない。

「櫻さん、エプロン、裏返しじゃない？」

「あら、私としたことが。ホホ」

「ま、そういうのもチャーミングのうち、かもね」

今週の文花は、櫻が見てもどこか可愛らしい印象を受ける。イブにきっといいことがあ

ったに違いない、と確信しているが、下手に聞き出してノロけられたら大掃除にならないので、あえて聞かないようにしている。逆に文花は話したくて仕方がないのだが、相手が相手だけに、ぐっと我慢。ここだけの話、という訳にはいかないことは重々承知している。

「あ、千歳さま。いらっしやい」

「こんにちは、姫様。あ、おふみさんも、どうもです」

最終日だから今日は許そう、と思っている事務局長だが、我慢を重ねるにも限度はある。

「いいなあ、何かラブラブで。私も呼んじゃおっかな．．．」

「誰を？」

カウンターで対面している二人は声を揃えて問う。

「え、いえ別に。さ、掃除掃除！」

動揺を隠すようにマスクを着ける文花。表向きはホコリ除けだが、話したい衝動を抑えるためでもある。

「文花さん、マスク．．． それって裏じゃ？」

「あらら」

この場合、あまりチャーミングとは言えなかつたりする。

千歳もマスクをしているが、こっちはあくまでお掃除シフト。お風邪の方は、彼女の一夜の看護のおかげもあり、すっかり快復した。櫻はカウンターやデスク周り、千歳は窓際、少々距離はあるが、話し声はヒソヒソ調。

「ところで千歳さん、例の名称、本気で『KISS』を推す気？」

「いやあ、あの時は熱があったから。何か違うの考えないかね」

「私だったら、『DIO』とか。Data Input & Output．．． どう？」

二人で操作すればDUOか。千歳はそこから単語を捻り出す。

「ちょっと変えて、Data Upload system On-site．．． 略して『DUO』ってのは？」

DUOで考えた、というのがまた好い。手を休めつつ、櫻のPCから出来立ての案をhigata@<sup>三人</sup>に発信する。文花はブラインドを拭きつつも、

「恋人どうしてのは、あぁいう風に見えるのね。私もいずれ．．．」

片方の手はブラブラ。誰かさんが来たからではないだろうけど、三人の大掃除は、至ってスローである。

## 一月の巻

### クリーンアップ初め

仕事納めはしたものの「干潟納め」は叶わなかった。一年の締めくくりとして歳末リセットクリーンアップを実行する手もあったが、不慮の風邪で作業スケジュールが狂ってしまったこともあり、見送り。センター大掃除は予定内だったが、本年最後の土日の過ごし方がいけなかった。彼女と過ごす時間も作れず、サーバのメンテやらバックアップやらに追われることになる。晦日中に何とか仕事納めとなり、大晦日の約束に間に合わせることはできたものの、じっくりスローに過ごせなかったのがどうにも居たたまれない。

毎日でも彼に逢いたい彼女、そんな気持ちに届きたいのはやまやまな彼。千歳としては、

仕事の性格上、自由が利きそうで案外そうでもないという事情あってのスローラブなのだが、やはりプロセス主義者としての何かが邪魔をして、櫻の加速を抑えてしまっているようである。

本日一番乗りの発起人は、寒々とした干潟を観望しつつ、自身の置かれた複数のプロセスを展望している。一年の計を巡らすには恰好の場であるが、相も変わらぬ漂着ぶりを見ていると、頭は冷静でも心はざわついてくる。おそらくはこのまま年を越してしまったのだろう。一人でも片付けに来るんだった、と悔悟するばかり。だが、年始早々溜息を吐く訳には行かない。またここから、このゴミから何かが始まるのである。

higata@では賀詞を交歓し合ったりしていたが、実際にメンバー間で顔を合わせるのは今日が最初。それぞれ楽しみにしている筈だが、定刻の十時にやってきたのは、この二人くらいである。

「おーい、Go さーん、STOP!!」

「弥生嬢じゃございませんか。Go と呼んで Stop って、それシャレ？」

何故かぬかるみが目立つグランド脇道。ノロノロの R S B <sup>リバーサイドバイク</sup> を停車させるのは訳なかった。

「あけおめ、でございます。今年もよろしくネ」

ツッコミを期待していた業平だったが、こう来られては調子も狂う。つい深々とお辞儀してしまうのであった。「苦しくない、<sup>おもて</sup>面を上げい、アハハ」 仲良く干潟入りとなる。

三人で会釈し合っている間、冴えない顔した姉君と上機嫌の妹君は、バスを下車したところである。午後以降の予定を考慮して、今日は自転車ではない。姉妹でゆったり会話するには適したシチュエーションなのだが、

「年越しは一緒に過ごせたんでしょ。私、ちゃんとその辺も考えて．．．」

「まっね。宅にお招きして、一緒にカウントダウンもできたし、終夜電車に乗って初詣にも行かせていただきましたし。おかげ様で」

「上出来じゃない」

「なのにさ、その後はセンター開館日までパツパツよ。昨日だって、文花さん休みで、せっかく二人きりだったのに、何かパツとしないってゆーか．．．」

「姉さん、ピッチ上げ過ぎてない？」

「上げられないから、どうしたもんかってなるのよ。蒼葉はいいわよ、情熱系だから。ちょぴうらやましいかも」

「あら、私だって。アラサーのゆっくりラブ、いいなあって。櫻姉見てたら、うらやましくなっちゃったから、それでわざわざ渡仏したのよ」

姉妹喧嘩ではないのでいいのだが、お互いに刺戟し合っていることは明らか。どちらからともなく足を止める姉妹。上出来の妹はなだめるように言って聞かせる。

「まっ、いずれ一緒になるんだろうから、今はそのヤキモキ感を楽しめばいいのよ。今のうちよ、そういうのって。あとは二月十四日が来るまで待つ。その日になったら、一気に仕掛けちゃえ。ネ？」

「蒼葉．．．」

河原の桜はすっかり葉を落とし、寒々しく見えるが、内に秘めたる何とやら、である。

春に向け、開花に備え、着実にエネルギーを蓄えている。櫻はそんな木々を見上げながら、再び想いを充填していく。「想い？ じゃ済まない？」 晩夏は想いだったが、今となつては愛慕の念だろうか。それは密かに、そして確かに募っていく感情。唇に指を当てる仕草が増えた姉を見ながら、妹も同じように感情の変化を感じ取る。「そういうのも C'est la vie. かな」

新年挨拶方々、欠席連絡を入れていたのは、南実、文花、冬木の三人。となると、あとはこのカップルが来ないと始まらないことになる。こっちは自転車並走かつ爆走中。

「ハクン、もっと早く起こしてくんなきゃー」

「まさか、そこまで支度に時間がかかるとは思わなんだから」

「クルクルフロンスンで通ってたから、しっかりウエーブ入れないとダメなんよ」

「こうやって風切って走ってるうちに、ちゃんとクルクルになるっしょ。これぞナチュラルウェーブ。へへ」

いつもならバシッとやるところ、さすがに走行中は難しい。

「んなこと言うから何か無造作風になってきちゃったしい」

「ラブリーな感じでいいと思うよ」

どこか危なげな二台の自転車だが、グランド脇道に入ると、益々ヨロヨロになっている。誰もいないのをいいことに、堂々とグランドを横切っていた姉妹は、離れたところを抜き去っていくその頼りない二台を見つけ、クスクスやっている。ハンドル操作に集中しているカップルはそれどころではない。当然、姉妹にも気付かない。

カップルとは言えないかも知れないが、仲良しであることは相違ない。より若い二人組が、後続のバスで到着した。千住姉妹に遅れること十数分。

「六月クン、干潟来んの久しぶりじゃない？」

「姉ちゃんと同じ。十月以来だったりする」

「じゃ崖崩れ現場のその後ってまだ見てないのかぁ」

「う、崖、崩れ．．．」

足取りが重くなってしまった小六男子である。中二女子は笑いをこらえるように先を急ぐ。

「ほら、早くしないと崩れちゃうかも」

「あ、姉御ー」

冬休みラストデーにして、干潟参り初日である。絵日記でもあれば締めくくりのネタとしてはバッチリだろう。だが、二人にとっては宿題も何もない。あるのは宿題を超越した何か、である。

かくして、十時十五分を回り、メンバーが揃う。

「では改めまして、皆様あけましておめでとうございます。今日は干潟初め。干潟の方もあけまして、ですね」

一同恭しく頭を下げ合っているが、櫻のおなじみの弁舌に苦笑いが浮かぶ。嗚呼、越年漂着．．．とさっきから沈痛な面持ちを引きずっていた千歳だが、これで表情がリセット

される。「よし、干潟もりセットだぁ！」 声には出さずとも、意気は揚々。干潟の方もキラキラし始めた。

「あーあ、年が変わっても、櫻姉効果は健在か。すっかり晴れちゃったじゃん」

「何よルフロン、そんなに雨が好きなの？」

「この時季はやっぱ雪でしょ。雪が降りゃあさ、ゴミも隠れちゃうから、楽々……」

周囲は何となく白々としているが、舞恵はハイテンション。クルクルが高じてバサバサになっているもんだから、余計に可笑しい。

「私も雪は好きだけど、それって何か違うな。神隠しならぬゴミ隠し？」

「あぁ、いざって時はハチが居ますから。雪の中を駆け回って、ここ掘れってやってくるよ、ネ？」

「ウー……」

ハレ女さんも雨女さんも大笑い。その傍らで蒼葉はふと考える。「白い干潟か。積もったら来てみるか」

次の画題を得たようである。

日射に応じて、気温も上がって来た。櫻は前回出し損なったアナログ温湿度計を手にする

と、

「さ、気温は二桁。湿度は五十パー。クリーンアップ日和ですワ。始めましょっ」

千歳を目で追う櫻。目線が合うとウインクして返す。今更ながら、パキューンである。

「千兄、大丈夫？」

「あ、姉御……て、何かまた背伸びた？」

「伸び盛り、育ち盛り、ですから。ついでにお色気の方も、どう？」

もう少女とは呼べなくなっているのは事実。ウインクして魅せる小梅にちょっぴりキューンとなる千兄であった。大丈夫とはとても言えない。

崖の修復に着手し始めたらしく、例の拡幅ルートの方は一時的に通行を止めるための小フェンスが設置されている。下手に崖上を歩かれて崩落するようなことがあっては河川行政の名が<sup>すた</sup>廃るといもの。沽券に関わるから、という理由かも知れないが、やらないよりはいい。応急的ながら、まぁ評価ができる策である。ヨシはすっかり枯れ、くすんだ色を辺り一面に拡げる。夏場のあの勢いは何処へやらだが、これも木々と同じ。次のシーズンを待ち侘びるの図、といったところだろうか。そんな枯れヨシを払いながら、九名はかつてのルート、脇の細径からソロソロと下りて行く。

「ま、吹き溜まり、あ、潮溜まり？は散々だけど、水際はそれほどでもないスね」

「でも、流木が邪魔だぁね。大雨って降ったっけか？」

八広と業平がブツクサやっていると、弥生が割って入ってきた。

「そう言えば、Goさん。ご自慢の機材は？ 吸引機見たかったのにい」

「あれは微細ゴミ担当の小松さん向けだったから。それに論文まとめるのに必要なデータは揃ったとかで、何かもういいみたいな？ そんな感じ」

「小松さんどうこうじゃなくて、むしろ居ない時こそ使わなきゃ。てゆうか、その話、メーリスに流れてないし。何でGoさん知ってんの？」

「ふ、文花さんから聞いたんだ」

「何だかなあ．．．」

毒気モードではあるが、やはりちょっと違う感じの弥生嬢である。仮に今日、文花がクルマで機材ともども乗り付けて来たりでもしたらどうなっていたか。ヒヤヒヤが続く業平である。

そんな二人を余所に、クリーンアップ初めはすでに始まっている。居ても立ってもという程ではないにしろ、ここに来ると体が勝手に動いてしまうらしい。まずは大物、というのも習慣化しているせいか、男衆二人は古木の根っこを手始めに、木杵やら角材など木関係を担ぎ出す。業平が加わった後は、より重たい部類、大型シート、ウォーターサーバ、そして、

「ハハア、久々登場だねえ。バッテリー。しかも三つ、いやあっちにもあるから四つか」

「こいつあ明らかに不法投棄スね。漂流したらご喝采」

「これ使えればな。そしたら油化装置とか発電機とかも要らないだろうに．．．」

まだ修復前なので、えぐれた崖地が隠れ蓑のようになっていて、ここぞとばかりに置き去られているのである。男性三氏は、処遇に窮しつつも、どこか楽しげに談議している。

「やっぱりホイッスルとか吹いてタイムキープしないとダメかしら」

「まあまあ。軽はずみに持ち上げると腰に来るぞい、とか打合せしてるんよ、きっと」

「Goさん、おっちょこちょいだからなあ。心配．．．」

三氏に対応するように、三人の女性達は手を休めつつも、本日の厄介エリア、干潟中央から水際に向けペットボトルなんかを放っている。大物除去後の干潟面は広さを増し、余程の大波が来ない限りは大丈夫との判断でとにかくポイポイ。こっちも何だかんだで楽しそうである。

期せずしてお相手不在になっている蒼葉は、上流側に漂着していた（いや放置か？）取っ手付きのプラカゴを活用し、拾ってはポイ、というのを繰り返している。誰が云ったか、干潟をうろつく女というだけのことはある。隈なく周回し、テキパキと、やはり愉快そうに片付けていく。その所作、その足取り、そして表情。何につけ画になるのがモデルさんである。

バッテリートリオよりも下流側では、例の新名所、入り江の辺りを少年がポイポイやっている。ここまで深々となってしまったのは、自然の作用・摂理ゆえ、六月が負うものでは毛頭ないのだが、きっかけを与えてしまったことを自責しているらしく、やたら寡黙に一つまた一つ．．． 見かねた小梅が優しく声をかけてくる。

「六月クンたら、そんな顔しちゃってえ。スマイル、スマイル．．．」

「だって、まさかこんなことになってるなんて。オイラのせいだ」

「トーチャンに頼んであるからさ。そのうち元通りになると思う。ダイジョブ」

「それって、グッジョブ？」

六月のいつものスマイルが少し戻ってひと安心。

「積石んどこに引っかかってたんだ。これに入れちゃお」

紙燈籠を回収した時と同じような発泡スチロール箱を小梅は手にしている。六月は何となく懐かしげにそれを見遣ると、我れ先にとトレイやら小型ペットボトルやらを突っ込み始めた。

「あ、ズルイ。小梅も！」

てな感じで箱入れ競争をしていると、二人で同時に手にするものも出てくる。それは当所では常連の配管被覆。

「何かリレーしてるみたいだ」

「でも、へニャへニャ」

形状は兎も角として、バトンを受け渡す、そんな仲というのがよくわかる。これって友達以上？

今回は誰が何、というのはない。気分次第、手当たり次第、である。それでも各自要領は弁えているので、目に見えてリセットは進んで行く。が、如何せん手許が覚束ない。好天かつ適温につき、<sup>かじか</sup>悴んだりすることはないのだが、軍手を外せない以上、ポイポイにも限度が生じてくるのである。中央を覆う漂着ヨシにはなお、フタの類、吸殻、個別包装、小ストローなんか絡んでいるが、軍手越しではつかみにくい。さらば枝を驚づかみにしてバサバサやればよかろうとなるも、これが存外にも湿気を含んでいて、軽々とはいかない。何回かに分けてバサ<sup>つかせる</sup>のも手だが、その回数たるや、である。

さらに良からぬは、服装か。男性陣は示し合わせたように汚れても良さそうなジャンパーだかジージャンだかをヒラつかせているのでまだしも、年改まって最初の顔見世ということもあって、女性陣は相応のファッションに身を包んでいたりする。クリーンアップスタイルにはなっているものの、舞恵はフード付きのブルゾン、弥生はミリタリー系ロングコート、千住姉妹は色違いだが、同型のカジュアルトレンチコート、小梅嬢はボアブルゾンである。

「初姉のこっそり借りて来ちゃったんだ」

「多少大きい、っていうくらいね。よくお似合いで」

「エへへ、櫻さんのも着てみたい、な」

「八八、おませさんネ」

時節柄、軽装という訳には行かないが、脱いだり着たりが易々とできないというのは考え物。男性諸氏よりも力が入っていた上、気温上昇も手伝って、すっかりポカポカしているシスターズである。動きにキレがなくなってきたとこへ、残ったのは拾いにくい表層ゴミ、というのがここまでの運び。ひとつ衣装替えでもして、ひと息入れるのが良さそうだ。

スクープ系を追っていた千歳だったが、かくして被写体の変更を迫られることになる。干潟はさながらファッションショーの舞台。

「千歳さん、どう？」

小寒だけに、あまり寒くもないため、総員とつかえひっかえで外套の試着に夢中になる。

「千さんたら、櫻姉ばっか撮って。私も」

千住姉妹は、タイプの異なるブルズンを着用中。カメラマンはポーズを指示するでもなく、ただポーとした感じで、シャッターを押している。姉妹の間に、ロングコートの小梅が入り込んで、これといった反応がない。

「何か千兄、おかしくない？」

「まだお熱があるみたいネ」

「おかしいなあ。風邪は治ったはずなのに．．．」

千歳は、「はい、ポー．．．」と言いかけて、そのまま停止。ズが出るまでに時間がかかったため、ずっこけ写真になってしまうのであった。

そんなずっこけ組を他所に、揃いのトレンチコートの二人は、ヒソヒソ話に興じている。

「いいな、その髪を感じ。あたしも無造作路線で行こっかな」

「だからさ、これはその、風のイタズラで」

弥生は、見た目ざっくばらん but 内面ナイーブの舞恵に、ちょっとしたヒントを得たところである。

「ねえルフロンさん、意中の人を射止めるのって、ボサボサとかデレデレとか、そんな要素がカギだったりする？」

「ナヌ？ 何か聞き捨てならんなあ。でも、それって当たってるかも。Bossa de レレとでもしとくか」

「あ、でもなあ、キャラ変えるのって、ちょっとなあ」

「舞恵のはあんまし参考にならんさ。櫻姉のホラ、咲く love 系がオススメ。秘めた想いを少しずつつか、ステディ感が大事よね、やっぱ」

「櫻さんのは相思相愛だもん」

「いや、そうは言っても、何らかのアクションがないとさ」

「下手に仕掛けてNGってのはイヤ。また引きこもりになっちゃう」

「弥生ちゃん．．．」

空気の読める(?)カメラマン千歳は、この二人については遠くからシャッターを押すにとどめた。

業平、八広、六月の各年代トリオは、千歳を羨ましく見ながらも、せっせと漂着ヨシと向き合っている。蒼葉ご用達のカゴを空にして、その上でバサバサ。目立つゴミが引っかかっているのを中心に振り落としている。六月は、カゴに入り損なったのを拾いながら、ファッションショーに視線を転じる。蒼葉に対する萌えモードは封印。年の近い姉御が今は気になる。「何なんだろう、この感じ」 兄貴分は近くに一応いるものの、この手の相談に乗ってもらうにはイマ一つ。

「あちゃー、これってチャッカ何とかスか？」

「火が点いたら、燃えーだね。な、六月氏」

「八、八八．．．(やっぱダメだ)」

とまあこんな具合でヨシをどかしていたら、冒頭で話題になった雪が出てきた。

「八八ア、こりゃまたよく溜まったもんで」

「飛び散るのをヨシが塞いでたってことスか」

試着と撮影を終えた一団がゾロゾロと集まって来る。

「あら、粉雪じゃん」 舞恵は楽しげ。

「は、早く集めないと」 櫻は物憂げ。

「いっそ、パーっとやっちゃえば？」

「ルフロン、あなたねえ」

「やべ、ウソウソ」

「これでゴミ隠した、デコレーションだ、て言いたいのはわかるけど、そういうのはね、文字通り『粉飾』なんよ。わかった？」

一同苦笑気味なれど呆然。愛妹の出番ではあるが、

「櫻姉ったらぁ．．．。うまいけど、干潟三周ね」 さすがにフォローしようがなく、指令を出すのが精一杯。ピューとかなったら、それこそパーである。

今日の課題は、微細ゴミとどこまで対峙するか、である。発泡スチロール粉雪は何とか回収できたが、この調子だとまだまだ発掘されそうな予感。ヨシ束ごと袋詰めするというのもアリだが、袋が足りない。

「Goさん、やっぱ要るじゃん。掃除機」

「充電式、早期開発します。でも開発費がなぁ」

弥生のツッコミが今となっては快い。だが、余裕がないのは事実。舞恵はこれを聞いてポンと手を打つ。「二人とも応援したげるさ。フフ」

蒼葉の指示通り、干潟を周回していた櫻がここで一旦仕切りを入れる。

「ま、今日のところは、細々したのは目をつぶるということで。あとで束を奥に押しやるってんでいかがでしょ？ 今はまず散らかしちゃったのを拾いましょう。何か水位上がって来たみたいだし」

千歳は率先して、ポイポイ品を収集しにジメジメ観のある地点に足を向ける。だが、水気をたっぷり含んだ水際は、歩く者の足を捕捉するようになっていた。「な、なんと．．．」

集合時刻前後は、むしろ退潮していたように感じていた弥生は、ケータイを取り出すと潮汐情報を探し始める。

「ああ、千さん、今日は十時前が干潮ピークだったみたい。つまり退きたて、てこと」

「八八、珈琲は挽き立てが良いけど、干潟はそういう訳にはいかないってか」

ペットボトル等々をカゴに入れて戻って来たのはいいとしても、泥靴ってのが冴えない。おまけにこの駄弁と来た。

「違いがわかる男、か。フフフ」 櫻はウケているが、

「千兄も櫻姉もしょうがないなぁ」 小梅は半ば呆れている。

「じゃ仲良く周ってらっしゃい」 蒼葉は毎度この調子。

可能な限りのリセットを終え、結果がまとまったのはメンバー集合から実に一時間余り後。ショーとかチャレとかで休み休みだったことを考えれば、ペースとしてはまあまあか。

「ではでは、モバイル DUO、行きまーす！」

「頑張ってね」

「二人でやるのよ、Goさん」

名称が決まったことで、その意義もより明確になった。一人が読み上げ、一人が入力する、二人で DUO。こうした地域貢献活動に華を添えるシステム、と言ったら言い過ぎか。ともあれ、設計者と開発者は、今度はそんな華の部分から自ら検証するように、あぁだこうだやりながらも和やかにピピとやっている。

「そっかぁ、数が多い品目が上に来るようにねえ。さすがだね」

「オホホ、まだまだ進化させますわよ」

新年初入力&初送信された内容(抜粋)は次の通り。

ワースト1(1):ペットボトル/四十、ワースト2(3):プラスチックの袋・破片/三十五、ワースト3(2):食品の包装・容器類/三十三、ワースト4(4):発泡スチロール破片/二十四、ワースト5(-):タバコの吸殻・フィルター/二十二(\*カッコ内は、十二月の回の順位)。前回ワースト5だったフタ・キャップは、一つ順位を下げ、十七。ワースト1のペットボトルにはフタが付いた状態のものが多いため、外して数え直せば、間違いなくワースト5内に入るだろう。ただし、世界共通の調査では、あるがままの状態が優先されるため、外した分が上乘せされることはない。その辺は六月も十分承知している。

加算しようがしまいがフタはフタである。アフターケアが欠かせない。少年は千歳のバケツを拝借し、フタを外しては洗って、というのを繰り返している。

「堀之内センセと相談したら、とにかく再生工場に持って行こうって話になったノダ」

「へえ、わざわざ？」 蒼葉が尋ねる。

「春休みのどこかで、場所は木更津。小児料金狙いならホリデーパスだけど、平日に行くとなると18きつぷかなあ。あ、ぶんかさんも一緒に行くことになるかも。そしたらクルマ」

「何かのついでならいいけど。そっか、電車乗るのがメインか」

「小梅もついてこっかな」 蒼葉を制するように姉御がしゃしゃり出る。

「小梅ちゃんが付き添ってくれるんなら、あたしはいいか。でも春の房総方面でいいかもね」

実の姉も乗り気になっている。どうやらこの話、ちょっと大きくなりそうである。

## CとSのR

忠実なハチ君がここ掘れ云々とかやると、まだまだ出てきそうではあったが、今日のところは正におあずけ。リーダーの一計で、手が回らない分は干潟奥に退避させるなどしてあるが、収集数量が前月よりも減じたのはまあよしとしたい。十から二十の間のゴミは、大小スプレー缶、各種ストロー、個別包装類(小袋)、紙パック類、食品用途外の容器&袋類といったところ。白物のプラ容器は、用途の別が付けにくいものもあるが、明らかなのは納豆、豆腐、そして、

「何で茶碗蒸しの容器が棄ててあんだか」

「え、それってお茶碗じゃないでしょ。正しくはプラ容器蒸し」

「じゃプラ容器蒸しの容器？ って、櫻さん、あのねえ」

「どうも千歳さんと喋ってる茶番になっちゃうから困るのよねえ」

茶碗と来れば茶番で返すのが櫻流。二十代女性陣はこの際無視!の構えだが、小梅は一人でクスクスやっている。六月はそんな小梅を見て、満面のスマイル。茶番も捨てたものではない。

袋詰めはまだ仕掛<sup>しかかり</sup>中。千歳はプラ容器をひとまず置いて、スクープネタ<sup>あつ</sup>を撮り蒐めるこ

とにした。バッテリーなど序盤の重量系は現場で押さえたので、今はその他の袋入り前の品々が中心。ペットフードの缶、クリアファイルとバインダーのセット、ヘルメット．．．折り畳んだブルーシートに至ってはまだ使える品である。

「あ、隅田さん、こいつも」

八広が手にしているのは赤い筒。

「て、これもまだ使える系？」

以前ほどデレデレした観はないが、彼氏にしっかり寄り添っているルフロン嬢がチャチャを入れる。

「あん？ 発煙筒でござんすか。煙が出たらお立会いーってね」

そう言えばこのお嬢さん、煙とご縁のある女性だった。

「ルフロン、今日は大丈夫？ 煙と来りゃ．．． あ、業平さんもだ」

話し振りこそ普通だが、目線は厳しい櫻である。

「文花さんにもクギ刺されてるし、ここ数カ月は禁煙キープしてるから」

「あーら、舞恵もよ。今年に入ってからはずっとリフレッシュ中。新ルフロン、いやいや蒼葉ちゃん、新しいってフランス語で何だったっけ？」

「nouveau ネ。ホラ新酒のこと、ボジョレ．．．」

「そうだそうだ、ルフロンヌーヴォー。これで決まり。皆さんヨロシクです」

と、ここで拍手でもして旨く盛り上げておけばいいものを彼氏はつつまらないことを口走ってしまう。

「ヌーッと現われて、怒るとヴォー、へへ」

「このお、ハチ！」

仰せの通り、怒ると怖いヌーヴォーさんである。こうなると、発煙じゃ済まない。

「ハハ、発火しちゃったい」

六月が見事盛り上げる。だが、弟のそんな絶妙ギャグも姉の耳には届かない。弥生は業平の口から文花の名前が出てくるのがどうにも気になっていて表情が硬くなっている。

「そっか、イブの先約ってもしかすると．．．」

徐々にピピッと来たらしく、今度は口許から表情が緩んできた。だが、胸の内は赤い筒状態。我ながらくすぶ 燻るものを感じずにはいられない弥生嬢であった。

何はともあれ賑やかにやっている面々だが、発起人はモードが変わってきた。週末のセンター行事、ゴミ減らし協議の件で頭がいっぱいになって来たのである。まずは今回のデータを加算して、現状を整理して、そんでもって現実的な解決策をいかにして導き出すか。そのためにはあと何が必要か。

「千歳さん、**今日は何が変よ。大丈夫？**」

「今度の協議の場でね、話し合いに必要な題材をどう出そうかな、って」

「今日のを含めて、今までの集計についてはご心配なく。早めにまとめて送りますから」

「先週もプレゼン用のをあれこれ作ってたんだけど、やっぱ集計次第だね。助かります」櫻は一瞬息を止め、真顔で聞き返す。

「先週って？ 正月二日とか三日とか、ってこと？」

「櫻さんとデートしたかったけど、そんなこんなで連絡しそびれちゃって。失礼しまし

た」

「なあって。それならそうと」

一人でヤキモキしていたのが情けないやら、それがまた面白おかしいやら、急に力が抜けたようになってしまう彼女である。だが、すぐにシャキッと背筋を伸ばすと、

「千歳さん、何て言うかこう理想像みたいのってあるでしょ？ それを一例としてプレゼンして、会場からも『こうありたい』って声を集めると、具体策が見えて来ませんか？」

「あ、業務プロセス改革でもそういうのあったっけ。As IsとTo Beだ。そうさそうさ」

櫻の機転に救われる千歳であった。理想像とは言い得ないが、かねてから思料していたことはある。その一つは、上流側、特にバーベキュー広場を発生源とするゴミを抑止したい、である。三月の衝撃、つまりその系統の漂着ゴミが彼を駆り立て、輪を広げつつ、様々なプロセスを派生させつつ、今日の回まで至っていることを考えると、まずはその点を特化させて悪いことはない。勿論、より根源的に、ゴミにならないような商品とは、ゴミを出させないようにするためのサービスとは、といった討議もあって然るべきではある。だが、まずは身近なところから、取り組みやすいところから、であろう。飛躍し過ぎないTo Be（飛べと読めるがそうではない）をプレゼンターがまず示せばいい訳だ。頻りに頷く千歳を見て、櫻はもうひと声かけてみる。

「週明けには河川事務所からの回答書も来るでしょうから、それを見ながら協議して、また要望出してみるってのもいいかも。いざという時は、<sup>まなむすめ</sup>愛娘作戦？もあることだし」

「櫻さん、ありがとっ！」

気が付くと、両手で思いきり握手している。櫻は心の中でこう呟く。「そうそう、その勢い。加速よ加速。フフ」

真面目なお二人さんが事前協議をしている間に、再資源化系の<sup>すす</sup>濯ぎ、可燃・不燃の仕分けと袋詰め等々は進んでいた。各員は今、思い思いの時を過ごしている。

フタの収集を終えた六月は、業平の[プラ]チェックを見学しつつ、袋に印字された銘柄を目で追ったりしている。スキャナで読み込めば、メーカー名や品名は蓄積されるものの、感触とか質感といった感覚的な情報は不可能。ところが、この少年の目と手に掛かれれば、総合的に記憶されてしまうから空恐ろしい。

「何つうか、人間スキャナだねえ。六月氏は」

「へへ。でも[プラ]の表示んと共に、PPとかPEてのまで打ってあるてのは知らなんだ」

「その辺も記憶しちゃうってか？」

「いやあ、さすがにメモしないと。でもそのうち見るか触るかすれば違いがわかるようになるかも、です」

「自動分別人間かぁ？」

「人間だったら手動っしょ？」

ごもっとも、である。

新年初リセットを終えた干潟は、幾分水嵩が増したとはいえ、すっかり広々となっている。この清々しさを満喫しない手はなかるう、ということで、女性が二人、さっきから行

ったり来たりしている。

「ねえ、蒼葉さん、油絵ってその後どうなったんですか？」

「今月中には審査結果が来ることにはなってる。ま、結果はどうあれ、新作をね、早速描こうとは思ってた」

「今度はしっかり見学したいな」

「じゃ、塾がお休みの日にでも。晴れた日の午後とか。または雪の日。雨はツライけど、雪なら何とか」

画家たる者、明確なモチーフがある限り、コンディションを問うたりはしない。そんな態度は、自然と歩く姿勢にも表れている。早くも見習うべきものを見出した小梅はいま一度背筋を伸ばすと、蒼葉を追うようにシャキシャキ歩き出した。

[ プラ ] ブラザーズの様子を眺めていた千歳だが、触発されるものがあったか、袋を閉じようとしていた手を止め、俄かに手動分別を始めた。汚れが少なそうなものを選び出しているようだが、何でまた？

「ちょいちょい、隅田のお兄さん、お探し物か何かですかい？ さては、宝探し？」

弥生ではなく、舞恵がツッコミを入れてくれる。

「八八、たまには見本でも、と思って」

「そうか、今度の土曜日、それを出そうってか」

早々とタネ明かしするのは櫻。

「画像を映し出すつもりだったけど、よりリアリティがあった方が議論しやすいかな、と思って」

「漂着<sup>ハツモノ</sup>初物ってことでも、とっとくといいことあるかも、スね」

「さすがはお宝の八つつあん。初物って言われりゃ、ゴミも捨てたもんじゃないって、そう思えるさ」

珍しく彼氏を持ち上げるルフロンである。話はここから、一月の予定等々に。

「で、エドさんの情報誌スケジュールを逆算して、一月の第三週、多分ギリギリで金曜日になりそうなのよ、例の商業施設訪問」

「ああ、CSRインタビューの件すか」

「あれって九月だったかな。エド氏と石島母が話し込んでてさ。CSRがどうのって確かに言ってた気がする。ちゃんとそういう話に発展してたとは．．．」

弥生はイマイチ呑み込めていないようである。

「そのお、CSRって何ですかあ？」

こう来ると、ついからかいたくなるのが櫻の性分である。

「Cは、Chitoseさん、SはSakuraさん。RはrelationのR。二人はどうなってんの？ ってことよ。ネ、Chitoseさん」

「Rはresearchかな。二人で仲良くゴミ調べ」

その益々困惑した顔を舞恵に向けてみるも、答えは出ない。

「おおおお、CさんもSさんも息合わせちゃって。せっかく学生さんが真面目に質問してんのねえ。で、何の略だっけ？ ハクン」

「企業の社会的責任。金融機関も例外じゃないよ。ルフロンさん」

「ホーイ。ま、舞恵はちゃんと考えてるさ。本業優先だろうけど、社会貢献活動だってCSRざんしょ？ 支店の皆さんに声かけてクリーンアップってのも良さげだし」  
髪型については何ともいえないが、言動は頼もしい限りの今日のルフロンさんである。

高度は低いが太陽は南中状態に近づいている。袋を閉じたら、お開き！と行きたいところだが、そうならないのがこの人達のいいところ。雑談はまだまだ続く。

「それより音楽会さ、次はいつ？」

「今ここにいる皆さんのご都合次第。決まったらすぐにでも押さえます」

「皆さんてゆーか、Goさんしょ、まずは」

「てへへ」

これには、千歳も櫻も「へ？ だ、ったの？」となる。自分達のこと頭がいっぱいだっただ、すっかり感度が鈍っていたようだ。

若い二人が話し込んでいる間、higata@の七人は集い、予定の協議を続ける。

「んじゃ、多少怪しいけど一月二十日で仮押さえネ」 ルフロンはすっかりその気。

「Goさんは必須。あとは、あたし、それとリズム隊のお二人が練習量を増やせば、格好はつくと思う」 弥生は誰かさんと一緒ならばそれでいいみたいな口ぶり。

「何かこうなってくると、どっかで発表会とか。どうスか、Cさん、Sさん？」 Y氏が尋ねる。

「例の発電機で以って、どこまで音が出せるかがポイント、かな」

「って、千歳さん、本気でここで演<sup>や</sup>るつもり？」

この件の言いだしっぺ、舞恵が口を挟む。

「ま、メーリスに話振ってみるに限るさ。お騒がせエドさんとか、知恵貸してくれっかもよ」

音楽会にしる、発表会にしる、彼女がハマっているのには、明快な理由があった。「自分をどっかで形にしてもらいたいし、流木アート楽器も試したいし、オホホ」

この調子だと、一月もあわただしくなりそうである。

六月はいつになくオドオド。対照的に小梅はチャキチャキ。二人の干潟デビュー当時は、これが逆だったような気がするが、いつの間にひっくり返ったのやら？

「で、姉御の姉御、えっとつまり……」

「初姉がどしたの？」

「試験でこれから？」

「そ、もう家ん中、大変よ。でもね、試験日=誕生日なんだって。だから変に張り切っちゃって。そんでもって合格発表日は小梅の誕生日。何としても受かってもらわないと……」

七人はいつしか二人を囲むようにブラついている。六月はそんな衆人に気を取られることなく、堂々とあるものを差し出す。

「勝田とか勝田台は遠いし、御徒<sup>カチ</sup>町ってのも何だし。『信じ行く』で新宿ってのも考えたけど、ちょっとね。そんで思いついたのがこれ。大姉御の合格祈願」

それは、京成押上線、押上⇄八広と印字された切符だった。これを見て駅名の当人が黙っていよう筈はない。

「おお、そう来たか。でも押上ってのはまた．．．」

「押して上げて、未広がリー。いいっしょ」

「六月クン、ありがと。でも小梅の分は？」

ちゃんともう一枚持っているから心憎い。

「いいなあそういうの。でも、合格祈願の定番は、やっぱ櫻さんに因んだ駅名じゃない？  
ホラ、京成佐倉とか」

「へへ、その佐倉って、勝田台より遠いじゃないですか。だから．．．」

「青葉もいいと思うんだけどなあ。そうだ、六月君。桜新町とさ青葉台を結ぶ切符ってのもあるよね。それって何か良くない？」

「ウン、桜と青葉の間って、あんまし」

「あ、そうか．．．」

日は照ってるし、無風なのだが、どこかでピューとなるのを感じる一同だった。受験生本人が今ここに居ないからいいようなものの、禁句は禁句。想起するのさえ憚られる。

「ちなみに、東北新幹線あおば号は1997年10月に、寝台特急さくらは2005年3月に、残念ながら廃止一、だそうです。ネ、六月？」

弥生の毒がここへ来て炸裂。だが、毒の情報源は何を隠そう六月君である。

「あー、それ禁句だったのに」

「フン、実の姉に縁起物よこさないからよ。バツじゃ」

千住姉妹は、苦りきった顔でお互いを見る。

「どっちも廃止てか」

「ま、痛み分けってことね。お姉様」

これにて一件落着。ようやくお開きとなった。

徒歩組は袋を受け持ち、荷台付き自転車を押す二人は、バッテリーを運ぶ。業平はRSBのため、どっちつかずではあったが、いつもの通り再資源化系を担ぎ出す。今回は軽めなのだが思うように進まず**往路同様**ノロノロ。まだ乾ききっていないグラウンドには、こうして様々な線と足跡が残ることになる。辺りの空気は暖かながらも小寒らしい凜とした感じを含む。グラウンドを縦断するのは気分がいいものだが、そんな空気を深呼吸しながらとあらば、さらに爽快、これぞリフレッシュ！である。

「ではでは、今度は土曜日。新年会もあるし。来られる方はぜひ！」

「これまでの集計結果の発表もあります。ね、櫻さん？」

「え、私が発表？ 千歳さんでしょ？」

こんな譲り合いはこの二人だからこそ。舞恵は「またかいな」という顔をしつつも、

「まあまあ。二人でおやんなさいよ。CSRなんでしょ」

かくして、ゴミ減らし協議の行方はCとSの二人に委ねられることになる。

バッテリーを降ろすと、舞恵と八広はひと走り。新たに見つけたランチ店へ急ぐ。小梅と六月は、業平&弥生のおじゃま、いやお供をするとかで、一緒にノロノロと商業施設方面へ向かって行った。残るは、千がつく三人。初音がいなくともカフェめし店、という選択肢もあるのだが、姉妹はズバリ千歳宅を指定。

「何か調達してからだったらいいでしょ。ネ？」

「八八、すっかり休憩場所になってるような。ま、大歓迎ですが」

「私、千さんとこ初めてね。こんな風にお二人の邪魔するのも初めて？」

「あーら、少なくとも一回、十一月にあったでしょ。忘れたの？」

「だって、もうちゃんとキ．．．」

お淑<sup>しと</sup>やかな姉は、おてんばな妹の口の前で手を翳し、続きを遮る。

「やぁね、恥ずかしい．．．」

「何それ？ 毎日でもどうこうって言ってたじゃん」

「蒼葉！」

「あ、そっかそっか。私、川の方、向いてますから。どうぞ、ご遠慮なく」

妹はどこまでも姉想い、加えて兄(?)想いでもある。今は何分咲きかに進展している二人だが、三十路の恋はつつましくありたいとどこかで思っているのだろう。蒼葉の言葉に甘えるフリして、腕を組んで歩くにとどめている。

「お互いにペースを尊重し合ってる、そんな感じ．．． いいなぁ」

蒼葉は少し距離を置きながら、二人のペースを押し量りながら、でもって、シャキシャキと歩くのだった。

キ、と来れば忘れちゃいけないのが清さんである。干潟詣でに行くつもりではあったが、途中で「道草」状態。

「ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ．．．」

いずれは喰うことになるのだが、今日のところは同じ道草でも搜索・採集どまり。荒川の河川敷においては限定的ではあるが、先生にかかれればこの通り、三種は見つかることになる。そう、明日は七草である。

「ま、何も明日じゃなくてもな。土曜に振る舞うさ」

鏡開きの翌日だけに、新年会はモチネタ中心かと思いきや、粥が出てくるのがまず確定的になった。だが、掃部公<sup>カモン</sup>の差し入れはそんなもんじゃ済まない。本日午後はひたすら何かに興じるおつもりである。

「おふみさんをビックリさせてやらねえと」 乞うご期待?!

一月の巻 おまけ

アプローチ、ソリューション

決して気が急いでいた訳ではないのだが、本日午後の協議の切り盛り役、Cさん、Sさんはともに早めのセンターご到着。図書館の前でバツタリ出くわして、思わず「へ？」と顔を見合わせる始末。本来は「おはよう」状態なのだが、挨拶し損なっている。

「千歳さん、カギ持ってないのに。どして？」

「待ち伏せして、おどかしちゃおっかな、ってね」

「まぁ、誰かさんの真似？ 今頃仕返ししようたってそうはさせないんだから」

正直なことを言えば、早く支度して午後に備えたい、ということなのだが、千歳も随分と茶目っ気が出てきたものである。櫻も本当のところはわかっているつもりなので、ここ

は緊張を紛らわす上で、違う話題を振ってみる。

「何かルフロンからメールが来てね。音を拾ってくれとかって」

「彼女も曲作るってこと？」

「廃品で拵<sup>こしら</sup>えた楽器叩いてたら思いついたんだって。で、テーマは波、だとか」

「そういや、ウエーブがどうのって言ってたね。ま、一度拙宅に来てもらうか、それとも千住邸の別宅か．．． 口ずさんでもらってその場で曲にできる環境があれば、ってことかな」

higata@メンバー間で交流が進むのは嬉しい。だが、舞恵が彼氏宅に来ちゃうというのはちょっと違う気がする。彼女とはちょっとイイ仲ではあるので、別に悪い気はしないのだが、千歳が平気でそういうことを口走るようになったのが意外。妹が千歳宅に、というのは想定内だったが、それでもヤキモキさせられたくらいである。余計な話をしてしまったものだと櫻は思う。

「私もね、新曲作ったの。ま、新曲って言っても、八月から九月にかけてだけど。でもね、待ちぼうけしてた二日と三日に練習して、格好はつきました。だから、それと合わせてウチで。ネ？」

「待ちぼうけ．．． そっかあ。じゃ、お詫び方々、お伺いするってことで。機材は又キ、かな」

新曲のどうこうは二の次である。回避策を打ち出せて、少しホッとする櫻であった。

KanNa に載っている各団体の基礎情報は、定期的に更新してもらう必要がある。そのための案内は、先週の出勤日に千歳に発信してもらった。年始のご挨拶 (& 新年会のお誘い) 付きだったのが良かったようで、返礼を兼ねた返信が早々と届いていて、今朝もそれらのチェックに余念がない櫻である。千歳の方は協議スペースの一角で見本用のゴミを拵げて再点検。十時前だと言うのに、二人してお仕事モード。暖房をONにするのも失念している。

「おお寒う．．． 中は暖かいと思ってたのに」

「あ、文花さん、おはようございます」

「あれ、ダーリンは？」

「だから、その呼び方は．．．」

「あ、あっちか。おすみさん、おはよっ！ じゃないや、あけまして．．．」

千歳がノコノコ現われる。「おめでとうございます、ですね」

「今年もよろしくね。今日も早速お世話になります」

櫻は何となく赤ら顔になったまま。八日に出てきて以来、今週はずっとテンションが高い文花は、千歳との年初挨拶もそこそこに、

「櫻さんたら、やっぱアツアツなのねえ。暖房入れなくて済むってのは立派な省エネ。でも私はダメ」

「文花さんたらあ．．．」

櫻が切り返せない程、とにかく冗舌な訳である。

満載の野菜バスケットだけでも絶賛モノだが、鏡餅がおまけに付いてくる辺りがさすが。

「ま、これは新年会が始まってからの楽しみ。アルコール類とかはまたあとで  
世話を焼くのがお好きな事務局長としては、その手の催しを優先したいところではある  
が、ゴミ減らし協議の下打合せをしないことには始まらない。

「前回と違ってお気楽な感じでいいと思うけど、どう？」

「櫻さんから送ってもらった集計見てたら、いろいろと思うところが出てきちゃいまし  
て。自分でどこまで論点を絞るか、って感じです」

「そっか、文花さん、今日の資料まだお見せしてませんでしたね。今持って来ます」

干潟でのこれまでの集計結果、国内の海洋ゴミ調査概況との比較、論点整理案、ゴミ減  
らしにつなげるためのフロー案、あとは参加者自らが解決策を書き込めるblankシート  
などがセットされている。

「お二人の合作ってとこかしらね。本番が楽しみですワ。ま、あと付け足すなら、河川  
事務所と商業施設に物申すシートとか、かな」

「その場で書いてもらって、ってことですね」

「ちょっとシャクだけど、Edyさん流儀ってゆーか。その方が言いやすいし、集めやす  
いでしょ？」

「じゃ、あとは段取り通り。司会しながらそのまま、まず私が発表しますね」

土曜のランチタイムは三人で、というのが定着しつつある。一月クリーンアップの振り  
返りなどを行っているが、話は少々脱線気味。

「弥生ちゃんたら、GoさんGoさんて。いつからそんな呼び方するようになったんだか」

「でもって、ツッコミのパターンが変わってきてるんですよ。何か気があるんじゃない  
って」

文花と業平がそれなりに親しくなっているのは承知しているが、どこまでどう、という  
のは本人じゃないとわからない。それを探ってやろうという心算<sup>つもり</sup>はないのだが、あわよく  
ば、というのは有り得る。

「そ、そうなんだ。ホホホ」

自称、恋多き女であればいくらでも交わしようがある筈だが、二人してお節介情報を提  
供されてはたまらない。笑って誤魔化すのが精一杯である。

開会は十四時なので、まだ客は来ない時分なのだが、熱心な女性が早々にやって来た。

「こないだはどうもです。文花さんはあけおめ、ですね」

「あら、噂をすれば．．． どうも、今年もよろしゅうに」

内心かなり焦ってはいるが、大人の女性の面目を保っている文花である。櫻と千歳は配  
付資料をホチキス留めしながら、何となく様子を見守る。

「ねえ、文花さん、クリスマスイブって、どなたと過ごされたんですか？」

「何よいきなり。いいじゃない、誰とだって」

強力な鋭気を放つ弥生に、文花はたじろぐ。隙アリと見るや、さらなるツッコミを入れ  
る。

「あたしも知ってる人ですよ？」

「さあ、どうかしら？」

「ま、いいや。文花さんがライバルってことなら、こっちも張り合う甲斐がありますワ。どうぞお手柔らかに」

「・・・」

弥生にとっては、協議も新年会もあったものではない。真相を確かめるために乗り込んだというのが正しい。

こういう状況において止めるべきは、ホチキスではなく、二人の女性のやりとり？と一寸悩んでいるご二人である。午前中は心なしか暖かだったが、ここへ来て急遽ヒヤヒヤ。

「あら、千歳さん、その資料、留まってないんじゃ？」

「八八、針切れでした。て、櫻さんだって、それ綴じ方おかしくない？」

「あ、逆だ」

無理もなかるう。

お人好しがアダとなり、期せずして三角形を担うことになっている当の業平氏は、この事態を知ってか知らずかご欠席。「Goさん、今日来ないのかぁ・・・」 弥生はピビならぬ、ピリピリモードながら、時に浮かない顔で受付にいる。

「弥生姉さん？ 大丈夫？」

「あ、小梅嬢。いらっしやい」

「お手伝いしましょうか？」

とまあこんな具合である。

案内メールの他に、KanNa のイベント情報掲示が効いたか、寒々した小雨日にはしては程々の集客である。清や八広のほか、理事や運営委員の何人かも駆けつけ、開会時刻までに三十名近くが会場を埋める。いつでも開会OKである。

「皆さん、こんにちは。あいにくのお天気ですが、大勢の方にお集まりいただき、ありがたく存じます。本日の催しはご案内の通りですが、今回のような形で定期的にイベントを設ける予定です。本年も引き続き、当センターをご愛顧ご活用いただきますよう、年始のご挨拶を兼ね、まずはお願い申し上げます」

櫻にしてはえらく肅々とした挨拶で始まったので、何となく静まり返っているが、拍手もチラホラ。出だしは抑えめ、徐々に加速、ということらしい。プロジェクト操作は千歳に任せ、早速これまでの経緯と集計結果の話に移る。

「十月の一斉クリーンアップの時は、クイズ形式で発表したりしましたが、今回はそのままズバリご紹介します。五月から先だっの一月の回まで九回分、あくまで定点調査としての集計です。次点、生活雑貨で九十一、一例はここに映っている通りです。ワースト十位：配管被覆九十八、九位：紙パックが百ちょうど・・・」 配付資料の方には、集計表の抜粋を入れ込んであるが、プロジェクトで映し出す分は、品目ごとに一枚一枚という設定。カウントダウン式にスライドショーが展開され、収集数と写真が大きく投影されていく。八位：飲料缶／百二十七、七位：袋類／百四十三、六位：タバコの吸殻／百四十六、ここまで順当な感じか。

「さて、ここからは数が増えてまいります。二百台はなく一気に三百台に突入です。五位は、発泡スチロール破片、といってもある程度の大きさのものを数えました。三百二十

九です。粉々になってしまったものも勿論あります。メンバーの中には粉雪だあとが言って、はしゃぐのもいますが、とんでもございません。そのままにはしておけないので、できるだけ回収するにはしています。さすがに数えてはいませんが、櫻のペースになってきて、会場の反応も上向いてきた。四位：フタ・キャップノ三百六十八、三位：飲料用プラボトル（ペットボトル）ノ四百三十八、と数が増すのに応じて、今度はどよめきが起こる。待ってましたとばかりに、発表者は畳み掛ける。

「ワーストの二位と一位は、正直申し上げて区別がしにくいところなんです、形状がハッキリしているものは包装・容器とし、それ以外は破片として数えました。お菓子の個別包装、小さい袋については途中から分けましたが、それも足すと全部で千二百くらいになります。ちなみに二位は破片の方で五百三十四、堂々の一位は包装・容器で五百六十九。小型袋は七十八です。あと、カップめんの容器、食品トレイも別カウントでした。とにかくこの手のプラスチック、発泡スチレン関係なんです、特に多いのは、漂流・漂着しやすい、だから拾いやすい、という点ではまだいいと言えますが、それにしても、でしょ？」

千歳は一応、隠れたワースト1、「レジンペレット」のスライドも複数枚用意しておいた。次にクリックすると出てくる手前で待機しているが、はてどうしたものか。ワースト一～十一のおさらいを映し出されたところで今は止まっている。

「あ、ちょうどよかった。たった今、研究者が到着しました。小松さん！」

「え？ あ、すみません。遅くなりまして・・・」

「み」で始まるお名前のお三方がゾロゾロと頭を下げつつやって来る。南実に緑、そして湊である。

「はあ、これがこれまでの・・・ そうそう、海洋ゴミの直近の概況ってどうしました？」

「あ、これからです。ああ、あれって情報源は、そっかあ」

「もしよければ、代わりましょうか」

「皆さん、失礼しました。では、ここからは小松南実先生に交代します」

これといった打合せをした訳ではないのだが、何故か阿吽<sup>あうん</sup>の呼吸になっている。千歳はすでにクリックした後、南実に画面を見るよう促す。

「八八、隠れ一位かあ。皆さん、改めまして、粒々担当の小松でございます。これが私の主な研究品目でして・・・」

数分間のレジンペレット講義が始まる。得意満面、実に生き生きと話す南実。櫻はにこやかに聞いているが、それ以上に千歳がニコニコ、いや惚れ惚れした感じで聞き入っているのを見つけると忽ち曇り顔に。「千歳さんたら、プツプツ・・・」

「という訳で、ご当地で集めて数えた結果は、六百超でした。数回抜けてはいるんですが、やはり多かった。確かに隠れワーストですね」

一人でコツコツと調べていたことがわかり、今ここにいる higata@各位はただただ敬服するばかり。櫻もハツとなり、思わず拍手を送る。そしてそれは会場全体に伝わり、大きな喝采となって響く。

「いやあ、参ったなあ。あ、ありがとうございます」

こうなると、調子が上がらない訳にはいかない。お次のスライドはこれまた得意の海ゴミネタである。咳払い一つ、そして、

「国内各地の海岸での調査結果、最新の概況がこちらになります。川ゴミは除いてありますが、河口部分は含まれます。海辺に漂着するのは、やはり発泡スチロールであり、プラスチックであり、荒川の一会場での結果と重なるものがあります。違いとして大きいのは、タバコの吸殻が多いこと、そして、特に瀬戸内海に面した海岸での話ですが、カキの養殖に使うパイプが多く見つかること、でしょうね。広島では万単位で出てくることもあるそうで、全体でも上位になってます」

百五十ほどの海岸での集計というだけあって、とにかく桁が違う。ワースト上位三品目についてはいずれも五～六万に上り、十位前後まではとにかく五桁。いつもの干潟でコツコツ調べた結果の合計が四千前後というのを考えると、やはりスケールが大きい。だが、彼らの取り組みも決して小さい訳ではない。川ゴミを含めた総計では、九月と十月の分がこれに加算されることになり、統計の一角を占めることになる。千歳は改めて思う。川ゴミも海ゴミもつながっていて、どこも深刻である、ということ。

その黒い長筒の画像が映し出されると、小梅は思わず声が出かかる。「て、もしかして、あの棒？」 八月に二見近くの海で確かに同じようなものを見つけ、手にしていたのは紛れもなく当のパイプだったのである。ようやく謎が解けて、ゆっくり頷いてはみるものの、まだまだ解せないことがある。「どうやって使うの？ どうして流れて来るの？ ムム」自発的環境教育に終わりはないようだ。

その隣で、手元の集計表に目を落として唸っているのは八広氏。「須磨で見かけたのは、吸殻がダントツであとは破片だったかな。ルフロンが来たら、もいっぺん照合してみよ」こちらもなかなか熱心である。

「という訳で、流れ着いたからには、ゴミを救出する、そして調べる、これが人々の役目です。ご当地の干潟も同じ。漂着、回収、集計、これを繰り返すことがゴミ減らしの第一歩だと思います」

まとめのような話が出たところで、櫻が引き取る。

「質問はまた後ほどということで。小松先生に皆さんもう一度、拍手を」

これでは千歳もやりにくかる。だが、そこはマネージャー。流れを活かすのはお手の物。

「では、ここからはディスカッションに移りたいと思います。が、その前に・・・」

過去の漂着状況を写した画は、配付資料にも何枚か入れておいたが、メインはプロジェクトでの大写真。ざっと顔ぶれを見る限り、客の半分程度は現地を知っている。それでも、こういうのが出てくれば改めて衝撃も走るようで、何となくザワザワしている。モノログでおなじみのスクープ系の数々。だが、所詮は2D。客席の様子を窺いながら、千歳は用意していた3D品を並べ始める。こういう時は何につけ実物に限る。その方が論議もしやすいだろう。

「これは全て、先だって現場で拾い集めた現物です。今日のために見本として持って参りました。欲しい方がいらっしゃったら、手を挙げてくださいね。へへ」

今日はどんな仕切りを見せてくれるのか、櫻は司会席からその辺を楽しみながら見ていたが、俄かアシスタントに指名され、どこかの通販番組のような状況に立たされる。

「ハハア、まだ使えそうなもの確かにありますが、どうなんでしょ？ あ、これなんか

いいかも知れませんね。センタクバサミ。あとは．．．」

ここは一つ櫻に任せるとするか。だが、しかし、

「ライターですね。ライターと言えば書くのが仕事ですから、ボールペン。ボールつながりゴルフボール。あ、傘の柄です。ゴルフのスイングか何かしてこれだけ残っちゃった、て訳ではないと思いますが．．．」

番組でもアシスタントが暴走するのが一つの見所だったりするが、ここではどうなんだろう。とりあえず違う意味で会場はざわついている。文花が云っていたお気楽な感じで、という点で忠実ではあるが、はて？

「で、櫻さん、今ご紹介いただいたのは何かの拍子でうっかり、って感じのものだったと思うんですが、こっちはどうでしょうね？」

長机に置かれた見本品はどうやら一定のグルーピングが為されているようだった。千歳が示したのは、ファストフード系紙コップとストロー、クイックメニュー系弁当容器、お豆腐容器、ペットボトル、食品缶、袋類いろいろ。

「そうですね。一過性って言うか、使い捨て関係ですかね」

「ですね。意図的にポイ捨てしたと思われるものばかり。微力ではありますが、一応、ペットボトル、ビン、缶、食品トレイ、プラスチック容器包装類については、支障がなさそうなを選んでリサイクルに出してはいるんですけどね。さて、その隣ですが．．．」

洗面器の破片、発泡スチロールブロック、そして、

「ははあ、これが細かくなって、こうなるって」

「ちょっとお見せしにくいので、休憩時間にもじっくりご覧ください。粉雪もどきのスチレン粒、そしてレジンペレット以外の微細プラスチックなどなどです。放っておくと、どんどん細かくなってしまふってことで。芝の欠片はもともとですが．．．」

笑い声とか溜息とか、いろいろと交錯する中、一人ミステリー作家さんは、頻りにメモをとっていた。「洗面器で殴ったら、割れて破片が散らばった。だが、自然作用で碎ける可能性もあるから、凶器とは断定できない。トリックとして使える？」洗面器何とか事件てのはあまり聞いたことがないような．．．

水道水で洗って乾燥させたことになっているが、素手で触れるには抵抗がなくもない。ここまでは平然とこなしていた櫻だったが、さすがにこれには手が止まる。

「ハハハ、一足でもサンダル、でございますか」

「あ、ここはうっかり系でもありますが、何となくミステリー関係です。これ失くしちやった人、どうやって帰ったのかが気になります」

「で、ミステリー？ 何だかなあ」

緑は引き続きメモをとる。ミステリー云々とやられちゃ放っておけない。「まさか何かのトラブルに巻き込まれて、サンダルだけ漂着？」そのまま悲鳴が上がりそうな場面だったが、隣の清と目が合って、思わずゴクリ。

「大丈夫かあ？ 青白い顔して。緑色ならまだわかるが」

「いや、大丈夫じゃないわね。カモンさん、ホラあれ」

今度は清が蒼白気味。目線の先には銃口が。

「おもちゃの銃ですね。これは何ゴミなんでしょ？」

「ま、見かけ上は危険ゴミですね。これが本物だったらとんでもないですが、違法性や

事件性を感じさせる物品は実際にあります。不法投棄されたと思われるテレビやバッテリー、何故か財布、個人情報が入ったバインダー、あと、キャッシュカードも、ね？」

櫻はよっぽど小突いてやろうかと思ったが、場が場なので控えている。だが、「おっと、この管は何でしょう？ 相方をひっぱたく用でしょうか」とか言いながら、早速、隣人をバシ！ 「あ、普段は配管被覆って言ってます。まとまって見つかることが多いので、投棄品だろうと。（いてて）」

「カキのパイプは見つかりませんが、代わりに川ではこういうのが出てくる、ということですね。（べー）」

パイプでやられてたら、「いてて」じゃ済まなかつただろう。

小芝居に引っ張られて、本題を失念するところだった。腕をさすりながら、千歳は再度プレゼンター席へ。開会からすでに三十分近く経っているが、時間配分としてはこんなところだろう。ここからは二時間。休憩時間がどこかに入るにしても協議するには申し分ない大枠である。

「一会場での例ではありますが、縮図という見方もできます。で、ご覧いただいたようにいくつかパターンがある訳です。傾向と対策というのも何ですが、ちょっと整理してみたのがこれです」

資料の方には「論点整理」との標題と、ブランクの三つの枠が書かれた一枚がある。手抜きともとれるが、これはちょっとした演出。ここまでの報告と演習から見えてきた論点をその場で書き込んでもらおうということらしい。とは言っても、プロジェクタの方にはすでに「大量」「厄介」「不法」のカテゴリーが例示されている。

「他にもいろいろ見方は出てくると思うんですが、これまでの九回分のまとめを見て、こういうことかな、と。このうち、議論の中心としてはやはり量が多いものになるうかと思うんですが、いかがでしょう？」

higata@メンバーから異論が出なければ、このまま行けるだろう。こうした分析や考察もメンバーリスト上で多少は交わしているの、思うところは同じなのである。ひとしきり見渡してからひと息入れる。思いの丈を一つ披瀝<sup>ひれき</sup>させてもらおう、今、正にその時。

「理想は漂着ゼロですが、そうは言っても...というのが実状です。ならば、せめて海に流れ行かないように、正しく『水際』で拾って、止めようって話です。この水際作戦だけを考えれば、漂着はむしろ大歓迎。でも同時に、元から減らすことも考えたい。そのために今すぐにできること、時間をかければできるであろうこと、いろいろあると思います」

挙手一番手は、南実だった。

「そのお何て言うか、水を注<sup>き</sup>すようですが、再資源化系とそうでない系って分け方はどうなんでしょ？」

「拾って見たら分けられた、って感じじゃないでしょうかね。つまり、結果論かなあって。ごもっともではあるんですが」

「再資源化を促す仕掛けをしっかりとさせれば減らせる、ってのはあると思いますよ」

こういうやりとりが生じることはある程度想定していたが、ちょっと早かったか。千歳は正月休み返上で練っていた図式をここで投影することにした。

「ポイントはどこで減らすか、だと思います。お手許の資料、またはスライドをご覧ください」

それはモノの流れを一般化したフローチャートである。

(マーケティング 商品企画) 原材料の栽培・採取 調達(輸出入・運搬) 加工・製造 検査・梱包・出荷 物流 販売 購入・使用・消費 と続く。

「これらの過程で発生する廃棄物も多々ありますが、世間でゴミと呼ばれるものは、この消費の次に来るものです。で、ここからが運命の岐れ路。できるだけ元々の形で使い回すリユース、それがNGならリサイクル、リサイクル材料は、再び原材料のところに帰ると仮定します。そして、自治体の手による廃棄・焼却・埋立処分。焼却の中にはプラスチックを燃やした熱を発電などに回すことでリサイクルと称するケースも増えてますが、そのリサイクルとは別枠と考えます。このをできるだけ減らす、またはに回す、というのが望ましいんですけど、それどころじゃないのがある訳です。それが、散乱、漂流、漂着、埋没のゴミ達でしょう。の全体量からすれば多くないかも知れませんが、放置しておいていい筈はありません。小松さんのご意見はこのをにするか、にするか、ってこと．．．」 当人に視線を送ると、ちょっと首を傾げているが、とりあえず、続ける。

「と思い、このフローを出したのですが．．． 兎も角、これを引用するなら、どうもそればかりじゃなさそうだ、じゃどこからどうゴミを抑えるべきか、ってのがまた見えてくるんじゃないかと」

櫻はちょっと身を引く感じで聴講していたが、「そうか、生産プロセスセクションどうこうってのは、これだったのかあ。プロセスマネジメント．．．」と五月に聞いた話なんかを思い起こしてみるのであった。前職では憂き目を見たが、その手法を市民活動にあえて応用することで、何かが報われる気がしていたマネージャーである。その甲斐あったか、効果は早くも表れる。南実が首を垂直に戻すと、まるで開眼したかの如く瞳を光らせる。十月に続いてのお目覚め(?)である。

「何だか私ったら、現場主義が高じて、現象に捉われちゃってたかも。発生源対策ってことでは、上流フローも含めて考えないと。まだまだだわ」

フロー、つまり、流れ。レジンペレットについては、正しく川の上流や支流からも流れ込んでくる可能性はある訳だが、その現実的なフローはまだしも、生産プロセスにおけるフローの押さえ方が甘かったと、研究員は自省する。粒々の組成や量を調べるに至ったのは、もともとは「どうしてこんなものが? いったいどこから?」だった。だが、究明に腐心する余り、研究の本分がおろそかになっていたのである。流出したとしても環境負荷を減じる方法があるのではないか、そもそもプラスチックの需要を減らすところから考究しないといけないのではないか、そう、研究とは発生抑制なり予防なりに向けられてこそ、より意義も高まるのである。

南実が千歳を見る目が、これでまた変わることになる。そんな目線に気付いたか否か、「つまり、予防の方の比重を高めていくと、全体的な負担は減っていくだろう、という想定です」 今思っていたことがそのままプレゼンターの口から出てきた。首を大きく縦に振ってみる南実。だが、「てことは、論文の方も修正しないと．．． 八八」 首を前に振った状態でうなだれてしまった。このガックリの理由を知る者は、この場にはおそらく、

いない。

受付係をさっさと切り上げてどうしていたかと言うと、進んで記録係を引き受けていた弥生である。後方にテーブル席を設け、カタカタと早打ちを続けていたが、その速度とは裏腹に、自分の言葉にならない、議論が消化できない、そんなもどかしさを覚えていた。

「これも学問のうち、か。しかし千さんのアプローチって、システムチックなのかそうでないのか．．．」 ゴミの捉え方と議論すべき対象範囲は見えているのだが、何らかの解が示されないことには、動かされるものがない。彼女の専攻からすると、社会科学的ソリューションということになるだろう。解決策ありき、協議はそれから、というのが弥生流アプローチのようである。

南実に続いて、新理事や新運営委員あたりからも意見が出て、今のところは特に製造と販売に焦点が当たる格好になっている。大量に出るということは、それだけ売れている証し。その理由は扱いやすい、便利、楽、いろいろ考えられるが、九月の回のランチタイムで話し合った点にズバリ符合する。そう「安易なモノは、安易に捨てられる」である。作り手、売り手の姿勢に安易さはないか、そうしたチェックであれば市民の日常生活の延長でできなくもない。消費者側の自戒を含め、声を上げる、届ける．．． こうした行動原点を確認するところまで話は進んだ。但し、メーカーや事業者への働きかけ、というのは市民運動として脈々と続いていること。より具体的・直接的な提言がこちらでほしい。

「干潟などでの漂着物の実態、ゴミが発生するフロー、抑制策の力点、その辺りは共有できたかと思えます。メーカー側の事情をしっかりとヒアリングする必要はありますが、ここまでがいわゆる現状認識(As-Is)ということで一旦区切りたいと思えます。で、皆さんにはここで、じゃあこうしたらいいんじゃないか、という観点で『物申すシート』に一筆いただければ、と。河川事務所向け、商業施設向け、と分かれているのはそれぞれに意見を伝える場が用意されているためです。詳しくは後ほどお話ししますが、今は思ったこと、というより、前向きな提案を一つお願いします」

十五時十五分、休憩時間に入る。ここまで、中学生の小梅にはちょっと難しかったかも知れないが、隣でトーチャンが役人なりにわかる部分を解説してくれたりしたので、何とか持ち応えた。だが、本当のところはちょっと違う。普段はからかって愉しませてもらっている千兄が、こういう場になると全くの別人になることがわかり、面映いやら後ろめたいやら、ちょっとドキドキもしたりして、気付いたら前半終了、だったのだ。

南実は千歳に言い寄ろうとしていたが、質問者に遮られて断念。さらには駆けつけたばかりの蒼葉に先を越されてしまった。

「千兄さん、これどうぞ。ノド渇くでしょ？」

使い回しペットボトルにミネラルウォーターを入れて来たんだとか。これぞ、リサイクル以前に優先されるべきリユース(再使用)である。だが、そんなことに感心している場合ではない。

「て、蒼葉さん、今、僕のこと．．．」

「いずれはそう呼ばせてもらうことになるでしょうから、今から盛り上げておこうと思って。ダメ？」

協議後半に向け、気合いを入れ直していた千歳だったが、これですっかり気抜け状態。いただいたのは発泡水ではなかったが、仮に発泡していても、やはり気抜け水のような感覚になってしまっただろう。そこへパチパチと発泡、いや前で手を叩かれて、ハッ！となる。

「千さん、あたしも前に来ていい？ 進み方によっちゃツッコミ入れたいし、そのお・・・」

「発言を記録してもらいながら、でよければ。そのまま、プロジェクトで映し出す用だけど」

「はぁ、ま、やってみます」

十五時半、再開間際。ここで遅れ馳せながら、冬木がご到着。だが、目が合っても会釈してるようなそうでないようなコソコソした感じで、席を見つけるや否や素早く腰掛ける。横には見慣れない人物がいたが、話し込んでいるところを見ると、はて？ チームの一員か、それとも・・・メンバーと接触、というのがピッタリ来る図である。櫻はそれを見逃さなかった。出端からツッコミを入れてみる。

「では、物申すシート、集めさせていただきます。まだの方はまた後ほど。で、商業施設向けの件について、先にご説明します。干潟から比較的近い場所に複合型のショッピングセンターがありまして、そちらにゴミ対策などの話を伺いに行く予定がございます。来週金曜日の午後です。傍聴もできるよう調整してもらっていたんですが、榎戸さん、どうでしょ？」

相変わらず、話をあまり聞いてなかったようだが、「あっ、はい。よろしく願います。集合場所は・・・」隣人と確認をとるようにして、詳細を告げる。

「てな訳で、いただいたご提案をここで共有して、当日問いかけてみよう、という趣旨でした。付け加えたいことが出てきたら、随時お受けします。ね、隅田さん？」

「あ、ありがとうございます。で、早速、桑川さんにシートの内容を速記してもらっているところです。先に商業施設の方って出ますかね？」

容器包装類もスーパー店頭で回収する、さらには油化も、とか、プラスチックは生分解性への転換を速やかに、とか、いっそのこと、生き物が食べたくなる素材で作ってはどうか、なんてのまで出ている。容器包装メーカー社員も巻き込んで、皆で調査型クリーンアップに参加してもらっては、というのはありきたりのようだが、最も即効性がありそうな一案。ただのクリーンアップ行事ではなく、調査も、というところがカギである。漂着・散乱の実状をデータを介してより深く知ってもらうことで、より負荷の少ない商品が開発されることになるなら、この上ないだろう。ちなみに文花がエコプロでゲットしたバイオマス某の資料は休憩時間中に回覧済み。少なからずヒントにはなったようだが、決定打とはならなかった。

「おかげ様で何となく策が見えてきた気がします。提案された方で、補足とかはございませんか？」

こんな感じで、プレゼンターと会場とでいくつかのやりとりが繰り返され、To-Beの方も輪郭がハッキリしてきた。櫻はヒントを提供した覚えはあっても、こういう形で昇華されるとは思ってもみなかった。呆気にとられるやら、誇らしいやら。論点整理は前半のうちに済んでいたものの、今となっては自身の心境の整理が必要なように感じていた。

「千歳さんにカウンセリングしてもらったりして。フフ」

As-Is と To-Be は対比することで、より明確になる。弥生には手を休めてもらって、ここからは得意の打ち込み&投影で、千歳が仕切る。

「進め方が前後してしまいましたが、ここで『こうなっている』と『こうしたい』を並べてみようと思います」

箇条書きで記されていくのは、

- ・漂着は続く      漂着を少しでも抑える      素材レベルでの対策など
- ・今は拾うしかない      量が減ればその負担は減る      その分、新たな策に手が回せる
- ・実態が知られていない      知ってもらおう努力をしつつ、関係企業などの参加を促す本業に活かしてもらおう（商品企画段階からの抑制策など）

など。解を見つけたらしい弥生がここぞとばかりに手を挙げる。

「その、知ってもらってことでは、調べた結果をより速く広く伝えるのも大事ですよ。隅田さんのブログには一部出てますが、センターや流域情報誌のサイトとかでも速報を載せられればいいんじゃないでしょうか？ システムを改造すれば、リアルタイムでも行けそう．．．」

「システム開発者がこう云うんですから、これはぜひやってもらいましょう。とっかかりは荒川下流でしょうけど、もしかするとあちこちで、ってなるかも知れないし」

「八、八八．．．」

ツールではあるが、立派なソリューションである。ただ、応用範囲について本人はあまり考えていなかった。あくまでコミュニティビジネスレベルだったのである。弥生はプログラムを卒論ネタに、卒業後は見習い起業、という方向性を固めつつあったが、これで発展的見直しを迫られることになる。

## ジレンマとその先（前編）

「今すぐにも、ということでは、春先に増えるであろうバーベキュー関係のゴミに対して、どう先手を打つか、というのがあります。これをうまく抑え込めれば、今後の取り組みも違ってくるだろう、と個人的には考えてまして．．．」

道ゴミや街ゴミなど、いわゆる陸ゴミが川に流入して、という話もなくはないが、発生源がハッキリしているのがあるなら、それが優先。策も講じやすい。話を拡げておいて、また収束させる、そんな進め方には異議も出そうではあったが、これが千歳の考える、飛び過ぎない To-Be 論なのである。

ケータリングも頼んではあるが、ゴミ減らしがどうのとやった後でゴミになるようなものはあまり振る舞えない手前、できるだけ自前で大皿料理などを出すべく、文花は仕度を始める。休憩時間以降は、出たり入ったりで落ち着かなかったが、そろそろ事務局長のお役回りが来たようだ。

「では、この辺で河川事務所向けに移るとしましょうか。先月の会合に続き、石島課長にお出でいただけてますが、いきなり話を向けるのも何なので、まずは届いたばかりの回答書の中味を伺ってから、ということ。えっと、代読がいいですかね？」

「あ、ハイハイ。じゃここは私、矢ノ倉からお話しします。石島課長、これ確かに拝受しました。ありがとうございました。干潟における自然再生工事の件、回答書を要約して読み上げますね」

文花はエプロンをしたままなので、パッと見は「おや？」となるのだが、話は至って真面目。注目されていることがよくわかるので、舌も滑らかである。

概括すると、再生工事は凍結、引き波や漂着の状況については調査を継続、崖地の崩落箇所は何らかの保全を試行、そして、

「若干の予算が確保できたので、ゴミ発生予防策など、より有効な使途に、とのご回答を頂戴しました」

「おう石島さんよ、なかなかやるじゃねえか」

「八八、こいつはどうも。これも皆さんのおかげです」

どうやらセンター理事連名での見解書が物を云ったようである。行政側は、然るべき書面が来れば職員も話を通しやすくなるし、案外動きが良くなるものなのだ。どう使うかを検討するのはこれからだが、まずはめでたい。どことなく拍手が起こり、次女も嬉しそうにしている。会議スペースの陰では、いつの間にやら細君が佇んでいて、丁度聞き耳を立てていたところだった。「ホホ、良かったわね。課長殿」

さて、こういう展開になると俄然、物申すシートも生きてくるというもの。弥生は一応、要望のいくつかを打ち、映しているが、いま一つピピと来ていない様子。

「そうですね、メーカーに物申せるのがまた別の省庁ってことだと、ちょっと噛み合わないですね。となると、やはり現場レベルでの対策が中心、かあ．．．」

膠着しかけたところで、途中提出されたシートの中に、面白いのが混ざっていた。

「えっと、巨岩に縄を締め、棄てられそうな場所に安置、へへ」

「ああ、以前、掃部先生からも聞いたことがありましたね。場を浄める上でも有効、されど．．．」 浄めと来れば、清さん。

「ま、やらねえよりはいいかもよ。秋の大水で上流からゴロゴロ転がってきて、持て余してんのかあんだろ？」

「ええ探せば何処かに。じゃ、それを試しにバーベキューエリアに設置してみましようか」

小梅はここで課長に入れ知恵をする。「ねえ、二見の夫婦岩、真似てみたら？」「二つあれば、な」

父と娘の静かな会話が交わされる時、プレゼンター席では騒々しいことになっていた。一案出たところで、さらに、と行きたかったが、

「そうそう、最初に分けた他のはどうすんの？ 『厄介』と『不法』？」

「何か要望が出てれば、だけど。そういうのある？」

「人任せ？ 千さんだったら、ちゃんと考えてあんでしょ！」

見かねた櫻が引き取る。

「皆さん、すみません。ちょっと中断します。そうですね、三分後、十六時五分に再開ってことで」

思わぬ展開に千歳はキョトンとしているが、とりあえずは救われた恰好。櫻は弥生以上

にピリピリしている。

「弥生ちゃん、そんなに突っ込まなくても．．．」

「だって、何かスッキリしなくて。この際、でしょ？ 不法はやってもいいと思う」

「事件性があるのは別としても、それが河川事務所の仕事だもんね。やって当たり前とか言わずに、ちゃんと訊いた方がいいか」

スクリーンには、箇条書きの続きで、

・不法投棄も存在する

と、As-Isの一文が追加される。これに照応しそうな要望として、水上からの監視を、というのが挙がってはいた。だが、これは芽を摘む上ではよしとしても、根本的な解決のため、とは言い難い。そこはあえて伏せておいて、協議に付すのも良さそうだが。

ともあれ、この「不法」にまつわるTo-Beは、広範な論議を呼ぶ可能性がある。はじめにカテゴリー分けして「大量」に絞ったのは、一定の帰結でとどめ、確実なソリューションを得たいとする千歳なりのプロセスマネジメント、そのものだったのである。弥生には、この協議手法自体が解の一つという理解が及ばなかったことが、もどかしさにつながっていたようだ。

この間、京は小梅を呼び出して、文花の仕度を手伝うよう促す。これで人手不足は解消。男手の一つも欲しいところではあったが、それはあとのお楽しみ。今のところは女性三人、仲睦まじく、でいいのである。

余裕の進行だった筈だが、やや押せ押せ感が出てきた。こうなったら、このまままとめにつなげよう。千歳は覚悟を決め、まず課長殿に振る。

「で、不法投棄についても、岩を鎮座させることで予防できそうな気もするのですが、石島さん、どうですか？」

「取り締まりや監視は常々やってはいますが、さらなる予防策ということでしたら、それでもいいかと。監視カメラ取り付けのよりも安上がりですしね」

「監視強化については、要望の中にもありました。ただ、ここはやはり棄てさせない環境づくりが先決なのかな、と思います。看板を設置しても流れてしまっただけでは仕方ないので、置物を、というのは良さそうです。でも、もうちょっと妙案があるような気がします。ここはご当地でクリーンアップ経験のある皆さんに聞いてみるとしましょうか。じゃ、五十音順で蒼葉さんから」

「え？ 私？ そうですねえ、できるだけマメに片付けるってことでしょうか。干潟や川の本래の姿に近づけるっていうか、ピカピカになってれば、そうそう捨てられないでしょうから」

こんな調子で、higata@各位からの声を集める管理人である。生でメーリングリストを交換し合っている、そんな案配。櫻が続く。

「地域の実態をしっかり把握して伝えること、かなあ。ここにこんなゴミが、とか、ここが投棄されやすい、とか。住民はしっかりチェックしてるぞ、ってのを発信する。マップにして掲示すれば少しは予防になるでしょう、ね」

文花は後回しで、冬木の番。「やっぱり情報誌等で呼びかけるなり、喚起するなりってところでしょうか。あとはソーシャルビジネス、あ、いや失敬。わかりにくいですよ」そ

して、南実。「ゴミだって思うから棄てたくなるんでしょうね。家電製品は有価物の塊。電子機器は貴金属の集合体。プラスチックだって石油が枯渇したら貴重品ですよ。逆転の発想というか、社会的風潮を皆で作るってのはどうでしょうね？」

こういう流れだと、八広も話し易い。発言がなかった訳ではないが、何となく低調だった弁論家は、ここで一気に語り始める。

「今の話を継ぐなら、人の心理に訴える手が考えられますね。極端な例で云えば、どうもゴミを拾う人が増えているらしい、という風評作戦とか。拾わないのが少数派ってのがわかると、どっかの国民は多数派に転じようとするから、それを利用する。つまり、拾う人手を増やす。あとは、ゴミの投棄が、自分に跳ね返ってくることを説く。目の前からゴミは消えても、心の中にはゴミが溜まるって話です。本人はスッキリしたつもりでも、その裏で蝕まれる何かがある、なんてのが広まると、効き目あるんじゃないですか？」

会場は水を打ったようになってしまおうが、これは予定調和。弥生の毒舌トークが輪をかければ、さらにひんやりと引き締まっていいだろう。と、思いきや、文花が小梅を連れて戻って来た。

「私もいいですか？」

「あ、ハイ、どうぞ」

「その、地球環境以上に、地域環境を見つめる目というか、市民の皆さんがここはいいところだ、って認識を高めてもらうことが何よりの予防になるような気がして。ね、櫻さん？」

「ええ、ご近所の何とか力<sup>ちから</sup>つてのもありますが、一般的には地域力<sup>ちから</sup>つて言いますかね」

「あとは現場力<sup>ちから</sup>でしょ？」

小梅がさらりと言つてのける。衆目が注ぐのを受け、さらに長めの一言。

「わたくしは、生き物にとって快適な環境は、人にとっても同じく快適、ということにより多くの人々が知ること、ではないかと考えます（へへ）」

トーチャンが目を丸くしたのは言うに及ばず。会場からは割れんばかりの拍手が起こる。higata@の面々はむしろ当然という面持ちだが、やはり頻りに手を叩いている。大人の話し方を聞き入っているうちに、自然と身につけたようだが、それにしても大した弁舌である。

こうなると、弥生は下手なことを話せない。どう出るのかとメンバーは興味津々だったが、「地域の実情をデータ化して、素早く広める、あたし、やってみます！」何と自ら名乗り上げてしまった。解決策は自分で、これぞ究極のソリューションである。すっきりした顔で会場を見回すと、目が合う人全てから熱い拍手が送られる。彼女にもう迷いはない。

さすがは higata@各位、現場経験に裏打ちされているだけのことはある。自ら設定したまとめではあったが、あまりに上々だったため、新たに言葉を探さなければならなくなる。千歳は窮々としながらも、紡ぐように話し始めた。

「ありがとうございました。今のような思いや考えを一人ひとりが持つこと、実践すること、そしてとにかく現場へ、ということになるでしょうか。干潟も川も生き物もきっと笑顔で迎え入れてくれると思います。自然が微笑む場所には、きっとゴミはなくなっている、そう信じたい、です」

抽象的ではあるが、やはり経験が為せる業か、説得力を感じさせる。と、同時に実にエモーショナル。曲のテーマがこういう形で見つかることになるうとは．．． 本人もビックリである。スクリーン末尾には「・不法投棄も存在する 防ぎ方はいろいろある 現場力や地域力、それらを育む思い・考え・行動．．．」と表示される。

「隅田さん、皆さん、どうもありがとうございました。もう一度、拍手を」

余韻とゆとりを残しつつ、閉会予定時刻が近づく。締めは、清と緑。司会者は両作家先生に講評を求めるも、

「いやいや、そういうのはまた新著で、な。とにかくこういう人達がいる限りは安泰さ」

「そんな、初心者に訊いてどうすんのよ。こっちが教えを請わなきゃ。オホホ」

てな具合。櫻は渋い表情を浮かべつつも、司会としてのまとめに入る。

「長丁場になりましたが、いかがだったでしょう？ とにかく今回の協議内容については、しっかり次につなげていきたいと思います。要望は再度整理して意見交換の場に、ホームページなどでも紹介したいですね。で、現場ということでは、来月二月三日。耐寒クリーンアップを予定しております。センターの講座としては、定例ですと二月九日になりますね」

部会の設定が模索中なので、それと連動する講座の内容も未決定。ただ、こうした客がいる今を逃す手はない。部会よりも実際のニーズありき。ご希望に沿ったプログラムを決めるには正に好機なのである。

「で、次回なんですけど、春のクリーンアップの企画検討を兼ねた実践講座なんてのはどうかな、と。チームの皆さんのご都合にもよりますが」

春のクリーンアップ、つまり四月の回をオープンイベントにするかどうかは合意がとれていた訳ではなかったが、話が出ていないこともなかった。

「いいんじゃないすか。自分は出ますよ。で、春のってのは、やっぱ四月の第一日曜スよね。ちゃんと予定入れときます」

「宝木さん、ありがとう。エドさんチームはどうですか？」

「ええ、その四月についてはちょっとしたイベントも併せて、って考えてますから。今日の話で言えば、地域力アップと発生予防にちなんだもの、ですかね。ステージとかも設置して。いけね。ま、詳しいことはまた追いついて」

他のメンバーも前向き、会場の感触も概ね良好なので、二月の予定はひとまず決定。

「二月三日は、講座の前座みたいになりますけど、あえて、ぶつつけ本番スタイルにしようと思います。持ち物や注意点などは改めてお知らせします。で、いいですよ、隅田さん？」

「はいはい。ただ、耐寒もありますけど．．．」

プロジェクトはまだOFFにしていなかった。スクリーンには「体感クリーンアップ」との題字が打ち出される。「ぜひ体張って実感していただければ、と。そんな心積もりでお越しく下さい。チーム一同、お待ち申し上げます」

「ハハ(やられたぁ)、ということで、よろしくお願ひします。で、最後に事務局長、ってまたいなくなっちゃったんで、ここは一つ、石島課長、一言よろしいでしょうか？」

「あ、いや、皆さんどうぞお手柔らかに。何かございましたら、また。いや、今日この

場でも構いません。次女もついてますんで」

「エヘヘ」

親子で頭を下げている。こんな閉会の挨拶があってもいい。満場の拍手で以って、ゴミ減らし協議、終了。次はお待ちかねの新年会である。

### ジレンマとその先（後編）

挨拶し損なった文花が晴れ晴れと登場。ここからは事務局長が進行役となる。

「では、新年会 兼 鏡開きは十七時より始めたいと思います。その間、桑川さん開発のデータ入力システム『DUO』PC版のデモなどでお楽しみください。あと、掃部センセが余興をご用意くださっているとのことなので、そちらもお楽しみに。会はカンパ式です。アルコール飲まれる方は、最低千円、お願いできれば。えっと、干潟の拾い物で恐縮なんですけど、この発泡スチロール箱の方にお願ひしますね。収益が出たら、クリーンアップ基金に回します」

基金の話は、明らかに思いつきなのだが、冬木から申し出があった協賛金の口座も設けたところなので、一本化は可能。ツッコミを入れてもよかったのだが、櫻はとりあえず黙っていた。「ここからは文花さんタイムってことで。おとなしくしてよっと」ところが、

「ハイ、櫻さん。集金係、頼みます」

「って、勝手に決めちゃうしい」

「白物、お好きでしょ」

やはりしっかり物申さないといけないようである。

ちなみにこの白物、晩夏の夜に千歳が持って来たシロモノである。これぞリユースの好例(?)。

天気が怪しいこともあり、本日の参加者の何人かは退出。代わりに集金係、いや融資係の女性がやって来た。

「あ、ルフロンさん！」

蒼葉と南実は彼女を同時に呼ぶ。

「へへ、お待たせ。案の定、小雨模様になっちゃった。ゴメンネ」

「いいのいいの、乾燥してたから。それにしても、今日はまた程よいウエーブ感だことで」

「弥生ちゃんにまたボサボサとか云われたくないからさ」

「ボサボサ、好きだけど」

「ハクンたらあ」

元祖ツッコミ担当の弥生嬢は、円卓にてDUOのデモ中である。千歳はPC版の係員として着席して操作しているが、傍から見事に突っ込まれている。

「だから、千さん、テンプレートの切替はプルダウン□でって言ったじゃん」

「だって、新しいのがいろいろ出てくるから間に合わなくて」

「ヤレヤレ。この際まとめて面倒見るか」

「毎度、スミマ千、でございます(トホホ)」

冬木とその関係者らを含め十人程が囲む中、面目まる潰れの千さんであった。情報誌に掲載される前だったら、面白おかしく書かれてしまうところである。ヤレヤレ。

八広は集計表を見せながら、舞恵とあれこれやっている。女性三人は何となく話を聞いていたが、一人が首を突っ込む。

「それにしてもクリスマスに二人して神戸の海辺とはねえ。須磨だっけ？ どうしてまた」

「櫻姉ならわかるっしょ？ 何てったって、くりすます、ですから」

「ハハハ、体感クリーンアップといい、クリ須磨スといい、私が出る幕ないわね」

蒼葉も南実も目をクリクリさせながら、失笑モード。ルフロンはすまし顔で、

「ワイナリーでこれ買ってきたの。須磨はその帰りに寄っただけ。シャレのためにわざわざ行きませんことよ。オホホ」

「ルフロンて何<sup>なにげ</sup>気にセレブチックねえ」

「悪酔いしなきゃね」

「ハクン、何か言った？」

ボトルで叩かれたら、それこそシャレにならない。

ひとおりの仕度も整ったところで、石島家は三人が揃い、物申すネタを受け付けながらも談笑中。時間前だが、いつ始めてもOK。だが、進行役が固まっていたは始めようがない。

センターの入口にはクーラーボックスが放置してある。持って来た時から置いてあったので、少しは元の姿に戻っているだろうと思ってたら、外の寒気に応じて冷気が保たれていたらしく、

「あちゃー、まだカチコチだったわ」

そう、おふみさんへのビックリネタ、急速冷凍したとやらの雑魚の詰め合わせである。

「ま、これなら平気だろ？」

「う．．．」

図らずも冷凍状態になってしまった文花である。

「て、センセ、もしかしてこれをいただくって？」

「自然解凍したら、さっと捌いて素揚げにするさ。あとで調理台、借りるよ」

「で、その油は？」

「ああ、自家製さ」

「プラスチックを油化？ な訳ないか」

「ハハ、流域で採った菜の花が原料。菜種油よ」

「ウチの菜の花でもできますか？」

解凍が進むのに合わせ、文花もほぐれてきた。目に浮かぶは、春の色。油の話で花が咲く。

センターの開館時間は十八時までだが、今日は特別。表向きは繰り上げ閉館ということ

にしてある。それでも十七時から来館者があつたら、拒むには及ばない。通常通り利用してもらふもよし、新年会に参加してもらふもよし、である。

「皆さんおそろいでしょうかね。では乾杯に先だつて、鏡開きと参りましょう。元来、包丁は入れず、割るものなんだそうですが、どなたかやってみたい方．．．」

南実と目が合ったが、まんまと逃げられてしまった。男性諸氏も腰が引けている。と、再び名乗り出るは弥生のお嬢さんである。

「え？ 大丈夫？」

「行きますよ。ハッ！」

さすがはベース弾き。腕っ節は強かった。一番下の大きい円盤餅を難なく真っ二つに割ると、「お粗末様でした」。今日は何かと喝采を浴びる弥生。その脇ではすっかり恐れをなしている女性が佇む。

「この娘を敵に回すと怖いことになりそう．．． でも、負けないワ」

雑魚は解けた。文花はその逆。今はいい意味で硬直している。

会議スペースの長机を並べ直して、中央にカセットコンロを設置。窓を開けたら、いざ点火。大鍋には、調合済みの冬野菜汁。そこに割って切った餅が入る。グツグツやっている横で事務局長によるご発声がかかる。

「挨拶はヌキ。とりあえず乾杯！」

文花を除く higata@ の面々は、神戸のワインで盛り上がる。下戸の南実も一口二口なら大丈夫そうだ。だが、すでに頬が赤い。千歳はふとサルビアの紅を思い出し、紅潮する。

二人はやはり似ている、ということか。

さて、ついさっきまでゴミ見本の品定め（ネタ集め？）なんかを黙々とやっていたおば様だが、ここからは喧々<sup>けんけん</sup>と仕切り役に就く。

「はいはい、緑色関係は任せて頂戴。カモンさん、魚と一緒に入ってたヤツ持ってらっしゃいよ」

「さすがは緑さんだあな。あいよ」

「ナズナ、八八コグサ、ハコベかあ。そうそう、おふみさん、ダイコンの葉っぱは？」

「洗い場にありますが」

「じゃ、スズシロはOKね。ま、あとはこのヨモギで代用すれば、五草」

七草粥に非ず、五草雑煮が振る舞われることになる。

「これからはお奉行様と呼んで進ぜよう。シシ」

「結構よ。でも掃部の守<sup>カモン</sup>にお仕えするつもりはございませんから」

「ま、確かに流浪の作家さんにお仕えはムリだわな」

「八、似たり寄ったりでしょが」

雑煮奉行様の手は止まったまま。これじゃ煮沸してしまう。文花は気が気でない。

「ああ、おば様」

「あら、おたまは？」

「そりゃ、アンタのことだろ？」

「たく口が減らないんだから。いいから、その箸貸して」

掃部守は、菜箸のような不思議な一膳を手にしていて、それなりに使い込んでいる。つ

まりマイ箸。そんなマイ箸持参者はあいにく少数だが、文花が気を利かせて多めに塗り箸を持って来ていたので事なきを得た。器やグラスはセンターの常備品で間に合う。飲料はビンが中心。ケータリングのピザが玉に<sup>キズ</sup>瑕といったところ。

「この箱が一方通行なのよねえ。引き取りに来るとなると、コストかかっちゃうから、仕方ないけど」

「水溶性にする訳にもいかないし。ある程度キレイにして古紙回収に出すのがベターで  
すかね？」

美味しそうに頬張っている文花と櫻だが、話題はこの通り、協議の続きのようになっている。

「ま、そういう話もいいけど、<sup>レディ</sup>淑女はやっぱ美の追求じゃございませんこと？ 文花さんも姉さんもお口の周り．．．」

すかさずルフロンが大鏡を開く。これもある意味鏡開き。

「ま、これじゃ看板娘の名が泣くワ」

「は？ 娘？ ああハコ入りでしたっけね。あ、そうそうハコと言えよ。集まりましたよ。ハイ！」

お互い顔を見合わせながら、大笑い。笑う門にはカンパ来る、ということのようだ。

歓談続く折だが、余興の頃合いとなった。センスによる魚調理の始まり始まり。

「こいつはさすがに換気扇のあるところじゃねえとな。ま、狭いけど、見学歓迎。荒川の恵みご堪能あれ、ってな」

主にボラとスズキ。小さい部類なので、捌きにくいところだが、実に手際がいい。あっさり下ろすと、油にジャー。

「いけね、おたまさんにとられちゃったんだ」

「あ、取ってきまーす」

文花が箸を取りに行っている間、石島母子はじめ、見学者一同は揚がる様子を眺めていたが、南実だけは<sup>まないた</sup>俎の上をジロジロ。

「ねえ、先生。この内臓にプラスチック粒とかって．．．」

「さあな、解剖してみねえことには」

「どうしょっかな」

この日、研究員はしっかりジッパー袋を持って来ていた。予防に向けた研究を進めるにしろ、まだまだ現象面も押さえたいと思う。臓物の運命、推して知る<sup>可</sup>し、である。

雑煮も素揚げも大皿料理も好評裡に片付き始めていた。帰る客もチラホラと出てくる。十八時を過ぎた頃には、石島家の人々も帰途に。今残っているのは、プチ理事会に出る面々とhigata@メンバー。乾杯の時の半分程の人数になっている。

幾分閑散となった会場を見ながら、櫻は徐々に憂い顔を見せる。それはちょっとした寂しさを感じてのこと。

「なんか、千歳さんが真面目にやると、その分、私との時間とかって減っちゃうのかなあ．．． ジレンマだ」

かねがね櫻を慕っていた弥生は、そんな憂いに反応したようで、また違うジレンマ話を

し出す。

「ディスカッションしてて思ったんですけど、ゴミが減ると、クリーンアップする回数も減るってことですよ。これは本来望ましいことなんでしょうけど、つまりその、皆さんと顔を合わせる機会も減っちゃう、ってことになりませんか？ ねえ、櫻さん」

「そ、そうかも知れないけど．．．」

雑談の一環ではあるが、哀愁が色濃くなってくる。それでも櫻は気を取り直し、

「ホラ、下流側にプチ干潟があるじゃない。いつものところが目処立ったら、今度はそっちを」

すると、冬木が申し訳なさそうに白状する。

「実は隔月で、あそこのクリーンアップ始めてまして。先月も学生連中なんかと一緒に、十月の取り組みがしっかり継承されていることがわかり、本来なら大いに結構なお話なのだが、どうもそうならないところが、曲者ゆえの悲哀だろうか。否、それだけジレンマの度が大きい、ということなのである。

「余計なことを、って言っちゃいけないわね」 文花も憂いを込めてポツリ。

「ゴミを減らしつつも、クリーンアップの場は維持する、って、矛盾スねえ」 八広もお手上げの弁。

「顔を合わせるって以上に、拾って調べて、があるから、かぁ．．．」 蒼葉は的確な寸評を挟む。南実は黙して語らず、である。

だが、この女性は違った。協議の場になかったせいもあるだろう。舞恵は極めて楽観的。

「だったら別にゴミ減らさなくても．．． 何てね。ま、ただ集まるだけじゃ物足りないってんなら、クリーンアップ以外の共同作業を始めればいいんよ。やっぱバンドでしょ」

「でも、それはおまけみたいなものだった訳で．．．」 櫻は少々懐疑的だが、

「いや、メッセージソングとかご当地ソングとか、それで予防につながるなら」 千歳は前向きに応じる。

「そうそう、そんないきなり漂着ゼロにもならないだろうから、バンド活動とクリーンアップを交互にやってみるとか。センターとしても応援しますわよ」 文花はお気楽なことをのたまう。担当楽器があれば、そうも言ってもらえないと思うが。

「となると、益々Goさんに頑張ってもらわないと」 言いだしっぺの弥生がすっかり晴れ晴れとなったので、この話はここまで、と相成った。

プチ理事会と称するのは憚られるが、アルコールが入った状態での議事というのは頼りないもの。正規扱いしないとなれば、こう呼ぶしかあるまい。開始は一応、十八時半から。まだ多少の時間がある。

「おふみさん、そういやアルコールって口にされてないような」

「今日はクルマだから呑めないんだワ。ま、私、お酒入ると大変になっちゃうみたいだから。イブの時も．．． あ、八八八、これから議事もありますし、ネ」

クルマというのを聞き付けて、同乗希望者が現われる。

「ま、下流方向の方々はお送りします。奥宮、宝木、小松の各氏でいいかしら？ 待たせちゃうけど、その間、カレンダーとか手帳とか、よければ選んでて」

文花の気の利き様はこれにとどまらない。

「そうそう、おすみさん。今日の分、謝金をお出ししないとね」

「いえいえ、出勤日ですから」

「だって、あの資料、櫻さんのこと放っばらかして作ってたんでしょ？ 埋め合わせしなきゃ。ねえ？」

櫻は返す言葉がなかった。「嬉しいけど、埋め合わせで済まされるのも何だなぁ……」  
またしても心境の整理が必要になってくる。と、ここで南実がようやく千歳をつかまえると、

「フローチャートのデータ、ください！」 いつもの直球でズバッ。

「USBメモリとか持ってます？」

「じゃ、これに」

「へ？ それって、ケータイストラップじゃ？」

「丈夫なんですよ。しかも防水」

櫻は居ても立ってもいられない。「私との恋愛プロセスよりもそっち優先？ もうっ！」  
何に妬いてるのがすっかりわからなくなっている。南実に対してでないことは確かなのだが……

すでに定刻を過ぎているのだが、この二人が揃わないことには始まらない。

「て、千歳さん、自分のプロセスで先に進んでっちゃう感じ。少しは相方と相談してほしいな」

「それって、今日の話？」

「もあるけど、そのぉ……」

「だよ。サプライズは程々になって？」

千歳はちゃんとわかっている。サプライズネタを忍ばせながらも、原則手堅く進めようとする余り、彼女のもどかしさを招いてしまっているだけなのである。だが、弥生と違って、櫻はピピと来る。

「そっか、ゆっくり見せかけといて実は、ってこと？ それともただのトリック？」

ヤキモキもプロセスのうちと考えればこそ。櫻なりにステディ感を楽しんでいるようである。

後片付けを手伝っていた弥生と冬木だったが、程なく退出した。蒼葉、舞恵、南実は飲料を空けながらよもやま話。

「蒼葉嬢はA。こまつあんは、Minami だからM。舞恵もMだけど……」

「それ、何の話？」 前出のMさんが聞く。

「バンドやるんだったら、名前付けなきゃって思ってさ。で、皆のイニシャルくっつけると何か単語になるんじゃないかと」

Aさんは一人「姉さんはS、千兄さんもS？ じゃないや、C？ いや隅田だから……」  
CとSで悩んでいる。（企業の社会的某ではない。念のため。）

会議スペースではやっこさ、理事会が始まる。といっても、運営委員も交えてなので

意見交換会といったところか。新理事・新運営委員数名に、清、緑、千歳、櫻、八広、そして議長の文花がテーブルに着く。議題は二つ。ホワイトボードを持ち出すまでもないようだ。

「おかげ様で、環境情報サイトは KanNa ですっかり定着。協賛金ベースでめでたく運用が始まった例のデータ入力システムは DUO に決まりました。ネーミングがまだだったのは当法人の名称だった訳ですが . . . 」

こっちでも名前の議論になっている。この NPO 法人何々の件は、新年会でも話題になり、何となく同意もとれていたのだが、書いてみないことには実感が沸かない。文花は意識的に丸文字調で裏紙にしたためてみる。

「で、こうなります。『いきいき環境計画』！」

「ほお、カタカナじゃなかったか。ま、イケイケと間違われないようにするには、その方がいいか」

清はどことなく自重気味にコメントすると、イケイケ批評家の八広氏がその心を説明する。

「生き生き、がお題目ですが、『いき』にはまず地域の域、そして心意気の意気、粋だねえの粋なんかが込められると思います。あと、息づく、もスね」

さすが、コピーライティングのセンスが活きている。横文字を避けたのは略称を考慮してのこと。してその略称とは？

「いいカンケイ、ってことになりますかね」

ここは櫻のひと声で即決。キャッチフレーズもすんなり行きそうである。

次の議題は、部会と講座。二月についてはクリーンアップ講座で行くとしても、さて三月は？

「今日の話で思ったんだけど、クリーンアップを仮に『現場部会』の一環にすると、櫻さんのやりたかったことの部会行事って別にできるかな、って」

「もしかして探訪、のことですか？」

「そうそう、今日だっていいこと言ってたじゃない。ねえ、皆さん？」

かくして、マップづくり教室をやってみてはどうか、という方向で一致する。継続的に取り組めそうならそのまま部会化。何色のマップができるかは、当日のお楽しみ、となる。

「探訪ってことなら、探偵さんにも出てもらねえとな」

「ホホ、虫眼鏡だって双眼鏡だって、よりどりみどりさんよ」

「おば様と一緒になら、やっぱりグリーンマップでしょうね」

とまあ、終始和やかな感じで議事の方もお開きとなった。だが、櫻の議事は終わらない。

「現状を伝えるための As-Is マップ。こうしたいっていうモデルを描く To-Be マップ。その二本立てで地域再発見！なんていいかも。フフ」

それはそれで結構な企画なのだが、皆が気になるのは Cさんと Sさんの To-Beの方？かも知れない。

## 距離

先週のはプチ version だったため、新年最初の理事会は第三土曜日にずれ込むことにな

った。そのせいではないんだろうけど、定例、つまり「第三の男」として顔を出していた業平は、今日は出勤予定なし。オブザーバーとして理事会に同席してもらう手もあったが、彼の代わりに若い女性が参加することになっている。ただし、オブザーバーとしてではなく、記録係。キーは早打ち、トークは辛口、そうKYさんである。業平が来ないのは、逆KY、つまり空気を読んでのことらしいが、その真意は不明。

三角形というのは安定的ではあるが、バランスが取れないことには成り立たない。駆け引きの度合いによっては不等辺にもなるし、時には鋭角にもなる。形が整ったとしても、ずっとトライアングルのまま、というのもどうかと思う。いつまでも先延ばしという訳には行かないのだ。

協議の休憩時間に、蒼葉が千歳に差し入れたリユースペットボトルは、一週間経って、ようやく姉の手元に返って来た。櫻はラベルの識別表示マークを眺めつつ、

「容器包装は[プラ]って四角で囲ってあって、その下にPETとかって打ってあるでしょ。でもペットボトルの場合は、この三角形。で、プラとは書かれてなくて『1』。何か統一感がないって言うか」

マークの是非はさておき、ここでの三角形は形が整っていて、うまく資源が循環することを願ってのデザインになっていることは理解できる。当事者三人にしてみれば、バランスも何もないんだろうけど、周囲としてはせめてこんな形状で仲良くやってくれれば、なんて思ってしまうものである。不謹慎かも知れないが、そんな話の延長でこの三角表示が出てきたことが何となくわかる。千歳はとぼけたフリして、前段の[プラ]の話をつくらます。

「そうそう、その容器包装絡みで言えばさ、昨日のCSRインタビューって、どんなでした？」

「文花さん来てから、ってゆーか、午後に皆さん揃ってから報告した方がいいかなって。ちょっとしたネタだから、先行リリースをご希望の場合は特別料金を頂戴します」

「恋人にもサービスなし？」

「ここではあくまで隅田クンですから。って、今、何？ 恋人？ ま、まだそうか...」

千歳も出席するつもりでいたのだが、古紙パルプ配合率の偽装問題どうこうで、その波紋が広がりそうになったことを受け、急遽、編集会議だ取材だとなってしまう、やむなく見送り。紙のせいで、とんだ番狂わせとなった訳だが、

「僕としては素直に表現したつもりだったんだけど。それとも...」

「え？ あ、いいのいいの。そのうち神に誓って何とやられて、そんな間柄に... ヤダ、何言ってんだろ。ハ、ハハ」

「紙って今、信用ならないからねえ。誓い空しくってならなきゃいいけど」

「笑えないんですけどぉ」

「でも、真面目な話、再生されなかった古紙の行方とか、返品された偽装品の行く末とか、気にならない？」

「まっ、せいぜい紙隠しってとこじゃないスか？」

「製紙業界としては、神頼み？」

ちょっとしたコントで盛り上がることになる。それにしても神に誓ってって？ 彼の机の上には残り物の卓上カレンダーが未開封のまま置いてある。その紙ケースには[紙]の識

別表示と「R100」の再生紙使用マークが並んで印字されている。いろいろな意味で言葉に詰まる千歳であった。こういう時はとにかく仕事仕事。すると、

「あ、文花さん、お野菜どうでした？」

「昨日はやっぱ寒かったのね。ちょっと霜焼け気味だったけど、まあ何とか。それより、紙よ紙。偽装品じゃないのをちゃんと手配してもらわないと」

「それって、季刊誌の？ あ、でも千歳さんが言うには、きっとカミ隠しに遭って、入  
手できないだろうって」

「それ、櫻さんが。偽装発言だ」

「どっちが言っても似たようなもんでしょ。紙一重よ」

「たく、この二人は。お寒いこと云ってんのに、アツアツってか」

「あーあ、こっちが寒くなって来ちゃった。霜焼けしそう．．．」

ここでは三人寄ると何じゃもんじゃになる。これじゃ仕事になりやしない。

午後二時。理事七名に、記録係と報告者を迎えて開会。カウンター業務は休止。まずは、昨日のニュースから。

「で、その会社のCSRご担当者が協議の場に来てたんですよ。だから話は早かったです。物申すのまとめもあったし。あとは、南実さんの頑張りでしょうね。例のフローチャート使って、特にここに働きかけることで抑制につなげては？といった提言がビシバシ。私は専らどんなゴミがどのくらいって報告ベースですね」

商業施設の本部CSR担当者は、冬木とは旧知の人物。先週、彼の隣にいたのは正にその人だった、という訳だ。あとはショッピングセンター店長、同店の環境対応等の担当者が出たり入ったりで数人程度、というのが先方の陣容。対する聞き手、CSR的にはステイクホルダーとなるが、強いて言えば地域住民として南実、櫻、業平、弥生、遅れて八広が相對した。京と冬木は仲介者として同じテーブルに着く。傍聴者は、チーム冬木から何人か、あとはゴミ減らし協議の場に来ていた市民がチラホラ、とのこと。

ふ「それで櫻さん、フローのどの辺が焦点になったの？」

さ「企業の社会的責任を当てはめやすいのは、今は消費者の安全・安心につながる部分だろうってことで、特に原材料調達と加工・製造のところでしたかね。もっと遡って、商品企画段階からそうしたニーズをしっかりと反映させるべきだろう、とかでも議論になりました。とにかく安全・安心を念頭にしておいて損はない。それは環境負荷削減やゴミ抑制にも適う。リスクの予防は消費者ニーズにも合致する。そんな論調でしたね」

ち「もともとそういうのは進んでる会社だからね。しっかり話し合いができたのは、それだけ理解があった、ということかな」

千歳としては根掘り葉掘り行きたいところだったが、まずは軽めにとどめた。

さ「ええ、でも容器包装類については認識が弱かったみたい。そこは業平さんの実証データが、ね？」

報告事項だが、議事は議事。弥生は昨日の一席がいい社会勉強になったようで、その刺激を持ち込むようにカタカタと記録を打っていたが、ここで音が止まる。

や「はい、Goさん、いや本多さんのスキャンした中に、しっかり同店の直販品も含まれてまして。実物持参だったのがまた物を言ったというか」

毒舌家らしからぬ持ち上げ方である。にこやかな弥生、分が悪そうな文花。何となく目が合うも、すぐに逸らしてしまっ<sup>て</sup>た二人である。

さ「作って売っておしまいじゃいけないっていう認識はちゃんとあった。でも同社の場合、それは衣料品とか限られた自社製品について、だったんですよ。[プラ]類は度外視というかゴミ扱い。紙パックとか食品トレイとか一般的なリサイクルは勿論取り組んでましたが、この件で新たな対象が加わった、そんな見方でしたね」

「ま、まだまだ出口対策ってとこだあな」

清に代弁されてしまっ<sup>て</sup>は、千歳の出る幕がない。

「その容器包装関係ですが、例えばバイオプラに切り替えるとかって話は、自社じゃなくてプラ素材のメーカーと詰めなきゃいけないんだそうです。てな訳で、すぐにできそうなものとして決まったのが．．．」

櫻はその結論をホワイトボードに列挙し出した。1．[プラ]（識別表示付き限定）の試験回収 2．簡易式油化装置のデモをイベント広場で実施、3．．．

「次回の耐寒クリーンアップに、どなたかいらっしゃるかも知れません。その時の状況次第ですが．．．」 三つ目には、「調査型クリーンアップを試行」と書き足された。

「店長の裁量が大きいこともありますが、少なくとも当の商業施設に関しては、こんな感じで話がまとまりました。全社的な展開ってことではまだまだ先。その辺の展望についてはエドさんの情報誌に載るかも、あ、八八、それは発行されてからのお楽しみ、と。ね、弥生さん？」

弥生が口を開こうとすると、遮るように文花が話題を転換する。報告終了の締めも何もあったものではない。

「そりゃそうと、情報誌って言えば、当センターの情報誌、いや季刊誌ね。そろそろ準備しなきゃ」

紙の問題はさておいて、まずは中味。これまでは特に編集会議なども設けず、櫻のスタイルで筆<sup>したが</sup>うまま、というので済んでいたのだが．．．

「今後は『いきいき環境計画』としての編集方針とかも打ち出さないとダメかしら、ね」  
**など**と事務局長が仰るもんだから、急遽、議事が追加され、櫻もカウンターに戻れなくなってしまった。トピックスとしては、センターと新法人の行事案内など、というのがひとまず決まる。櫻は引き続き板書するも、

「って、次号が出るのって二月中旬だから、クリーンアップ講座は終わった後ですよ。となると、三月の方の予告ですが、講座名って？」

ここで緑のおば様がしゃしゃり出る。

「グリーンマップ講座、でいいんでしょ？」

「はあ、クリーンアップにグリーンマップ．．．」

今日の千歳は何かと語呂に引っかかる。

「何か似てるし」

櫻も今更ながら気付いてみる。

「まあ、読者の皆さんにはそこんこ間違えないように伝えるんですな」

清の一言に一同同意。残る予告は、設立総会、四月のクリーンアップ、といったところか。

部会が動き出したら、各種行事が増えていくことになるが、そのためにも今日は部会のデザインをしなければ、となる。こうなると今度は、定款の最終案を固めなきゃ、会員制度も正式にスタートさせなきゃ、と目白押し。この調子だとそのままボードに張り付くことになりそうだったので、櫻は頃合いを見計らってカウンターへ。

「今日がピーク？ それとも．．．」 遠巻きにやりとりを聞きながら、ちょっぴり物憂げ。同じ場所に居ながら恋人との距離を感じてしまうというのは結構やるせないものである。

季刊誌の編集体制についても議論は交わされ、作家の両先生に千歳、八広、つまり筆が立つ面々が加勢することで話がついた。これで十二月から二月までの行事報告もバッチリ！と、櫻は安堵の色を浮かべるも、「千歳さんが編集に就くとなると、どうなんだろう？ スローな感じならいいけど」とやっぱり一憂してしまうのであった。彼のジャーナリストイックなところに惹かれているのは確かだが、仕事で一緒に、となるとそんな見方も変わってくるかも知れぬ。櫻の憂いを他所に、日は傾き、今は辛うじて夕照が残る時分である。午後五時を過ぎ、議事は漸く、終わった。

#### わたしたち

浮き沈みは一時的なものだからいいとして、気分の切り替えというのは、日単位ということもあるので案外難しかったりする。今日はどんな顔して彼と会ったらいいものか．．．足取りが軽いとは裏腹に、顔には憂いが映る。櫻は一人スタジオに向かっていた。

年が改まって最初の音楽会。各自、そこそこ練習はしている筈だが、寒い日が続いていたので、動きが鈍っていることが予想される。が、それ以上に出足が鈍いんじゃ話にならない。

「あれ？ 弥生ちゃんにルフロン、まだ二人だけ？」

「櫻さんこそ、千さんどしたんですか？」

「何か先に寄り道するところがあるとかって」

「ああ、ハクンもそんなようなこと言ってたさ。何か二人で企んでるんでないの？」

「てことは、Goさんも一緒だったりして？」

とここで、例の重低音着メロが響く。業平発、弥生着の呼び出しである。案の定、男性三氏はすっかり合流していて、しかもランチタイムミーティングをしていたんだそう。詞と曲を軽く合わせるつもりがついヒートアップ。気が付いたら集合時刻を過ぎていた、とのこと。弥生はケータイ越しに、ツッコミともハニカミともわからないような受け答えをしている。「しょーがないなあ。どうせまた新曲が何かでおどかそうって魂胆だったんでしょ？ へへ、ま、とにかく待ってます。ハイ」

本来なら下旬はおいそがしい身ゆえ、出てくるのだってひと苦労だっただろう。だが、このお嬢さんにアタックされてはそうは言っていられまい。いやいや、業平としても楽曲の持つメッセージ性を自覚してきたフシはある。作詞家と激論になった、というのがその証し。

千歳は仲裁するのに労を要したようで、言葉少な。業平と八広はまだ興奮が収まらない

ような顔をしているが、機嫌は悪くない。

「お待たせしやした。さ、詞ができてるのから、行ってみよう！」

とりあえず、ベース、ドラム、パーカッション、Computer Manipulator の土台系の方々のテンションは高いので、その四人だけでも十分成り立ちそうではある。櫻は千歳の顔を窺いながらも、うまく声がかけれない。千歳の方もそんな櫻の逡巡を読み取ったか、引き続き黙々としている。以心伝心ならぬ、以沈伝沈？ が、そんな沈黙を打ち破るように、一曲目のイントロが流れ始めた。

「ホレ、櫻姉、出番だぞい！」

ルフロンはカウベルを叩いて煽る。

「もぉ、私は牛じゃございませんわよ」

鍵盤は抜きにして、ひとまずボーカルに専念する櫻。『届けたい・・・』はそう、クールな誰かさんに想いを伝えるところを原点とする曲である。今は、切り替わらない気持ちのモヤモヤを晴らすための歌と言っていい。

そんな櫻の新境地はメンバーをどことなく揺さぶっていた。聞き流す構えだった千歳にもそれは勿論伝わる。曲は軽やかだが、歌声はシリアス。作曲者の意図としては想定外だったが、こんな「届けたい」も時にはいいだろう。

歌い終わった櫻は幾許か晴れ晴れ。だが、千歳は逆に益々黙りこくってしまうことになる。「こりゃ、歌い方考えないと・・・」歌姫は改めて、「伝える」「届ける」ことの難しさを知る。

上の空のような感じではあったが、その歌は『Down Stream』（直訳すると下の流れ）。千歳はギターを鳴らしながら、さらりと歌い上げる。こちらも思うところあったか、もどかしさを押し流すような歌唱で、自作曲ながら本意とは異なる印象を醸してしまうことになる。時々感情で歌は形を変えるものではあるが、聴き手の共感を得られないことには正に川流れ。掃部清澄先生の著述の心得は、音楽にも通じるころ大なのである。

「隅田さん、大丈夫スか？」

「何かこう詞が重く感じてきちゃって」

それは本人の気の持ちよう。詞は決して悪くないのである。何はともあれ、ここまでの二曲、演奏については仕上がってきたと言っていい。

詞ができているのを優先となると、前回の四曲目がお次の番となる。だが、肝心の歌い手がいない。

「蒼葉さん、今日来ないんスね。こないだのディスカッションとかを踏まえて詞書いたんだけど・・・」

「何か小梅嬢と絵を観に行くんだとかで」

「へえ、それはまた麗しいお話で」

「まぁ、姉貴が歌って悪いことはないでしょ」

櫻は歌詞カードを受け取ると、ざっと目を走らせて諳んじてみる。

「いつかきっと、時は来る、Re-Naturation・・・」

人の働きかけで自然が本来の姿に戻っていく過程や望みが散りばめられている。その背

景にあるのは To-Be を思い描く画家としての眼差し。詩人らしい詞に、櫻も思わずクラっとなっている。蒼葉が見ても、同じように心動かされたに違いない。八広としては狙い通りだった訳である。

一曲目とは打って変わって、櫻は朗々と、だが言葉を一つ一つ紡ぐように確かめるように歌っている。表現的に両立しにくそうなところを見事にクリアする歌姫であった。千歳はつい聴き入ってしまって、コードが思うように進行しない。これはスローとは別次元の話である。

前回の三曲目は、詞が半分できたところで止まっている。何をテーマにというのが定まっていなかったが、作詞家殿は、バンドのテーマソングというのはどうか、と申す。何でもサビに嵌る五文字を考えてたら「わたしたち」というのがピタッと来たそうで、そこから途中まで詞を起こしてみたんだとか。激論になったのはどうやらその辺らしく、

「男衆もいるのに、私達ってのもなあ」

「だって本多さん、これと云った想定ってなかったんスよね？」

「重厚な感じにしてあるのは、メッセージ性を持たせるため、ってことさ。五文字のキーワードだったら、他にも何かあると思うんだけどなあ」

まだ決着を見ていなかった。

「まあ、とにかく歌ってみるよ。もともとメンバーは女性優位でもあるんだし。ねえ、櫻さん？」

「え？ 私に聞かれても・・・」

冬木は、インタビュー記事のまとめが終わっていないため、休出中。南実は論文の書き足しに追われていて不参加。この二人と蒼葉を合わせた九名がこの曲で言う私達に該当するのだが、櫻にとってのそれは、彼と二人で、を指すことが多い。千歳の何気ない問いかけは、実は櫻にとっては重かった。「千歳さんの私達って、緩やかかってこと？ 私という時も同じなのかどうなのか」 私達の解釈をめぐって、揺れる女心がここにある。メッセージ性はさておき、含蓄がある曲になることは間違いなさそうである。

千歳がメインで歌うとしても、キーワード五文字については皆で声をかぶせればテーマには適う。そんな感触がつかめたところで、あとは higata@ で詰めよう、となった。途中休憩を含め、四曲流して二時間弱。流域ソング、課題提起ミュージック、バンド名は未定なるも、音楽の方向性はおぼろげながら見えている。モチベーションに支えられてか、鈍りを感じさせない演奏が続いた。時間配分も良好である。

ここからは一部のメンバーには初耳となる一曲。即ち、弥生向けガールポップチューンである。

「テーマは、現場の空気感というか呼吸というか。とにかく清々しいこうと思って。詞はまだ途中で」

極めて規則的なリズムが刻まれるも、ゆったりめ。ベースパートは音源で流した方がしっくり来るとのことで、生ベースはなし。リズムセクションの二人は、そんなリズムを壊さないようにしみじみと叩き、打ち鳴らす。原曲が業平というのがどうにも信じ難い。それだけ弥生がアレンジしまくったということか。編曲のやりとりなんかをしていれば、気心も知れてくるし、情も変化するというもの。弥生の歌い方からして、ラブソングと呼ん

でも差し支えなさそうである。

「で、千さんはラブソングって作らないの？」

清々しいお嬢さんに、毒舌の片鱗はない。せいぜいこんなツッコミが来るくらいである。

「なくはないけど、内緒」

「そっか、櫻さんにだけ、ってことか」

「ま、今日のところはこれをちょっと流してもらえれば」

千歳がUSBメモリで持って来たのは、新曲、つまりメッセージソングの楽曲データである。「漂うもの、溶けてしまうもの、見向きもされないもの...モノの安直さを問うというか、儚さみたいのをイメージしつつ、業平サウンドに倣ってビートを利かせてみたんだ。詞はこれからだけだね」

業平のPCに取り込んで、まずはオケだけ流してみる。いきなりの重低音に、さすがの業平もビックリ。「千ちゃん、これって」聴衆の度肝を抜くには良さそうだが、果たして発表会には間に合うのか、何番目にかかることになるのか、お楽しみの一つである。

何だかんだで三時間。昨日と同じく、夕暉が<sup>せつき</sup>残る時間に散会となる。だが、六人にはまだ時間がある。ここは一つどこかでお茶でも、となるのが<sup>ことわり</sup>理。

「あーあ、舞恵は腹ペコさ。この辺、食事処ってないの？」

「八八、パーカッションは体力使うもんね」

六曲目で目が覚めたか、ようやく気分転換が図れたようで、今の櫻はにこやか。

「んじゃ、定食屋さん行きますか。でも、ルフロンさん、全面禁煙じゃツライですよ？」

「いやいや、弥生ちゃんのリフレッシュソング聴いた後じゃ、吸うに吸えんさ。とにかくメシが先！」

かくして、男女三組連れ立って、会食の場へ向かうことになる。

「Goさん、あたしと一緒に歩くのイヤ？」

「八八、そんなことはないけど...」

デレデレ路線ではないが、ステディ系でもなさそうな弥生のモーションである。割とストレートなのはソリューション志向の為せる業だろうか。間違いないのは、彼女なりにアプローチを考え、実践する段階に入った、ということだろう。

「よく考えると千歳さんと本多さんが揃ったのって、二週間ぶり？」

「そうなんだよ。何か前に会ったのが去年のことみたいでさ。まえ、あ、奥宮さんもだよな？」

「やあね、おすみさん。まだそんな奥宮だなんて」

「だって、縁結びの立役者さんだからねえ。丁重にお呼びしないと」

「え、縁結びって？」

「そっか、弥生ちゃんには話してなかった、か」

「まあ、この話はR25でないの？ ある意味、刺激的だし、櫻姉の名誉のためにも」

「エーッ、知りたい！ Goさんも知ってるの？ だったら教えてよ！」

「へへ、そのうちね」

日頃のツッコミのお返しという訳ではないが、すっかりいじられている弥生であった。

「いいわよいいわよ。でもルフロンさん、あたしもお願いすれば、その縁結びってしてくれませんか？」

「いい娘にしてればね。でもその必要ないんじゃない？」

「いいえ、ライバルがいますから」

千歳、櫻は言うに及ばず、業平が食後のお茶を吹き出しかけたのは、無理のないことである。八広は思索に耽<sup>ふけ</sup>っているようで、どこ吹く風の態。

さ「って、そういう話じゃなくて。新年会、どうして来なかったのかなと思って」

ご「不覚にも風邪ひいちゃってね」

ま「そういう時、ひとり身だと困るんでないの？」

ご「まあ、共同代表が隣で暮らしてるから」

弥生は吹き出す代わりに、思わず茶をゴクリ。「へ、共同代表？ 聞いてないよお・・・」

業平は専ら実機担当。IT系がどうか言ったのは、その共同代表を指すらしい。いったいどんな人物なのか、というか女性だったらどうしよう・・・弥生は一転して頭を抱えることになる。

弥生が休止モードになったのを見計らい、舞恵は業平に話を切り出す。縁結びネタということではなさそうだが、耳打ち気味なのが少々気にかかる。

「ちなみにGoさんとこ、融資ってどうしてる？」

「特にはね。とにかく今は代表二人でギリギリって感じ。融資があれば、誰か雇えるかもってのはある」

「ほほう、身近なところに顧客がいたさ。じゃ当行の社会的起業融資ってのどう？」

「な、なんと！」

「貴社で働きたがってる乙女もいるようだしさ」

「？」

どこでどう相談が為されたのかはいざ知らず、弥生の思惑をしっかりと読み込んで、希望先にそれとなく伝えてみる。これは立派な橋渡しと言っていい。

「機械に使ってもいいけど、やっぱ人材よ。有望なのを育てるのもソーシャルビジネスの役目っしょ？」

起業家たる者、何につけ自立性が問われるところだが、その自立は多様な関わりの中から得られて然り。金融サイドとしては、お金の使い方を通じて、社会をより良くする先導役が期されて然りである。相応の審査は必要になるだろうが、これも何かのご縁。お互いに、いやこの場合は三者にとって三方よし、となればいいのである。

男性三氏は僕達ではなく『私達』の密談を交わしているようなので、女性三人の方も談話に励むことにする。しっかりデザートを追加注文しているところを見ると、こっちの私達は短時間では済まなそうだ。

「初姉ってその後、聞いてる？」

「あんましケータイかけられないから、待つ身です。こないだのメールでは、第二第三に備えてるとかって」

「ルフロンも会ってない、よね？」

「今月からは完全オフだって。だから看板メニューのパンケーキもなし」

「何か、こっちも気が気じゃないわね」

「まあ、合格の知らせが来たら、皆でパアッとお祝いするさ。お店だと気遣わせちゃうだろうから、センターでね」

「その時は多少デコりますかね？」

「お、その調子。いっそ、そのまま派手にやろうよ。手伝うし」

「ルフロンさんが飾りつけすると、何かボサボサになりそう」

「あーあ、いい娘にしたたと思ったら、また毒づきおって」

「あ．．．」

といった具合に盛り上がっている。舞恵の自作曲の件は、二月三日、クリーンアップ後に千住宅にて、ということで仮決定。弥生も行きたそうな顔をしているが、「その日はちょっとね。クリーンアップは弟に行ってもらいますんで、よろしくです」

と、ここで業平はひと足先に退席すると言う。「あっ、Goさん、ストップ！」店の外で弥生は業平をつかまえる。

「ん？ どったの弥生くん」

「そのお、二月の予定なんですけどね。第二木曜日って先約とか．．．」

「ああ、そっかあ。じゃメールでまた。曲も仕上げないといけないし」

「とにかく空けといてね」

方や店内に残る四人は、

さ「じゃ、お二人さんとは二十六日ね」

ま「あ、そうそう、その日ね、ちょっとムリかも。おふみさんには、二月には監事さん連れてくから、ってそう伝えといてくださいな」

ち「て、八広氏も？」

八「自分は行くつもりでしたけど．．．」

舞恵が咳払いをしているので、どうも行けなさそうである。その理由．．．今日の新曲とかにヒントがありそうだが、さて？

五人が店を出たのは、十九時過ぎ。大寒イブというだけあって、一段と冷え込んではいいるが、寒さは感じない。何人であっても私達。何とも言えない一体感が寒気を遠ざけている。

## 二月の巻

### 雪中動静

季節の分かれ目というのは、期せずして象徴的な出来事があったりする。予測が立っている分、まだいいのかも知れないが、今度のクリーンアップ予定日は、週間予報では「雪」。前日になって、その気配は益々濃厚となる。耐寒だ体感だ、などと暢気なことを言っられなくなってきた。

センターの三人は、ランチタイムミーティングを経て、それぞれのツールで明日の案内業務にとりかかる。漂着モノログの掲示板には、「降雪時は、クリーンアップは見合わせ、下見は決行」の旨、掲載され、KanNaのセンター主催行事コーナーにも、同様のおことわ

り文が一筆付け足される。文花がコツコツと作り上げてきた想定会員向けメールサービスでも、明日から来週にかけての行事案内などが、寒中見舞いを兼ねる形で配信された。商業施設ご関係者には、雪予報が出た時点で冬木から連絡してもらっていたので、失礼がない状態にはなっている（と思われる）。延期の場合の日時について予告しておくのも手だったが、九日の講座参加者の希望や都合に応じて決めた方がよかろう、ということで今回は見送り。あとはとにかく明日になってからである。

空模様を案じつつも、データカードなどの持ち物を点検する櫻。文花はそれを見て、あるいはいいものを手渡す。これも明日に備えて、ということらしい。

「これってやっぱり自家製、ですか？」

「町内会で準備してたのをおすそ分けしてもらったの。明日は私行けないから、ご挨拶代わりってことで」

「かしこまりました。でも、屋外でやる分には、ウチもソトもないですねえ」

二人が談笑するのを何とはなしに聞いていた千歳だったが、「そうか、節分と言えば…」こちらも何か思いついたようである。

そして翌朝は、まさかの大雪！である。堤防上や河川敷は除雪されることはないので、降ったら降っただけ積もる。少なからず歩行者やランナーはいるので、何となく雪分け道のようなものができてはいるが、足取りは重い。河原桜近くに来たところで、不覚にも定刻の十時を回ってしまった。

千歳がもたついている間に、櫻は一足先に現地に到着。しかし、すでに先客がいたものだから、姉ながらビックリとなる。

「な、なんで？ 起きたらいないから何処行っちゃったかと思ってたら」

「雪が降ったら集合、ってことにしといたんだ。ね、小梅ちゃん？」

「エへへ、早起きは何とやら。蒼葉さんに手ほどきを受けたくて。あ、そうそう、いい知らせがあるって話……」

ケータイつながりではないながら、約束を交わし合って、しっかり実行しているこの二人。微笑ましくていいのだが、そのいい知らせというのが引かかる。小梅には先に予告が届いていて、姉が蚊帳の外、というのはどういうつもりなんだろうか。

「そうねえ、教えたいたのはヤマヤマだけど、櫻姉が来ちゃったから……」

「あら、失礼しちゃうわ。いいわよ、一人で下見してっから」

櫻はブツブツ言いながら、その場を離れる。干潟アクセス通路の方へ行ったのを見届けると、蒼葉は小梅にヒソヒソ話。

「エーッ！ 入選？ しかも準大賞……」

「シー！」

と、そこへノロノロと千兄さんがやって来た。

「あれ？ お二人だけ？」

「千兄さま、ちょうどいいところへ」

今度は小梅をその場に残し、蒼葉は千歳を引っ張り出す。

「姉さんのことだから、どうせちゃんと決めてないですよ。十四日って、お約束します？」

「空けてはあるけど、これと言ってまだ．．．」

「やっぱりね。ちなみに十五日のご予定は？」

「突発的な時事ネタが来なければ、在宅勤務かな」

「了解。その日も何となく空けておいてもらえるといいことあるかも、です」

思わせぶりの蒼葉の発言に、徐々にソワソワ感が高まる千歳である。小刻みに吐いた息が白く漂うも、そこにセリフはない。音のないスピーチバルーンが浮かぶ図とはこのことだろう。と、そのバルーンを破るように雪球が飛んできた。

「うひゃ！」

遠くから誰かさんの笑い声が聞こえる。

「あら、蒼葉にぶつけようと思ったのに。それ！」

次は見事、妹に命中。

「やったなあ！」

描きかけのパステル画を枯れヨシの陰に隠すと、小梅とチームを組んで、蒼葉は逆襲に転じる。下見どころではない。雪合戦の始まりである。

「キャー！ 二人でなんてズルイ！」

「姉さんにはダーリンがいるでしょ」

「ダメよ、千歳さんスローだから」

これを聞いたからには、参戦しない訳にはいかない。

「こうなったら、誰でもいいや。それっ！」

不用意に放った一球は、事もあるうに櫻を直撃。

「ひどーい！ 護衛になってないじゃん！」

これで女性を敵に回すことになった千歳は、三姉妹から総攻撃を受けることになる。

この時、一人の少年が大きな雪玉を転がしながら、合戦場に近づいていた。逃げ惑う三十男を見つけると、大きなのは放置して、小さいのを拵こしらえ始める。そして出陣。

「千さん、ダイジョブ？」

「おお、これは六さん。あ、やべ．．．」

息つく暇もありゃしない。千歳はどうに反撃を諦めていたようで、とにかく退散。少年は持ち玉で抵抗を試みるも、呆気なく敗退。

さ「何か、張り合えないし」

あ「姉さん、やり過ぎ」

さ「人のこと言えないっしょ？」

こ「あれ？ 先生だ」

残された大玉の傍には、堀之内先生がいらっしやった。玉転がしを続けながら、ようやく彼女達のもとにやって来て、

「まあまあ、女性陣が強いのか、男性陣が弱いのか、見てて楽しいけど、とにかく休戦ネ」

今のところ六人。それぞれ挨拶を交わしてはいるが、手持ち無沙汰でもある。まだ誰か来そうではあるので、揃うまでも一つ余興でも、となる。大玉の上に小玉が乗ったら、

「顔なしダルマだあ」

じゃ済まないの、パーツを探しに行くことに。だが、

「ちょっと待って六月君。もうちょっとで仕上がるから」

と画家さんに止められては、仕方がない。立ち往生する少年の隣で、千歳はやっとこさ、雪干潟との対面を果たす。

「って、漂着？ 目立ってるし．．．」

降り積もってはいるが、その量の前にはさすがの雪も無力であった。これらを覆い隠すには、さらなる降雪が必要になる、ということか。

「私もね、ビックリしちゃって。真っ白って訳に行かないのねえ」

グラウンドは辺り一面、白である。それとは対照的な光景が二人の前に広がっている。白が抜けているところは、流木だったり、クーラーボックスだったり。あとは細々した突起物なんかを着雪を拒んでいるのがわかる。マダラ干潟とでも呼ぶべき、不思議な世界。崖地では朽ちたヨシが、なお直立し、侘びの風景を醸し出している。ヨシが目立つこともあって、一望する限りは残念ながら銀世界とは言い難いのである。

蒼葉はそれでもパステルを走らせていた。白一色なら手間も省けるといものだが、そうになっていないことがかえって刺戟になったようで、むしろ雑多に描こうと努めているように見受けられる。小梅は固唾<sup>かたず</sup>を呑んでその描写を見守る。そして、六月はそんな二人の女性を見ているような見ていないような．．． ドキドキする対象が変移していることがわかってきただけに、余計に胸が高鳴っている。その背後で永代は空気を読んでみる。「そうかそうか、彼もそういう年頃になった訳か」 干潟見物か、単なる雪見か、本日の目的は定かならずも、先生たる者、何よりの目的は教え子の成長を現場で知る、これに限るだろう。つい嬉しくなって、顔なしダルマに向かって話しかけちゃうところが、チャーミングだったりする。

蒼葉のデッサンはひとまず終了。千歳も記録写真を撮り終えた。

「じゃ、六さん、気い付けてね」

待ってましたとばかり、だったが、ここで勢いよく動いてはいけない。聡明な少年はソロソロと旧道を下り始める。残る五人は彼の動きを注視しながらも、同じ方向を見遣っている。と、下流側の崖地に、数羽のカラスが丸くなって留まっているのが発見された。バックが白くない場所にいるのは、バレないようにということだったか。人がガヤガヤいる割には、随分と悠長に構えているものである。

「彼が近づいても動じないわねえ」

「寒くて動けないだけじゃないの？」

「じゃ試しに雪玉投げてみましょっか？」

櫻が仕込みを始めたその時である。そのカラスの方向目がけて、白い玉が飛んで行った。

「ナヌ？」

二人同時に振り返ると、完全防寒スタイルのルフロン嬢がケラケラやっている。しかも彼女の隣には八広ではなく、冬木。相変わらず人をおどかすのがお上手である。が、驚いている場合ではない。

この一球で、カラスは退却するも、その啼き声がいけなかった。アーだかカーだかの直後に、

「キャー！」

六月を追うように狭いスロープを下りようとしていた小梅は、思わず足を滑らせてしまうことになる。カラスが啼くとろくなことがないのは承知しているが、

「テヘヘ、すべっ．．． いけね」

実姉がここにいないとは云え、禁句を口にしてしまっはそっちの方が<sup>わざわい</sup>禍のもとである。

「初姉には内緒ね」

「それより大丈夫？」

しばらく起き上がれなかった小梅だが、姉様方が手を差し伸べるのを待っていた訳ではない。こういう時は弟分に助けてもらいたかったりするものである。

「姉御、ホラ」

「ありがと」

と、何ともホットな場面を一同は見下ろすことになる。舞恵は頭を掻く仕草をするも、

「まー、ええんでないの？」

シャレで誤魔化すおつもりらしい。だが、

「ほんと、ビックリくりくり、ルフロンさんなんだから」

櫻にこう切り返されてはシャレも何も無い。

見下ろす = 下見という見方もあるが、やはり現地を踏査しないことには確たるものは得られない。そういう意味で若い二人は実に頼もしい。雪ダルマ用の品を調達しに行っているとは言え、手際は鮮やか。永代は改めて二人の成長ぶりに目を細める。

ひ「で、あのお二人さんはいつもあんな感じ？」

さ「ええ、自分なりの役割ってのを認識して、自発的に動いてますね」

ち「六月君には教わること多いし、小梅嬢にはとにかく頭が上がらないって言うか．．．」

さ「千歳さんはいじられてるだけでしょ？」

ひ「まゝ何はともあれ、皆さんのおかげでしょうね。アタシからも感謝申し上げますワ」

六月はカサの柄、小梅はゴム手袋をそれぞれ発掘して組み合わせたりしている。目鼻は各種フタやキャップで事足りる。ミニバケツが出てきたかと思えば、さらには「へへ、炭だあ！」

苦笑する千歳を櫻はつついてみる。

「ホラ、隅田！って、お呼びですわよ」

「ハイハイ、六さん、呼んだ？」

いつしか、冬木も舞恵もマダラ干潟をうろついていて、その斑具合が深化していた。

「なあんた、おすみさん、下りてきちゃったの？」

「そりゃね、下見に来たんだから」

「下．．． そうそう、下見りゃいろいろ出てくるさ。それなんかへビかと思ったら、ベルトだし」

「何が隠れてるかわかんないから、スリリングではあるねえ」

「エド氏なんざ、栄養ドリンクのピン踏んづけて転びそうになったんよ」

「やっぱ漂着物は除去しとかないとね」

「隠しちゃマズイってか」

蒼葉は上流側で、トレイ状の容器を物色中。冬木は若い二人から心得だか講釈だかを受けている最中である。陸に残るは、三十代の女性二人。

「ところで櫻さん、隅田さんとはいい線行ってるの？」

「ヤダなあ、堀之内先生ったら」

「矢ノ倉ったら、なかなか教えてくれないのよ」

「その矢ノ倉さんの方がネタとしては面白いと思いますよ。お話聞いてませんか？」

うっかり口を滑らせてしまう櫻であった。弥生と文花、どっちを応援したらいいのか決めかねていただけに、これじゃ一方に助け舟を出すようなものか。

「彼女はお節介をするのは好きでも、されるのは嫌がるだろうから、ま、それとなく聞いてみるワ。それより貴女<sup>アナタ</sup>とこよ」

話を逸らし損なって、さらに答えに窮する櫻である。この手の質問だといつもの機転も利かせようがない。「まあ、三分<sup>さんぶ</sup>、いや五分<sup>ごぶ</sup> . . . とにかく春になれば、ハハ」

クリーンアップはお預けながら、雪ダルマを仕上げる材料はそろそろ。こうも都合よく現地調達できるとなれば、漂着も悪くない？ いやいや今日のところは偶々<sup>たまたま</sup>いいのが見つかったからそう思うだけで、雪を掘ればおそらくいつものゴミ箱状態であろうことは想像に難くない。雪中に埋もれているであろう多くの包装類やプラスチック片は、おそらくパリパリ、ということも十分想起し得る。それらは劣化が進めば、さらに微細化して手で拾い集めるのは至難となろう。クリーンアップすべきは、むしろこういう時！なのかも知れない。悪条件を逆手にとって、そのパリパリごと雪で固めて陸揚げさせてしまう、という手もある。

千歳はまだ斑になっていない辺りを踏み固め、ブロック状にしたものを枯れ枝ごと持ち上げてみる。「お、いけそう？」 だが、合戦後の軍手はまだ水分を含んでいる故、その上に雪の塊が来れば、冷たいのは当たり前。予備の軍手に替えたところで、結果は目に見えている。あえなく、ひとかたまりを引き揚げたところで断念。彼に追隨する者もなし。

「千歳さんたら、しょうがないわね。暖めて差し上げたいけど、私の手も冷たいからなあ . . . 」

よくよく見れば、櫻は撥水素材の手袋をしている。雪球を量産するには都合は良いが、冷たいことには変わらない。こすり合わせながら、息を吐きかけている。本人は寒いんだろうけど、隣人はそうでもない。櫻のそんな仕草に温もりを感じ、つい見入ってしまう千歳であった。

さ「ん？」

ち「やっぱ、体動かさないと寒いなあって思って」

さ「二人きりならよかったのにね。そしたら . . . 」

とか言いながら、櫻はおもむろに温湿度計を取り出す。見れば、気温四 、湿度は何と七十%と来た。乾燥していないのがわかったのはいいとしても、その温度の低さに思わず身震いしてしまう二人である。

「雪とか、白いのとか、好きなんだけど、寒いのはねえ . . . あら、霰<sup>あられ</sup>？」

現在時刻、十時四十五分。この刻まで、何とか小降り<sup>とき</sup>を維持していた粉雪は、何やら大

きさを増しつつ、水気が多い物質に変化して来た。一同、傘はなくとも帽子なりフードなりで辛うじて濡れずに済んではいるが . . .。

蒼葉は、パステルで下書きした上に水彩を施すべく、拾ったトレイにチューブを垂らしてみたり、筆をといてみたりしていたが、どうもしっくり行っていないようだった。そこへこの天からの配剤である。本来なら筆を止めそうなところだが、逆に喜々としているから侮れない。

「ね、小梅ちゃん、こうやって青とか白とか走らせてみて、そこにこの<sup>みぞれ</sup>霧、かな？ ま、空から降ってきたのをそのままなじませると、何か幻想的な感じに . . . どう？」

「わぁ . . . でも、普通ならフニャフニャになりそうだけど、この紙、平気なんですね」

「ま、雪仕様っていうか、雪景色描く用だから」

「で、極意はやはり臨場感ですか？」

「そうね。実際に体感した温度を絵に写すっていうか、空気を閉じ込めるっていうか」

小梅は、その上物の筆先を見つめる。水分が紙に広がるのが何となくわかるから不思議である。その広がりがあった瞬間、空気は貼り付く。それと同時に張り詰めた空気が紙面に<sup>みなぎ</sup>漲るのであった。

そんな空気を察したか、蟹股ながら忍び足で、筆の元の持ち主が現われた。K.K.のおじさんである。

「おう、これは画家のお嬢さん、この天気でご精が出ることで」

「あ、せ、先生、いつの間に？」

どうやら気付いていなかったのは、絵描きシスターズだけだった。この雪道をバイクでカタカタ来た訳だが、その音すら耳に入らない没頭ぶりだったのである。

「てっきり中止だとばかり思ってたら、皆がいたからさ。ほほお、白のし瀉、いや、そうでもない、か」

画にインパクトを受けたらしく、釘付けになるも、現実の干瀉も似たような色が散らばっているもんだから、言葉を失うしかない。しばらく、遠近を見比べながら唸っていた清だが、ふとあるものが目に留まる。

「ところで、その盛ってあるのは何だい？ お清めかい？」

「いえ、雪で筆をとくとまた違うんじゃないかと思って」

「ははあ、どうりで寒々した色が出てる訳だ。筆にとっちゃ寒稽古ってとこかな」

「あ、ごめんなさい。大事にしなきゃいけないのに」

「なんのなんの。春先には生え変わるさ、ハッハッハ」

小梅も釣られて笑っていたが、末尾が違っていた。「ハッ、クシュン！」

この間、他の四人は雪ダルマにかかりきり。炭やキャップで顔をアレンジしたり、ストラップバンド片で飾り付けを試みたり、三十代半ばの男女もすっかり童心に帰って、完全な球体に近づけるべく、そこかしこなでまわしている。小梅のクシャミでバケツがずれたが、ともかく完成。ここで、遅まきながらアラサーの二人がやって来た。

「じゃ、記念に撮りますか」

「そしたら、あっちの三人も呼ばなくちゃ。おーい！」

漂着物の中から這い出してきたようなダルマを真ん中にして、八人が並ぶ。最初の撮影係は千歳。次は十月の回同様、永代先生が買って出る。「今回は beautiful う、というよりは wonderful！かしらん」 雲は激しくなっているが、ドラマチックな写真を撮る上では、ここは我慢。

「ダルマさんも笑ってますからねー。皆さんもマネしてネ。ハイ！」

ワンダフルでスマイルフルな一枚がまた増える。蛇足ながら、そのスマイルのU字を形作っているのは、どっかの手提げ袋に付属していたと思しきプラスチックの取っ手である。とってもいいアイデア、と誰かさんが云ったかどうかは知らない。

### 降りつもる、降りしきる

集合時刻から一時間超が経っている。この天候からしてとっととお開きにしてもいいのだが、そうならないのが、この衆のいつものパターンである。

「ところで櫻姉、今日はどうしちゃったのよ。いつから雪女になったん？」

「てゆーか、ルフロンが来ちゃったからでしょ？」

「舞恵は雨と嵐担当。雪とかみぞれは連れてこないさ」

「ま、これで櫻さんのクリーンアップ降水ゼロ記録もストップね」

「来週は？ リベンジ？」

「今度の土曜の講座で希望を聞いてみてから、ってことにしてあるけど、間隔空けない方がいいでしょうね。三連休の中日だけど」

「また雪だったら？」

「そしたら干潟で雪玉転がしてゴミダルマでも作るワ。それを運び出せば片付く．．．んな訳ないか」

マダラ干潟は、雲が降り注ぐうちに半透明ながらも白さを取り戻しつつあった。突起物が隠れるくらいになれば、玉転がしは可能。櫻の作戦、ひよっとするとうまく行くかも知れない。だが、何につけ、晴れてもらうに超したことはない。小春日和となればなおのこと佳い。

暦の上では春を迎える。耐寒だろうが何だろうが、近づく次の季節の足音を聴きながらのクリーンアップは、きっと清々しいに違いない。凍てつく光景を前にしながらも、顔がほころぶリーダーである。

こちらはさすがに顔が強張ってきている。カモンのおじさんは、呂律るれつが回らないながらも、千歳にブログの相談を持ちかける。

「で、隅田君さ、おかげで、し、ひ、日々の由よし無し事を綴ってたら、それなりにたまってきた訳さ。ところが、こまつっあんがおふみさん経由で言うには、コメントだか感想だかをそろそろ受け付けるようにした方がいいんじゃないか、とか、緑のおばさんもさ、カモンとか言ってる割には、見た目、読み手が入りにくい感じねえ、とか．．．」

「ははあ、読者からいろいろとご要望が寄せられるようになったってことですね」

「本と違って、中味どうこうよりも機能とかデザインとかの話なもんだからさ。面食ら

っちまって」

「次の土曜日、いらっしゃいますよね？ その時にでも」

「よろひく頼みます」

「よろひ？」

「八八、寒い方がちゃんと発音できるってのはどういう塩梅だろな。えー、やしろ、しきふね．．．やっぱダメだぁな」

掃部先生に言わせると、しさよ先生になってしまうだろうか。その永代<sup>ひさよ</sup>さんは、元教え子と語らいの時を過ごしている。

「石島さん、もうすっかりお姉さんていうか。色っぽくなった、って言った方がいいかな？」

「へへ、そりゃ、あのお姉様方と接してれば。実の姉以上に刺激受けますからネ」

「なーんか全然、八キ八キしちゃってるし。ほんと、よくぞここまで成長したって感じ」

「先生は？ 最近はどうなんですか？ 六月クンの話だと、喜怒哀楽がどうとかって。相変わらず、泣かされてるとか？」

「アハ、今はね、すっかり健全になったのよ。荒れる子がいたら、まずはちゃんと話を聞くように、それを学校挙げて取り組んでみたの。そしたら、家庭とかその子の住む地域環境とかにも原因があることがわかって。で、ご近所の底力じゃないけど、とにかくお節介だろうが何だろうが、周りでその子に声かけしたり、家族みんなで参加しやすい行事をやってもらったり、あとは地域ぐるみで巡回したり地図作りしたりね。そしたらだんだん．．．」

「へえ、地図？」

「環境版はグリーンマップって言うんでしょ？ こっちは安全安心用。色で例えるならオレンジマップってところかな。一人で歩くと危なそうなところをチェックしたり、逆に子どもたちがのびのび遊べる場所を強調したり、ってね」

小梅が筆を振るってきたのは、この接点のためにあったようなものかも知れない。その観察眼、端的な描写力は素質のうちだが、蒼葉直伝の体感アプローチが加わった**となれば怖いものはない**。堂々と地域デビューできる筈である。何色のマップでも構わない。彼女の目や表現力がかつての学区で求められようとしているのである。

「そっかぁ、手伝ってもらえばいいんだ。なんか先生、うれし．．．」

「なぁんだ、先生のって喜怒哀楽ってゆーか、泣くネタが変わったってことじゃん？」

永代の目がうるうるしているのは、雲が目に入ったからとかの外的要因ではない。つまり、ちょっとしたお涙シーンな訳である。が、

「オイラ、よく怒られるけど．．．」

六月が割り込んでくるもんだから、穏やかではない。

「ホレ、またそうやってえ！」

「おぉコワ。鬼の堀之内ナノだ」

鬼だけドウチ？ いや、今はすでに外に居るから．．． とにかく鬼の件はまた別途。

先刻から耳をそばだてていた冬木と蒼葉が近づいてくる。三人は幾分見上げるような感

じになるが、永代は小梅の顔の上げ方が自分と同じくらいということにふと気付く。

「ここなら平坦かしら。石島さん、ちょっとアタシと並んでみてくれる？」

「あ、ハイ．．．」

「まあ、同じくらいじゃないでしょうか」

蒼葉の目測では、二人の背丈は一線。永代は小柄な方なので、中学二年の小梅に追いつかれてもおかしくはなかった。

「ここ一年、特に夏頃からまた伸び出して．．． エヘヘ」

快活さを取り戻したのに合わせるように、背も伸びたということになる。逆を言うと、それまでは伸長を妨げる事情があった、ということか。

「てことは、小学校の頃の背の順は？」

「小梅、小っちゃかったんです。前から二番とか三番とか。しかも弱虫だったから、今思うと、イジメに近いことされてたな。だから、高学年の頃は、あんましい思い出っていないの」

どの程度、<sup>すま</sup>荒んでいたかは推測しかねるが、永代も一緒に泣いていた、というくらいだから、いわゆる学級崩壊のような現象に見舞われていた可能性は高い。

「あん時はアタシも挫けちゃってね。力になれなくて、本当ゴメン．．．」

「いえいえ、そんな。当時はそれでも先生が頼り。いろいろとありがとうございました」

「え？ 初姉さんとか、支えてくれなかったの？」

蒼葉は専らインタビュアーである。

「お姉ちゃんはただ怖い存在でした。ピリピリしてて近寄りがたくって。だから、あと中学に入るまで我慢我慢、って感じ。でも、期待してた割にはそんなに変わらなかった、な．．．」

こうなってくると相槌は無用。とにかく話したいように話してもらえば、それでいい。

「塾は好きだったんです。で、そのおかげでここに来て、皆さんと出会って．．．」

いつしか、櫻、舞恵、千歳、清の四人も集まっていて、かつての弱虫さんを優しく囲んでいる。

「今では学校でも怖いも<sup>ん</sup>なし。クラスでも姉御って言われてます。ヘヘ」

いつしか曇は弱まり、再び軽やかな粉雪に戻っている。そして音を立てずに積もっていく。それは彼女の痛々しい過去を癒すように、そっと、そっと．．．

感極まった永代は、<sup>いくすじ</sup>幾度も涙を流しながら、ただただ頷く。千住姉妹はもらい泣き。ルフロンも目頭を押さえている。千歳はやはりこみ上げる何かを感じていたが、それは感情的なものよりも、観念的なものだった。「荒れるのは子どもたちだけじゃない。大人だって、社会だって。そんな心の荒れがゴミの投棄や散乱を招くんだとしたら．．．」

その延長で思い出すは、五月に櫻と話したこと。「自分さえよければの成れの果て、って櫻さん言ってたっけ」 初心忘るべからず、と肝に銘じる発起人であった。

学級が立ち直ったのは、地域の眼差しやつながりのおかげ。とすると、散乱・漂流・漂着ゴミについても、同じことが言えるのではなからうか。センターでの月例講座、クリーンアップ&グリーンマップは、順序はさておき、やはり大いに連係されるべきテーマであることを千歳は確信する。地域の関わりが何よりの抑制策になるであろうこと、その関わ

りを取り持つのがマップなら、関わりを実感するのが現地行動、つまり調査型クリーンアップ、ということ。櫻はグリーンマップを思いついた時からこれと同じような着想を得ていたが、As-Is レベルで良しとしていたため、それ以上の策は練っていなかった。先月の協議で To-Be の話が出て、ようやく積極策（または抑制策）につながる活用法を見出した段である。

来る講座では、環境行動の一手法としてのクリーンアップを話すつもりでいた櫻だが、翌月のマップ講座と関連付けて、地域行動の側面も打ち出すことを思い至る。仮に探訪部会のテーマとして「地域再発見」を標榜するのであれば、地域の良さを見つけるということ以上に、地域と自身の関わりを発見してもらうことに重きを置くのもいいだろう。その関わりこそが何よりの予防につながり得る。法人名の略称「イイカンケイ」、そのものである。永代と小梅の語らいは、今後の取り組みの主題を導くこととなった。この貢献度は決して小さくない。

まだ涙目ではあったが、千歳と熱い視線を交わし合っているのは、恋心というよりも、いつもの以心伝心が働いているため、である。声にはしなくとも、相通ずるものを感じる。これをいい関係と言わずして何と云おう。

清、冬木、舞恵は何やら立ち話をしている。かつての喫煙者、現役喫煙者、年改まってから禁煙を始めた女性という組合せなので、タバコ談議をしてもおかしくはない。目に見える煙は立っていないが、その是非を巡って結構な口論が展開されていて、今にも煙が立ちそうなほど。一方、他の六人は一斉に息を吐くと、そこに煙霧が立ち込めるが如く白々とした中にいるが、煙たい話は一切なし。話題は春の房総の旅について、である。

さ「卒業式後、春休みの平日ってなると、二十四日ってことになりますか」

む「オイラ、イベント列車に乗りたかったけど、工場が休みじゃ意味ないんだよね」

あ「なら、六月君は泊りがけにしたら？ 土曜日曜だったら乗れるんでしょ？」

む「二十二日に快速列車が。でも、全車指定だし、朝早いし．．． だいたい、一人で土日泊まり？」

ひ「お兄さんがいるじゃない？」

あ「っても、千兄さんは櫻姉さんと一緒だから」

千歳、櫻ともに、「八八．．．」 って泊まりで出かけるつもりだったのか？

さ「せっかくだから、東京湾の外側の海辺を見に行けたらなあってのはある。どう？」

ち「外湾ってこと？」

さ「確か富津岬を越えた辺りの最初の．．． 六月君、知ってる？」

む「東京近郊はだいたい頭に入ってるけど、近郊の先はちと怪しかったりする」

こ「上総湊とか浜金谷とかは家族で何年か前に行ったけど．．． そっち方面？」

上総湊とはまた渋いところに出かけたものである。湊のトーチャンが名前つながりで寄り道した、とも考えられるが、外湾に出やすい駅の一つであることも事実。

む「オイラ、調べてみる。その岬から南で、海の近くの駅だよね」

さ「よろしくネ。じゃあ二十四日を第一候補にして、メーリスでまた呼びかけるとしますか。小松さんにも来てほしいし」

春の内房、花と海．．． 想像するだけで暖かくなってくる。束の間ながら、寒さやら

ぐひとときを得る六人。ただ、千歳にとっては花粉症に悩まされる時節というのがお気の毒様である。

「マスク着用で、春の海辺か。冴えないなあ．．．」

漂着ゴミの調査ということであれば、その方が調査員ぼくていいとは思いますが、どうなんだろう。

マスクが呼び水になったか、調査員モードの千歳はいつものようにガサゴソやり出すと、マイカップならぬ「マイ枡」を取り出した。

「拾い物じゃございませんよ。ちょっとした縁起物です」

「て、隅田さん、雪見酒でもやるつもり？」 永代先生が軽くツッコミを入れると、

「そっかあ、こういう時は熱<sup>アツカン</sup>って手があったなあ」 もう一人の先生がトボけたことを云う。

「いえいえ、櫻さんがね、いいものを持って来てるはずなんで」

「あ、そうだ。忘れてた」

文花から頂戴した福豆を、そのやや大きめの枡に注ぐ。

「ま、これで鬼ごっこすればあったまるでしょ？ ネ、千歳さん？」

「？」

用具を提供したのに、再び追われる立場になってしまう千歳である。

「櫻姉、ズルイ！ 私も」

枡は一つしかないが、入れ物ならいくらでもある。蒼葉は雪を盛っていたトレイに今度は豆を載せ、参戦。小梅も撒く側に加わる。舞恵は半ば呆れつつも、

「ホラ、エド氏もよ。煙を出す人は撒かれてらっしゃい」

いつの間にやら、六月も豆を分けてもらっていて、すかさず担任にぶつける。

「鬼は外！ 堀之内！」

「やったなあ！」

「うへえ、これじゃいつもとおんなじだ」

何故か退治される方が退治する方を追っかける展開になる。だが、これは学級で繰り広げられているのと同じ光景のようである。

おじさん先生の方は、そんな鬼ごっこを悠然と見物していたが、舞恵と一言二言話していたら、不覚にも流れ豆の洗礼を受けてしまった。

「八八、カモンのおじさん、大丈夫？」

「ま、鬼みたいなところはあつかも知んねえけどよ、年寄りはいたわってもらわねえとな」

とか言いながら、雪球を一つ二つ作って早くも応戦。気が付けば、豆だ雪だで大騒ぎ。何となく紅白戦のような陣形になっているからまた可笑しい。こう見えても平和主義者のルフロンは、雪ダルマの陰に隠れて、愛想が良いようなそうでないような顔をしながら観戦している。

「たく、滑って転んでも知らんぞい。ねえダルマさん？ っとと」

豆が転がってた訳ではなさそうだが、思わず足を取られるルフロン嬢。ダルマさんが転んだら、それこそシャレにならない。

ゴミを散らかしてしまうのは、悪い鬼に憑かれているからだと考え、この豆まきで少しはお祓い、つまり予防になるやも知れぬ。

「いい運動になったし、スッキリしたワ。これでゴミも減ってくれば言うことなし！」

「櫻さんにはかないません」

「ホホホ。では皆さん、またセンターでお会いしましょう！」

十一時半を回り、本日の下見、いや節分会、いやいや合戦？ 何はともあれ、干潟での行事はこれにて終了。

永代先生は教え子達を連れ、駅方面に向かった。掃部先生は、再び雪面ライダーに変身して、颯爽と、いや<sup>そうそう</sup>と、ま、とにかく走り去って行った。

冬木は雪景色を記録するんだとかで何となく残っている。今日はここまで珍しく口数が少なかったが、ようやくいつもの調子で話しかけてきた。

「ところで今日、彼、宝木さんは？」

「あれでも夏男なんで、寒いのが苦手なんスよ。雪が降ったらパス、って予告してましたし」

「そっかあ、彼にちょっと話したいことがあったんだけど．．．」

「ま、この舞恵さんでよければ、承りますことよ。ハクンのマネージャー、いや、世話人て自認してますから」

来場時も一緒だったが、ここへ来てまた二人して．．． 千歳と千住姉妹は、ヤレヤレといった面持ちながら、気を遣って距離を置いてみる。

「はあ、ハクンを。それって、ハンティングみたいなもんスかね」

「ええ、彼にその気があれば、ですが」

春に向け、ちょっとした動きがまた一つ。チームを率いるだけのことあって、実は面倒見のいい人物だったりするのである。そんな冬木はさらなる申し入れを試みるべく歩み寄る。

「で、これは櫻さんにお尋ねなんです、今度の土曜日、取材を兼ねて講座に出させてもらえたら、と。構いませんか？」

「来月の情報誌ネタってことですね。載る前にチェックさせていただけるなら」

面倒見がいいのは、勿論自分自身も含めて、である。そうした抜け目なさは、櫻も重々承知しているので、断るには及ばない。だが、昨年来、ゴミにまつわる記事の比重が高くなっているような気がするが、それでいいのだろうか。

「春先からは、エンタメ系とかファッションとかも採り入れる予定なんで。ま、引き続き皆さんにはお世話になると思いますが」

少々含みのあるご発言だが、期待しないで(?)待つとしよう。ソーシャル某とどう結びつけるのか、その辺も見所である。

合戦<sup>かつせんば</sup>場に散りばめられた足跡を埋めるように、強めの雪が降りてくる。干潟も銀世界と化した時には、もう誰も居ない。

そして路線バスの車内には、車線を挟んだ先、干潟を見つけようと目を凝らす四人が居

る。漂着物も何もあったものではない。ただ、雪に霞む真っ白な川景色が広がるばかり。さっきまでその白の中にいたことがどうにも信じ難い。急に肌寒くなってきた。

「この雪じゃ豆まき行事もお預けかしらん？」

「何よ、ルフロン、豆まきしたかったの？ 言ってくれば．．．」

「ウンニャ、撒く方じゃなくて、キャッチする方をネ。ま、そうは言っても行員となると、協賛品を撒く側だから、まずありつけないんだけどお」

「ま、いいじゃない、今日はおとなしく、音楽会」

「おとなし？ それじゃ音楽会にならんさ」

「いったいどんな会になるのやら？」

かくして千住宅に新たなゲストが招かれ、昼食もそこそこに、午後は別棟<sup>はなれ</sup>でセッションが繰り広げられる。舞恵のハミングを櫻がピアノで拾う。千歳はそれを聴きながら、ドラム、ベース、ギターと頭の中で重ねてみる。音世界が拡がり、やがて波や潮の動きが感じられるようになってきた。<sup>sound effect</sup> S E で実際の音を入れるのも悪くなさそうだ。だが、何よりもピッタリ来るのはパーカッション。舞恵の意図は正にそこにある。

「どう？ ボサノヴァ調にできればなおいいなって」

「へ？ ボサボサ調？」

「櫻姉ったらあ。舞恵の自信作なんよ」

「ゴメンゴメン。で、タイトルは？」

「そうねえ、新作だからヌーヴォーってのを入れたいところけど、ボサノヴァでフランス語って変よね？」

外は雪だが、中では温暖な水辺が再現されている。水辺、川辺、いやその心は、

「ハクンとも相談するけど、やっぱ何とかビーチかな？」

「干潟もビーチのうち、だもんね。つまり higata@ のテーマ曲？ じゃ、歌も皆で？」

「それもアリだけど、メインはお二人さん。デュエットなさいな」

「ルフロン．．．」

舞恵はアーティストではあるが、なかなかの役者でもある。縁結び役という意味では、二人の方が謝意を示さなければならないところだが、彼女に言わせると、

「舞恵からの気持ち。二人のおかげでいいこといろいろあったんでネ」

そういうことなら、余計にしっかり歌のレッスンに励まねば。だが、詞がないことには仕方がない。とりあえずハミングしながらの音合わせとなる。

受け持つパートについて二人がどうこうやり出したので、自称アーティストさんは、アトリエをブラブラ。暗がりですてかけたままになっている油絵が何枚もあることにふと気付く。

「ひょえー、これって．．．」

蒼葉画伯の作品に目をパチクリ。その一枚は、かつての漂着静物画をモチーフに、油彩で描き起こしたものだ。そのインディゴのようなラピスラズリのような深い青に深く溜息。アーティストならではの感性が働いたか、画からはメッセージめいたものが聴こえてきて、止まない。同じ水辺でも、視点が違うと訴えるものも変わってくる。それにしても．．．。

舞恵はこの日、この一品を拝借し、静々と帰って行った。受けたメッセージに対する答えは、いずれ何らかの形で披露されることになる。

アトリエでは、引き続きピアノが清らかに流れていた。およそ半年前、櫻が八月病を患っていた頃から暖めてきた「新曲」である。

「何だか泣けてくるねえ」

「千さんだけに、センチになっちゃった？」

だからと云って、曲名がセンチな某になることはない。作曲者は当時を想って「晩夏」の二字を入れる一存だそう。詞の方もその線で練っている最中だと言う。冬から春にかけての時節に、夏から秋に得た情感を歌にするというのは難しそうではあるが、逆に想像力をかき立てられるので好都合。そして晩夏に深めたその想いを分かち合いたい人が今、傍にいる。これ以上ないシチュエーションで、櫻は新曲の完成度を高めていくこととなる。

雪は止んだが、二人の心にはどこか雪のような、純粹で軽やかな何か<sup>しづ</sup>が舞い、降り<sup>しづ</sup>頻っていた。

二月の巻 おまけ

蒼氓

(前編)

そして、九日。立春の週最後の日だと言うのに、雪もちらつく冬日である。外での実演となると、鍛錬や修養には適うかも知れないが、持続可能性という観点では疑問符が付く。が、今回の講座は幸い屋内。リアリティに欠けるきらいはあるが、寒さを気にせず、のびのびできる。ある意味、サスティナブルである。

漂流・漂着ゴミの実態やクリーンアップの意義といった概論に当たる部分は、先月の協議第一幕で触れてあったので、その続きとなる本講座では軽くおさらいする程度。櫻が特に力を入れたかったのは、そのHOW-TO つまり、具体的な実践に関して、である。

「何と言っても下見に次ぐ下見に尽きると思います。あとは大まかに段取りを決め、それを目に見える形、フローチャートでもいいですね。とにかく共有しやすく．．．」

発起人とリーダーとで考え合わせてきた要領を集成したような説明が続く。センターお勤めの三人を除く higata@のメンバーでは、八広と冬木が顔を出しているが、特に口を挟むでもなく、首を前後に振るか、メモを取るか、のどっちか。とにかくおとなしくしている。

何となく座学スタイルになっているので致し方ないのだが、全体的にやはり静か。今のところは座学生、いや受講者と呼ぶしかないだろう。その受講生の数、実に二十余名。あいにくの天気にしては、よく集まった方なので、まずはよしとせねばなるまい。

モノログから拾ってきたスクープ画像などを編集して、漂着物の取扱注意など、安全面の話題もちりばめたりしているが、現場にいないことにはどうにも臨場感が沸かない。会場のリアクションもいま一つと読んだ櫻は、

「じゃ、実際に拾って調べて、というのをやってみまじょうかね。どなたかケータイをお持ちの方はぜひデータ入力を」

と、動きを伴う講習に早々と切り替える。拾うからには、そこに現物がなければならぬが、ここは記録係 兼 アシスタントの腕の見せ所。隅田氏がちゃんと用意することになっていた。

「普段は拾うのが専門の彼ですが、今日は事もあろうに逆のことをしています。慣れないこととして腰を痛めないようにしてくださいね」

先月、見本として持ち込んだ元漂着ゴミは、今は原形をとどめたまま「再使用」されている。ゴミとして処分される前にこうして役に立つのなら、これらをゴミと言っては失礼だろう。会場からは笑い声が聞こえるが、それは櫻の常套トークに対してであって、腰を屈める千歳の不格好を笑うものでないのはわかっている。それでも、どうにも居たたまらない。捨てる側に回るのは到底ムリ、というのを図らずも認識するアシスタント氏である。

見本はあくまで見本。数的には不足感もある。だが、拾う、分ける、数える、入力する、という一連の動作を体験してもらう上では、必要十分な数だった。文花も八広も前に出てきて、ワイワイガヤガヤ。果たして座学の場合は模擬現場へと一変した。

清と緑が連れ立って現われた頃には、DUO の実演も済んでいて、今は市区によって異なる分別ルールの話になっている。

「．．．なので回収スポットがどこにあるかがわかっているれば、自治体のルールを超えて、自分で持ち運ぶというのもアリな訳です。皆さんご存じのショッピングセンターでは、近々廃プラの回収を新たに始め、油に戻すデモなんかも時々やる予定だとか。詳しくは、フリーマガジンの二月号に、あ、エドさん、よければご紹介を」

「そっか、そのマガジン？ 情報誌だけ。まだ見てなかったワ」

「とりあえずそこでの取り組みは、全社の何とかレポートに載るから、そっから認知されるだろう、みたいなことが出てたな」

「へえ、あの若い皆さんが調べたことが、そうやって広まって．．．」

「ただのゴミしろいじゃないってのはそういうことさ」

「ゴミしろいとはまた、面白いことおっしゃるわねえ」

「ヘン、余計なお世話だ」

後ろの男女が何やら騒々しいので、せっかくのPRタイムが宙ぶらりんになってしまった。

「ま、いいや。三月号もどうぞよろしく。今日のお話も載りま．．． あ、そうだ写真！」

ICレコーダーの方はぬかりなかったが、画像の方がうっかりだった**冬木である**。そんなこんなで後ほど、記録写真の受け渡しを含め、掲載記事の相談会が開かれることとなる。

「流域各所で同じような取り組みが為されていますが、手付かずのエリアもまだございます。実演を経て、コツをつかんでもらえれば、新しい会場を受け持つことも可能です。センター近隣でしたら、何かしらのサポートもできますし、ぜひ．．． で、その実演、つまり現場での講座を本当なら明日にでも、と思ったのですが」

窓の外を見遣れば、先週に続く週末雪。どこまで降り積もるかが決行/中止の境目となるが、大事をとって見合わせる、そんな早めの判断も現場力のうちと言えなくもない。表向きの見合わせ理由は、この降雪、されどもう一つ理由はある。クリーンアップ～グリー

ンマップにつながるテーマについて、部会との兼ね合いで再検討する必要が実は生じていたのである。ある意味、雪のおかげでそんな内情を明かさずに済んだ訳だが、雪に甘んじてばかりもいられない。その分しっかり詰めて、明快なコンセプトのもと、プログラムを提供しようではないか。センターの、そして新法人の、今後の取り組みをより<sup>ばんじやく</sup>磐石にするための試金石と考えればいい。

文花と軽く打ち合わせてから櫻はこう切り出す。

「クリーンアップ実践編については、寒さやらいでから、というのもありますので、ここは一つ三月二日、潮はやや高めですが、午前十時か午後一時の集合、を考えております。詳しくはまた追い追い．．．」

質疑応答などを含めてもこの日の講座は、さりと一時間半ほど。二日連続の講座ということであれば、それなりのボリュームになるのだが、間隔が空くことが決まった以上、これは単発プログラム。櫻としては不本意さもあったが、こうしたプロセスの中断もNPOならでは、である。

冬木はひとまずレコーダー起こしをするんだとかで、そのまま会議スペースにこもっている。緑は図書館へ。清は千歳の席で、Comeon ブログの機能強化に乗り出す。

「ははあ、そのコメントなんかも一覧で表示されるってか。これなら見落とすこともなさそうだ」

「念のため、怪しいのが来ないようにブロックしておきます。その方が確実に見ていただけるでしょう」

「ま、別に来る者は拒まずだけだよ。漂着大歓迎、だろ？」

「いや、やっぱりかに予防するか、でしょう」

干潟でもインターネットの世界でも、ゴミ対策は共通のようである。但し、ブロックと言っている限りは例の消波工事と次元としては変わらない。より遡った抑制策がスパムにも必要なのだ。

本日の受講者の何人かは、なおセンター内に残っているが、特に接客対応は要さない。という訳で、文花と櫻は円卓に居て、八広を加えた三人で話し合いを始めている。

「とりあえずね、講座を開くことに関しては理事会で決まってるからいいのよ。連続性を持たせるってのもごもつとも。ただ、ホラ、秋にお月見しながら話したでしょ。調査研究と情報提供を進めることで普及啓発、って件。仮に探訪部会と現場部会ってのをそのまま立てるとなると、どっちも調査研究色が強いから、何かバランス的にどうかなって。部会行事って点でもOKなんだけど、そこをね、もうちょっと詰めながら講座テーマを決められたら。それが一つ．．．」

と、これは事務局長らしいご見解である。

「もう一つ、あるってことですか？」

「まあ、も一つは私見もあるから、あとでカウンターの二人も交えてゆっくりネ。まずはそのバランスに関して」

すでに十六時近くになっているが、日が伸びてきたこともあって、長丁場を厭わない構えを見せる文花。ただ、雪は幾らか多めに、かつ重くなっているの、外はまだまだ明る

い、とは言えない状態。八広はそんな高密度な雪模様を見ながら、

「定款上、その三つの柱については明記するとしても、組み合わせとか優先順位までは書かないですよ。とにかく試行してみてから、でいいんじゃないですか？」

重い、でも軽やか、そんなご提議が突いて出る。

「でもね、そろそろデザインしとかなないと、って思って。NPOでも法人ともなれば模式図みたいのって要るでしょ。だから．．．」

「バランス重視ってことなら、調査研究も情報提供も一部会ずつになりますよね」

「じゃ、最初は探訪と現場は一緒、ってのはどうですか？」

「それだと部会の世話役が大変じゃない？」 文花は櫻に視線を送る。

「八八、また過剰何とか．．．。それはどうも、おそれいます」 本人もよくわかっている。

八「情報系って部会活動というよりは、事務局機能に近いから。いや待てよ、季刊誌？の編集チームを部会にすれば．．．」

さ「それなら、kanNaの新着情報もね」

ふ「取材がメインってことかしら？ となると、探訪も現場も同じよね」

ホワイトボードは近くにあるものの、いつものようにマーカーを走らせる気にならない。ボード同様、頭の中も真っ白？ 文花は窓の外がホワイトボードのようになっているのを見て、さらにトーンダウンしてしまった。

「掛け持ちが増えるのはいいような、そうでないような、ですね」 櫻もつい同調して嘆息モード。誰彼さんとの過ごし方に関わる話でもあるのがまた悩みどころである。

「ま、ここは一つ編集チームの二人にも来てもらいましょう」 見かねた八広はフットワーク良くカウンターに向かう。と、ちょうど一段落ついた清と千歳が呑気にやって来る。

「どしたい、おふみさん。顔が白いぜ」

「もともと色白、ですから．．．」

いつものなら、「あら」とか「ホホ」とかが付くのだが、それが無い。さすがのセンスも硬直せざるを得なくなる。不覚にも自分の顔が白くなってしまおうのだが、これを面白いと言ってはいけない。

「じゃあ、その雪合戦の前だか後だかに二人さんが思いついたテーマとやらをもういっぺんお聞かせ願うとしますか。おすみさん、どうぞ」

今日の午前中にも話をしたのだが、思っていた程、文花が乗ってこなかったもので、不可解に感じていた千歳である。その心を聞き出したいところだったが、こう来られては逆に従うしかない。

櫻が頷くのを確かめながら、千歳は思うところを語る。そして、文花が引き取る。

「そのお、地域が関わるってのをどう表現するか、なのよ。地域振興ならともかく、一応環境系なんでね、ひと工夫ほしいなって」

「地域と自身の関わりを見つめて、意識してもらおう、その連鎖で予防につなげる、その辺の概念はいいんですよね？」 千歳はまだ釈然としていない。

「ええ、もちろん。ただ、地域、関わり、ってなるとどうしても人つながりとか、交流要素とかがね．．．」

櫻は薄々感づいてはいたが、まだ口にはしない。文花と初めて顔を合わせた時、本人が

俯きながら話していたことが思い出される。

「人あっての環境、いろいろな関係あっての地域、それはわかってるつもり。私が言いたいのはね、『人』を前面に出すと、入りにくくなっちゃう人もいるんじゃないかってことなの。交流好きな人が寄って集まったの地域活動、ってそれでもいいんだろうけど、反面、本来の取り組みがおろそかになる？ そんな話も聞く。だからできるだけそうならないように、こっちは人選も含めて考えてきたつもり。僭越ではありますが．．．」

ここまでの積み上げや自負があるからこそ、言い切れることがある。higata@の面子にしたって、集まればワイワイとなるにはなるが、そのワイワイを楽しむのを前提に干潟に来る訳ではないのである。お互いのペースなり都合を尊重できているからこそ、顔を出す出さないでどうこう言い合うこともない。それぞれのスタンスで環境貢献する場、というのが共通認識になっている。交流主体ではないのである。

「事務局長のお話、わかります。定款には例の特定非営利活動の分野を選んで載せますけど、交流ってのは特にない。全分野共通の要素と言えなくもないですが、まずはその特定の活動ありき、そう言いたいんでしょうね。だから、交流を前面に出す必要はないし、割り切るところは割り切っていいと思います。同感ス」

「交流交流で気疲れしちゃ、何のための活動だかわからなくなっちゃいますもんね」

前職での経験からもっと突っ込んだ話をしても良さそうなところだが、櫻としてはこの一言でまずは十分。だが、経験談ということなら、この女性も同じ。再び文花が語り始める。

「交流好きな人達の中に、さぁこれからって人が入れるか。交流を求めてくる人なら問題はないでしょう。でも、そうじゃない人は？ 多分疎外感ていうか、それは違うって思うはず。人付き合いが苦手で、環境分野に入ってくる人もいるのよ。個人的な意見かも知れないけど、一人でもできるのが環境活動。つながれば確かに大きいけど、それは派生的なものじゃないか、ってね」

これまで黙って聞いていた清がここでゆっくりと話しかける。

「蒼茫って知ってるかい？ 名のない草でも、しっかり根を張って、<sup>とろとろ</sup>溜々と広がっていくことで力を増すってこと。人間も同じ。無名な市民が寄り添って支え合って、地域や社会を形成する。それには個々の黙々とした取り組みが第一。名誉とか勲章とかは要らない。しとり静かに、さ。な？」

「ありがと、センス。でもそのソウボウって、漢字は？」

清はマーカーを手に力強くしたためる。

「蒼茫、または蒼氓。こっちの民の字が入ってる方がしっくり来るかな。この蒼は、画家のお嬢さんの名前と同じ、だったよな」

「ええ、くさかんむり、です」

青葉でも碧葉でもなく、櫻の愛妹は蒼葉である。誇らしいやら羨ましいやら、櫻は軽く応答する。

「そんな氓、というか市民一人一人を応援する、そういうスタンスってことですか」 千歳も漸く文花の云わんとすることがわかってきた。初めて干潟に立った時のことが思い出される。一人ででも何とかしたい、その時はそう思っていた。それがいつしか結構な人数が関わるようになり、行政や企業への働きかけにもつながるようになっていく。これとい

ったお題目はなくとも、こうして続いているのは何故か。人どうしのつながりもあるが、各人が環境に寄せる思いがまずあって、その思いが逆に人をつないでいるから、ではないのか。はじめに人ありきだったら、こうはならなかったかも知れない。

「なんて言うか、ステップみたいのってあるのよ。それはおすみさんだっでご承知の通りでしょ。純粋に環境に対して何かしたいって人が少しずつ自分で関わりとかを見出していく、そんなイメージ、かしら」

「市民団体の中には、いかに会員や関係者との間で交流を促すかに力を注いでるところもありますけど、かえって持続しないというか。緊張感もなくなってきましたしね。だから、対人<sup>ヒト</sup>じゃなくて対環境ってことが明確になってるのはいいと思いま、スよ」

部会のバランスをどうするか、というのがまだ詰め切れていないが、持論を受け止めてもらえたことで、いつもの顔色に戻って来た文花である。だが、

「そうそう、文花さんと初めてお会いした時は、本当に箱入りな感じで、奥ゆかしかったですもんね。で、当時仰ってたのが、人と人よりもまずは人と環境、って」

てなことを櫻が言うもんだから、ちょっと冷や汗。

「まあね。でもここに来て、でもって皆さんと接するようになって、その両方が大事って思うようになった。だから余計ね、緩やかなのがいいなって。皆さんがイケイケで、交わるのが第一とかそんな感じだったら、ひいてたかも」

自身の成長過程がわかるからこそ、こうした発言も出るのだろう。文花の変化はここにいる四人もわかっているつもり。言葉の余韻に浸りつつ、まったりとしている。が、長くは続かない。

「文花さん、そう言う割にはよくちょっかい出して、人を翻弄してるじゃないですかあ。何か矛盾してるんですけど」

「元研究員ですからね。試すの好きなのよ。悪うございましたね。ホホ」

櫻がけしかけ、いつもの漫談が始まる。

「ま、人がつながるにはお節介がなくちゃな。おふみさんはその点バッチリ。シシ」

「だから、私のはあくまでさりげなく、ですってば。大事なそれはそう、ステディ感よ、ね？ お二人さん？」

「って急に振られても．．．」 千歳は当惑気味。

「とにかく、入りやすい表現って何かあるでしょ？ スローで着実な関わり方ってのをこう．．．」 楽しくもあり、もどかしくもあり、の文花。少々間が空くも、

「いい意味で緩やか、だから続く活動、てことスかね」 八広が継ぐと、

「スロー、緩やか大歓迎。あなたの環境計画、応援します。とかってどう？」 櫻がいつもの機転でズバツとまとめる。

主役はあくまで個人。自身のペースで現場へ行くなり探訪するなりして、環境や地域との関わりを見出す。そのプロセスを計画と言い表せば、ステディな感じも印象付けられる。そんな趣旨だそうなの。

「部会共通のテーマってことね。何かいいかも」

ホワイトボードに大書して、復唱する。すっかり満足げな事務局長である。かくして、探訪・現場は統合せずにそれぞれ試行、編集チームについては、会を重ねる中で緩やかに部会化していく、ということが決まる。

今後の取り組みの主題、そしてその伝え方が固まってきた。あとは、点を面に広げる、クリーンアップで言うなら、いつもの干潟以外のスポットへの展開、がある。今日の講座ではそのプランの一端が紹介された訳だが、拙速だった観はある。そう、あわててはいけない。先刻決まったようなテーマで以ってじっくりと、明快な動機とともに取り組んでもらうのが何よりである。

リセットの繰り返しはまだまだ続くだろう。そのためにはいかに気力を保つかがカギとなる。スローで緩やかはその極意とも言える。

ふ「じゃあ、あとは理事会でまた．．．って次回、いつだっけ？」

き「定例ってことにしてなかったんだな。でも、監事さんが来る日に合わせるとかって言ってなかったか？」

ふ「先月、ルフロン来なかったから、日程調整しそびれちゃって。総会の議案も作んなきゃいけないのに。どうしましょ？」

さ「今からだったら、二週間後でいいんじゃないですか？ ルフロン、その日は来ることになってるし」

と、この反省を受け、総会までの理事会日程と作業の段取りの両案が、この後、事務局長から発信されることになる。

#### (後編)

何かとグレード感ある持ち物が多い冬木は、最新式のポータブルPCを今日は持って来ていて、記録した音声を拾いながら、記事を打っていた。講座終了から一時間超が経過。大まかな記事が上がったところで、円卓にのこのこやって来る。

「えっと、隅田さん、写真の件ですが、今よろしいですか？」

「あ、これで見ますか？ それとも．．．」

メモリをどっちに挿し込むかが分かれ目。

「って、櫻さんが情報誌に載っちゃう、ってことですよ」

「まあ、ご本人次第でもありますが．．．」

「櫻さん、どう？」

「私の肖像権については、マネージャーに任せてありますから。何ちゃって」

その記録媒体を手にマネージャーは悩んでいる。ここで冬木に画像ファイルごと渡してしまってもいいものか。交換条件という訳ではないが、ここらで一つその情報誌の意義などを再度確認させてもらって、納得が行ったら渡す、そうしよう、と思った。

清は図書館へ、文花はカウンターでカタカタやっている。都合、円卓には四人。会談が再び始まる。

「で、榎戸さん、その読者層とか、反響とか、その辺を一度お伺いしたかったですけど、よければ教えてもらえませんか？」

「はあ、そう来ましたか」

こういう問いが来るのは織り込み済みではあったが、ちょっと面食らった恰好の冬木。だが、悪い気はしない。

「ま、大人のための、ってことで始めたんですけど、おかげで硬派な感じになってきた

もんで、ご年配とか、熱心な学生さんとか、あとは流域在住の会社員、そんな方々に多く読まれてるようですね。反響としてはまあまあなんですが、駅や街頭で配られてるのと比較すると、それほど盛り上がってるとも言えなくて」

「同じフリーマガジンでも、そこは性格が違う訳ですから。ターゲットにしっかり届いていけば、それでいいように思いますけど．．．」

「いえね、そこが無料配布ゆえの難しさなんですよ。レスポンスがあったとしても、それだけじゃ費用対効果みたいのがちょっとね。媒体の認知度を調べるだけじゃ物足りないし。どれだけ流域の役に立ってるか、それが指標化できればいいんだけど」

徐々に熱くなってきているのが自他共にわかる。千歳としては聞き役に徹した方がいいのは承知しているのだが、ことメディアの話となると思うところが多々あるので、そういう訳にも行かない。と、そうした空気を察してか、八広がひと捻り入れてきた。

「誰でも手にできる媒体ってのもクセモノで、あんまりそれが流行っちゃうと、持っている情報がステレオタイプになる恐れってありますよね。公共性が高いネタならまだしも、そうでもないようなのが感覚的に常識化してしまうのってコワイ気がします。その点、エリア限定、かつ一定の社会性がある情報誌だったら、それがご当地の力になる、って違いますか？」

「ええ、まあそれが狙いではあるんですが．．．」

煙をくゆらせてないと落ち着かないようで、誰に向かって喋ってるんだかわからないような態度になっている。それでもそこは一介の編輯者。然るべき所志は持ち合わせているものである。落ち着きを取り戻すように、その心を述べ始めた。

「隅田さん、宝木さんもそうでしょうけど、マスメディアに対する反骨心みたいのが僕にもあってね。特にどうかと思うのは、編集権だなんだを盾に情報操作みたいなことするケースかな。マスならマスの社会的責任みたいのってあるでしょ。どうもそれが曲解されて驕りにつながってる気がするんだ。だから、こっちはそういうことがないようにできるだけ現場に忠実に、小部数でもいいから、とにかく Social Responsibility に適う媒体ってね」

驕りとは言わないまでも、突っ走る傾向がある点では、冬木だって人のことは言えない。その辺りを指摘したい気もなくはなかったが、そんな気概の裏返しと考えれば許せなくもない。千歳は、これまでの冬木のお騒がせ、つまり、ある時はフライング、またある時は自己本位取材、はたまた．．．と一連の出来事を思い返しつつも、どこか内面的に通底するものを感じ、今は穏やかに耳を傾けている。

「まあ、現場もそうだし、higata@の皆さんからも。とにかく学ぶところが多々あって、自分なりに姿勢を正してきたつもりです。なんで、ここんとこ行き過ぎ！とかってないですよ」

カウンターに目を転じたら、図らずも文花と視線が合ってしまった。話がどこまで聞こえていたかは不明だが、首を何となく傾げているところを見ると、少なからず耳に入っていたようだ。だが、顔は怒っていない。冬木はホッと息を吐く。

「ところで、さっきの反骨の話ですけど、榎戸さんのブログってやっぱりそうした精神論みたいのがあって、あんな硬めな感じなんですか？」

「秋頃見た時は、グッズ紹介とか、それこそモノログ風で、アフィリエイト向きだなあ

って思ったけど、今は違うんで？」

「業界人ばい路線て言うか、ツボみたいのがあるんだよね。最初はその辺を狙ってたから、割とウケてたんだけど、情報誌を担当するようになってから、そんなんでいいのかって、気が変わってきた。本多さんとこもそうだけど、漂着～とか、咲く love～とかを見つけて、ちゃんとしたメッセージを発信してる人が流域にいるんだってことがわかってね。情報誌は情報誌で一石を投じるつもりでやってるけど、自分自身が発信源になるってのも試してみたくなったんだ。隅田さんが見たのは、きっと気が変わりだした頃くらいのじゃないかな」

咲く love の櫻さんは、途中まで話を聞いていたが、ジャーナリスト鼎談<sup>ていだん</sup>になってきたところで中座。とりあえず五人分のコーヒーを淹<sup>い</sup>れている最中である。

「でもって、漂着の現物見てたら、モノの運命ってのは果かないもんだ．．．そう思うようになって、無常かつ無情とでも言うか、三十路半ばの境地と言うべきか。最近は何のフローチャートも参考にしながら、ここをこう変えれば、もっと有意義な製品になるんじゃないかって、提言型が中心かな。今は単なるモノ紹介じゃないですよ」

鼎談というよりも、プロガー冬木のトークイベントのようになってきた。

「今月号のCSR記事と、オーバーラップするともありそうですね」

フローチャートの話が出たことで、千歳にはピンと来るものがあった。自分で掘り下げてもよかったのだが、ここは記事担当者自ら語ってもらうとしよう。

「スーパーの場合、売り手って意識が強い分、自社ブランド品を扱ってても作り手って意識は弱い。だから、モノ全体の流れとか、モノの末路とか、それを現物でしっかり示す必要があったんです。そういう意味で、先月のは上出来でした。CSRを担当してた時は、どっか空虚ってというか、パフォーマンスチックだなあとか思いながら、お相手してたんだけど、この間のは違ってた。市民と一緒に社会的責任を果たしていこうってのが感じられた。何かこう、つかえてたのが取れた、そんな気がしましたね」

「提言ベースで臨んだのが良かったのかも知れないですね。ま、こっちとしてはステイクホルダーとしての言い分を伝えただけですが」

「おかげで、今後の見通しとかもしっかり引き出せたし。あれを読んで、流域企業も捨てたもんじゃないな、って思ってもらえれば．．．」

「なーるほど」 千歳は大いに納得する。

櫻は文花にコーヒーを供しつつ、カウンターで愚図っていた。

「ねえ、文花さん、彼氏が同じ職場ってやっぱ歯がゆいってゆーか、何か考えちゃうんですけど」

「あら、そう？ 一緒に語り合えばいいのに」

「編集者としてこっちも思うところがあるから、かえって入りにくくて．．．」

「じゃ、私がお相手、いや、たまには相談に乗ってもらおうかしら」

「？」

十四日が近いだけに、どうやらその手の件らしいのだが．．．。

「さらに現場に足を運んでももらえれば言うことなかったんですが、あいにくの雪続きじ

やね。その三月二日に来てもらうってんでよければ、また声かけしますけど」

「あ、聞いてきますね」

千歳がカウンターに向かったところで、冬木は八広に相談話を持ちかける。

「宝木さん、彼女からその、何かいいお話とか聞いてませんか？」

「いい話？ これと言って特に。あ、でもバレンタインデーに『もしかすると朗報があるかも』とかって言ってたような」

「OK。じゃ、奥宮さんからまずお耳に入れてください」

「はあ．．．」

一方、カウンターでは

「今、女どうしのお話中なのよねえ。あとでネ、千歳さん」

「そりゃ失礼．．．」

「あ、これ持ってって。ちょっと冷めちゃったかも知れないけど」

浮かぬ顔でトレイを運ぶ千歳。待たされてる訳ではないのだが、すっかりウエーターである。

「一つお聞きしたいんですが、今手伝ってる市民メディアって、その張り合いとかがって点でどうですか？」

「載せてもらわないことには原稿料とか入りませんからね。励みにはなりますが、緊張感もあります。正に張り合いスね。ただ、バイトと掛け持ちですから、時間的な制約とか、いろいろと」

千歳はコーヒーを置きつつ、会話に加わる。

「まあ、市民メディアとて万能じゃないですからね。有望な人は自分のブログで発信すれば済むってんで転出しちゃうもんだから、逆にRSSで取り込み直したり。ステップアップの場として考えてもらってもいいんですけどね。放っておくと、そう空洞化現象、みたいなの」

「宝木さんはそんな有望な一人？」

「そうですね。だからいつでもブログ作るよって、進言はしてるんですけど」

「ま、その有用性ってのはわかるんですけど、何とも捉えどころがないってのと、ケータイで手軽にできちゃうってのが逆に引っかかって。やってみないことには何とも言えないスけど、情報消費者のターゲットにはなりたくないってのもありますね」

「そうだね。消費されるだけの情報ってのはヤだね。確かに」

「近年のヒットチャートじゃないですけど、一時的に盛り上がって、すぐしぼんじゃう、そういうのは御免だな、と」

フムフムと冬木はただ頷いている。どうやら見込んだ通り、ということらしい。

千歳としても、冬木の心意気は十分わかったので、櫻の肖像権がどうこうと意地悪を云う心算は毛頭ない。相応の志に<sup>のっ</sup>つた記事になることがわかれば、多言は要さないのである。

「予定稿はきっちりメーリスに流しますから」

「それはいいですね」

千歳はここでやっとマイカップに注いでもらったコーヒーを一口含む。

「あ、甘っ」

「え、隅田さんのブラックじゃなかったんすか？」

「櫻さんの仕業だ、うう」

加糖コーヒーは飲めない口ではなかったが、久々のドッキリネタにしてやられて、開いた口が塞がらない彼氏。そこへ彼女がすまし顔で問いかける。

「千歳さん、どう？」

「どう？って、あのねえ」

「別に飴を溶かして入れた訳じゃないんだし。ちょっとね、今日は甘味が足りないんじゃないか、って思ったから。フフ」

二口三口と試す。渋面ながらも、そのシロップの甘さで思わず頬が緩んでしまう千歳であった。

「ハハ、二人見てるといいですねえ。記事にはツーショットで出しますか？」

「いや、今回の講座はリーダーにスポットを当てていただいて」

「あら、千歳さん、いいんですの？ また櫻さんのファン、増えちゃうわよ」

「ちょっとした有名人の彼氏ってことで、こっちも誇らしいってもんですよ」

とまあ、ホットな議論にホットな掛け合いがなされてる訳だが、雪はあくまでクールに降り続く。とうに暗くなっておかしくない時間帯なのだが、その雪の白が反射するのか、窓の外は不思議な明るさを保っている。雪が弱まるまでは帰れない、というのもあるが、まだ明るいからいいや、というのもあって、冬木も八広も残っている。

ブログを見ながらコーヒブレイクというのは、当センターらしい活用法ではある。円卓のPCでは話題のEdy's 社会派ブログや、新装なったComeon ブログが展開され、即席コメントが交わされる。

「で、先生のブログは今日めでたく、一般的なスタイルに変えたところですよ。コメントとかあったら、ぜひ」

「これでやりとりできますかね」

「やってできなくはないと思いますけど……」

「では、早速」

講座はコンパクトだったが、その先が長かった。何だかんだで十七時半まで談議は続き、その一連が講座のような態となる、それでも誰かさんに言わせると、緩やかかつスローなんだそうだ。いやはや。

この日この後、higata@には、次回クリーンアップの予定、情報誌来月号の予定稿PDF、そしてComeon ブログの紹介が流れることになる。コメント機能については、南実の申し出による故、本来なら彼女が第一報を打つべきところ、開けてみた時はすでに遅し。

「ちっ、榎戸さんに先を越されるとは……」

ようやく論文の補整が終わり、安穩としていたところである。どうせなら仕上がる前に用意してほしかった、というのもあるが、Comeon ブログ管理人からの今回の案内を見た

上でコメントを入れ始めるのが筋だろう、と思う。すっかり憤慨モードになってしまった南実は、

「またしてもフライング？ 頭来た。私も打とっ！」

鬱憤を晴らすように、立て続けにコメントしちゃうお弟子さんなのであった。

## 二月の巻

### 耐寒と体感の間で

そんなことになってるとは知るべくもない掃部先生は、翌朝になってやっとブログを開けている。が、新着欄を見て、目が点。早々とコメントが、しかも何本も。

「そっか、小松のお嬢さん、書き上げたか。ま、俺の指導があったところで、どうこうなるもんでもねえだろし。しかしなあ．．．」

どことなく恨み節な一文が見受けられ、さすがの先生もたじろがざるを得ない。コメントスパムは除外できても、文章の調子を見分けてブロックするなんてのは不可能である。どう返事したらいいものが悩んでいる間に、空はすっかり晴れ上がる。雪解けのスピードも速まっていた。

十日の干潮は昼過ぎの予想。昨日の雪が午後早々になくなっていれば、クリーンアップは実施できた可能性がある。もともとこの日は空けてあった訳だから、何もしないよりは出かけた方がいい。千歳は最低限のグッズを持って、干潟に向かうことにした。

グランドコンディションはいいとは言えないが、思っていた程グジャグジャということもなく、脇道についても同じ。見た目は明らかな泥道なのだが、足を取られることもさほどなく、その適度なぬかるみが心地良いくらいである。

最高気温は十度。実に昨日の倍だとか。そのせいか、干潟一面にすでに雪はなく、奥まったところに若干の残雪を見るばかり。雪がないということはこれ即ち、

「ハハ、どうしたものか．．．」

となるのも無理はない状態。先週、下見というか予備調査はしてあるので、覚悟はできていたつもりだが、現物を目の当たりにすると、少なからず萎<sup>な</sup>えてしまうものである。

「一人静かに、か．．．」 清の格言を思い起こしつつ、千歳は気持ちを入れ直す。そして一步一步、慎重に斜面を下っていく。何はともあれ、お天気だし、小春日和といってもいいくらいである。返す返すも、順延にしてしまったことが惜しまれるが、今日のところは原点回帰と思えばいい。まずは目に付く大物から、いやたまにはペットボトルをポイポイやるのもいいだろう。いやいや、あの袋ゴミが邪魔だ．．． 着手してるんだかそうでないんだか、とにかく腰を屈めたその時である。後方から聞き覚えのある声がした。

「あわわ．．．」

「？」

振り返れば、辛うじて着地に成功した女性が一人立っている。

「千歳さん、こんにちはっ！」

「って、櫻さん、どうして？」

「それはこっちのセリフ。昨日、長丁場だったんだから、ゆっくり休んでればいいのに」

「本当は櫻さんとデートしたかったけど、お疲れだろうな、って遠慮してたんだ。ま、とりあえず、こっち来て正解」

「はいはい、そりゃどうも。それにしても、二月だったのに相変わらずね」

かくして四月以来となる「千と櫻のゴミ調べ」が、執り行われることとなる。一人より二人とはよく言ったもので、千歳は俄然ペースが良くなる。ひととおりの撮影を終えると、まずは障害物の除去から取り掛かる。何故かバスケットボール大のブイの如き一物が転がっていたが、とつと陸方向にシュート。あとはシート類から板材から、じゃまっけなのをテキパキと運び出す。櫻は、いつものようにポイポイ作戦を始めるが、干潟面に放るのは止め、河川事務所が切り拓いたルートの上方に放り上げている。この時期、ヨシが陸地を塞ぐこともないので、最初から陸揚げが可能なのである。千歳はその手際の良さに感心しつつも、手を止めることはしない。当地常設となったプラスチックカゴの中に、放り投げるのに向かない容器包装系なんかを次々と収容しては、陸地でガサガサ。十二月の回で文花が始めて、先月は蒼葉が引き継いだ。そして今回は千歳。プラカゴは見事にリユースされている。

体が温まってきたところで、小休止。干潟奥の残雪ももう判別つかなくなっている。

「まだ雪って残ってるんじゃないかって思ったのに．．．」

「午前中は潮が満ちてたはずだから、川の水で解けちゃったんだよ、きっと」

「そっかぁ。でももし満潮時に氷点下になったら、どうなっちゃうんだろ？」

「ゴミごと氷結？」

「そしたら、一気に運べちゃうかも」

「まさか。全部が全部氷漬けにはならないでしょ」

「ハハ、せっかく暖かくなったのに。何だか寒くなってきちゃった」

干潟 de デートというのはアリかも知れないが、さすがにこのタイミングで体を寄せ合っ  
て、なんてことはしない。

「一応、耐寒クリーンアップですもんね。我慢しなきゃ」

千歳としては、体感の方を取りたかったようではあるが、さ、続き続き！

雪に埋もれていたせいか、硬めのプラスチック片は何となく脆<sup>もろ</sup>くなっていて、容器包装  
プラに至っては、ゴワゴワである。二人が合流して三十分ほどが経ち、今は品評しながら  
カウント作業に入ったところ。言うまでもなく、ケータイを持っていないのはお互い様な  
ので、櫻が念のため用意してきたデータカードに手書きしていくことになる。思えば、五  
月はこのスタイルだった。

「全然出番がなかった訳じゃないけど、何か懐かしい感じ」

「櫻さんのいいものシリーズ第一弾だもんね」

「いいもの、か．．．あっ、そうだ思い出した！」

急遽、作業は中断。彼女は彼氏に小声で話しかける。

「蒼葉が言うには、ちゃんと千歳さんには伝えてあるからって、そのお．．．」

「あ、そうそう蒼葉さんから。ええ何でも十五日は空けとくように、って」

「十四日から十五日にかけて、ってことなんだけど、いいかなあ？」

「とりあえず、櫻さんにお任せします」

「よかった。ちなみに十四日は、ちょっと加算して二十万点記念日ってことにしてありますんで。いいもの、もあるし。フフ」

櫻の一日一千がまだまだ続いていたことが、千歳にはビックリだった。だが、それ以上のビックリがその日には仕組まれている。

「えっと、硬いプラスチックが十九、プラスチック・袋片が六十八、これが今日のワーストかぁ。小っちゃい袋が三十四、容器包装系が二十一、フタ・キャップは三十．．． あれ、インク切れ？」

再生プラ製のボールペンは、決して粗悪品ではないのだが、それなりに使い込んでいたらしく、インクの出が悪くなっていた。相方は、軍手、ゴミ袋、デジカメは持って来ているが、筆記具は不所持。

「漂着ボールペンって、なかったっけ？」

「書ければいいけど」

思わぬアクシデントには、思わぬ客人というのがつきもののようである。川伝いに現われたのは、この女性。

「あーら、お二人さん、今日も仲良くゴミ調べ？」

「あ、おば様。ちょうどよかった、何か書くものお持ちですか？」

「ええ、先月頂戴したのが．．．」

懐中時計ならぬ、懐中ボールペンが出てきたが、どこかで見覚えのある一品だったりする。

「緑さん、それってもしかして」

「貴方、持ってっていいって仰ったから。なかなか書き心地よくてよ」

「八八、そりゃよかった。いえ、昨日も見本品広げて見せたんですけど、ボールペンなかったから、あれ？って」

「これで続きが書けます。ありがとうございます」

「て、御礼云われてもねえ。ま、漂着物も捨てたもんじゃないってことね」

残る集計結果は、発泡スチロール片／二十九、ペットボトル／四十五、ビン／十九、吸殻／十六、漂着ライター／十二、木片／十一など。十に満たない細々した品目も多岐に亘り、何と先月よりも総数は多いことがわかってしまった。

「これであの枯れ枝をどかしたら、もっととんでもないことになる？」

「そうだね、残念ながらリセットとは行かなかったけど、今日はちょっとね」

仕分けされたゴミだけですでに手一杯。これらをとにかく袋詰めしないといけない訳だが、その前に再資源化系の処置が立ちはだかる。

「で、今日はどうなさるの？」

「洗って乾かしてって、冬場だとツライですよ。どうしょ．．．」

「じゃ、これを使いなさいな」

緑は、現場検証シーンとかで出てきそうなフィット感のあるゴム手袋を取り出す。

「素手じゃ拾えないものもいろいろあってね」

「現物を手にとって、それを作品にってことですか？」 千歳はわかったようなそうでないような聞き方をする。

「軍手だと感触が得にくいもんで。ま、仕事柄って言うか、しっかり描写しないといけないから。オホホ」

櫻が洗い場に向かったところで、緑は補足説明する。

「例えば、鳥の骨格とか、こないだなんかオトナのおモチャが落ちてたわ。素手じゃ何ぞましょ？」

「それをあの手袋で？」

「ホホ、内緒内緒」

オトナのおモチャっていったい？ モノによっちゃ、あらぬものが付着してたりするんじゃないのか。

「河原で何やってんだかって思ったけど、作品のインスピレーションとしては良かったワ。一人か二人か、はたまた・・・」

これ以上はやめておいた方が良さそうだ。千歳は絶句したまま、である。

「今日はハレ女の面目躍如。あとはお天道様に任せて、と」

「じゃあ、おばさんはまた探検に出るとするわね」

「ほんと、助かりました。あ、ボールペンも」

緑は半乾きのゴム手袋をはめると、引き続き川伝いに歩いて行った。今度は何を手に取りのおつもりだろうか。女流作家の後姿を見送りつつ、千歳は唸る。「作家さん自身がミステリー？ ムム」

食品トレイ数点、ペットボトル十数本、そして新たに取り扱いを始めた廃プラを三十枚前後、これらを二人して商業施設の回収スポットに持って行くことが決まる。ビンと缶については可燃や不燃ともども、ひとまず詰所脇に置き、別途、千歳が持ち帰る**ということにした**。二月のクリーンアップは、これにて終了？ いや、今回の調査結果を higata@ で共有しないことには終われない。

「ケータイ版 DUO のありがたさ、か」

「PC版だってあるじゃない？」

「ハハ、そうでした」

「立ち会っちゃあっかな・・・」

ティータイムも何もあったものではない。商業施設からはトンボ帰り。三時には送迎バスに揺られる二人である。ビンと缶は小春の陽射しを浴びていたまではよかったが、引き取り手が現われなくなれば事態は暗転。薄暗い中、寒風にさらされることになる。

やりとりが一段落した頃、文花から「Happy Valentine!」メールが発信された。櫻に相談した結果かどうかはいざ知らず、この一件には義理も本命もなく、バレンタインギフト用の代金をチャリティーに回す云々とのおことわりが述べられていた。higata@ にわざわざ書いてよこすものでもない気はするが、これは彼女なりに気を遣ったのこと。**かくして**業平は拍子抜け。弥生は嬉々となる。

バレンタインデー当夜、直接行動に出ている弥生にアドバンテージが付されそうだが、どうなんだろう？ 否、文花は南実以上に策士であることを忘れてはいけない。週末、何かが起こりそうな予感．．．。

二月の巻 おまけ

祝 × 4

そして、待ちに待った十六日。一昨夜から昨朝にかけて何かがあった割には、全く普段通りのアラサー二人は、表情とは裏腹に体の方はせかせかと動いている。あわただしいのは、昨日半日櫻が不在だったためではない。前夜に朗報が飛び込んだからである。

「お祝い用のデコレーションで、難しいわぁ」

片面使用済みの色紙に、おなじみのスマイルマークをプリントアウトしたものをあちこちに貼ってみるが、どうもピンと来ない櫻である。

「万国旗とかあれば違うのかな」

「国際交流の場だったらまだしも、内輪の会だから。ま、あとはデコレーター次第かな」

内輪向けイベントと言い切ってしまうと、公共施設だけに憚られるところ。キャンドルナイトの時と同様、扉には「開館中 \*ただし、祝賀会実施中」との貼り紙。これなら許される？

文花は取り急ぎ、得意の野菜スティックなどを作っているが、今日は持ち込み式なので、それほど周到ではない。会議スペースのテーブルをくっつけて、食器を並べれば大方OK。一輪挿しを配する余裕さえ見せる。

弥生&六月に続き、デコレーターさんも到着。開会三十分前である。

「ハハ、スマイル」

弥生は満更でもなさそうだが、舞恵は早速ダメ出し。

「ウーン、何かパツとしないなぁ。そのスマイル君さ、丸坊主だからつまんないんよ。舞恵みたいにクルクル髪でも描いてみたら？」

「そうか、ボサボサ」

「たく、そのセミロング、ボッサボサにしたるか」

この様子を見ていた六月は、さながら眼鏡をかけたスマイル君といったところだろうか。呆れながらも薄ら笑い。

祝賀会場には些かファンキーなスマイル君で満たされることになる。だが、まだ物足りない。

「やっぱチカチカするのとか欲しいかな」

「あ、そうそう、六月！」

少年が持ち込んだ紙袋の中には、クルクルというか、グルグル巻きの物体が入っていた。

「バイト先の倉庫に転がってたから、持ってきちゃった」

クリスマス時期にはエントランスなんかを煌かせていた。シーズンオフに入ったと思ったら、この通り起こされてしまった**次第**。LED式イルミネーションケーブルである。

「でかした！」

デコレーターは、すっかりスマイル顔。ホワイトボードに引っ掛け始める。肝心のボードメッセージがないが、そこはチカチカの具合を見ながら、書き足すことになる。

「へへ、舞恵はこいつを持って来たさ」

ルフロンも大小の紙袋を持っていた。突飛なことをしでかすのは、今も昔も変わらない。手荷物検査したっていいくらいである。とりあえず小さい方を覗き込んで櫻は一言。

「八八、そう来たか」

「くす玉とかないんでしょ？ 本人が来たら、皆でね。景気付け」

「って、これが差し入れ？」

「んな訳ないじゃん。あとでちゃんとハクンがね」

朗報の多寡にかかわらず、もともと予告はしてあったので、メンバーの集まりは頗る良<sup>すこぶ</sup>かった。気合いの情報誌の追い込みで、あいにく冬木は不参加だったが、蒼葉、南実、八広、そして第三の男、業平も相次いで現れる。higata@の十人中、九人がセンターに集結。櫻がボードに向かっての間、舞恵は景気付けグッズを銘々に配る。出迎えの準備は整った。そして、

十五時ちょうど、お祝い対象の本人が母、妹とともに晴れ晴れと参上。

「皆さん、こんにち．．． わぁ！」

「ウヒャー!!」

姉妹ともどもびっくり仰天。エントランスからカウンターにかけての数メートルの間に、十人十発のクラッカーが浴びせられたとあれば、普段はあまり動じない二人も大声を上げざるを得ない。ビックリくりくりさんの演出、大成功である。

「おめでとっ！ 初姉」

今日もくりくりなルフロンさんのご発声に続き、一同からは拍手喝采。

「まさか、こんな．．． あ、ありがとうございますっ！」

このお嬢さん、これまで不機嫌顔か笑顔かのどっちかしか見せなかった気がするが、この瞬間を以って新たな表情が解禁されることになる。

「あーあ、お姉ちゃん．．．」

妹が寄り添い、その周りに輪ができる。クラッカーに腰が引けていた母はセンターに入りかけたところでその様子を見守る。姉妹同様、涙目である。

時間が止まったようなスローモーションな時が流れる。が、それも束の間。

「何だ何だ、ここは今頃春節かいな。爆竹でも鳴らしたか？」

「あら、先生．．．」

京の潤んだ眼差しに清はイチコロ。

「八八、呑んでねえのに酔っちまうわな」

とか言いながら手土産はちゃっかり流域の地酒だったりする。そりゃ誰かしらは呑むだらうけど、

「センス、今日はどっちかというとお茶会よ。まあどうしてもってことなら、私、お相手しますけど」

「そっか、その手があったか。でも、これ辛口だぜ」

「私、こう見えても強いんですよ」

勤務時間中のところ、代表と事務局長がこうである。だが、そこは矢ノ倉事務局長。

「今週は定休日が祝日だったから、今日は私としては代休です」

「ヨシヨシ、じゃまあパアッとやるか」

二月十一日は固定だから致し方ないが、月曜定休の施設はハッピーマンデーで割を食うのが相場。代休を設けるか、それとも定休日を変更するか、どっちにしる法人として独立した暁には、そうした運営細則も自主的に決めていくことになる。先送りになっていた理事会だが、議題の方はこうした例にあるようにしっかり蓄えられ、追ってくる。ま、今日のところは英気を養っておくのが一番だろう。

初音を囲んでいた輪は何となく広がって、お祝いボードを取り囲む形になっている。ここで、板書した当人がその箇条書き一行目を読み上げる。

「では、改めまして、こちら。祝・石島初音さま、第一志望校、合格！ ですね」

「ハイ！ おかげ様で。第二・第三の方が怪しかったりしますが、第一が通ればこっちのもんです」

舞恵は手を叩きながら二言三言。

「何かいいなあ、青春真っ盛りってゆーか、合格決まって入学までの間とかって、やりたいこと一気にできるって感じしてさ」

「ええ、やりたいことはもちろんいろいろ。でも、それよりもここ数ヶ月の念願があって」

言い出しにくそうにしていたら、今度は南実が一言。

「念願？ 志望校合格じゃなくて？」

「こうやって、笑顔で皆さんとお会いする、ってことです。そのために頑張ってきたようなもんかも。だから今、それが叶ったのがすっごく嬉しくて、う．．．」

笑顔でと言っていた矢先にこの通り。これには男性諸氏も目頭を熱くせざるを得ない。

「二カ月前くらいでしたかね。櫻さん発、弥生さん経由で、親父の話、聞きました。それも励みになったかな」

「ああ、トーチャンの泣かせる話かあ」

その場に居なかったメンバーがチラホラいるので、しばし、その時のレビュー話で盛り上がる。が、

盛り上がってる場合ではなかった。

「いけね、これ出すの忘れてた。冷めちゃったかなあ．．．」

大ぶりのランチボックスを開けると辛うじて蒸気が出てきた。今となっては懐かしい、ニコニコ．．．パンケーキである。

「ニコニコじゃ済まないわねえ。十、十一．．．」

「とりあえず二十二枚、いつもより大きめに作ってきました」

一人二枚とは行かない計算だが、ニコニコものであることに変わりはない。

「そしたら、こっちも。蒼葉あ、Tu es prêt?」

「ハイハイ。Bon anniversaire ネ。小梅ちゃん！」

「え？」

景気付けに始まり、パンケーキが出てきて、お次はバースデーケーキである。

「一日遅れだけど、これはシスターズからのお祝い。お誕生日おめでとっ！」

「櫻さん、皆さん．．．」

箇条書き二つ目以降は、クイズでおなじみの紙隠しがしてあった。二行目はズバリ「祝・石島小梅さま Happy Birthday!」ボードの周りのチカチカが小梅の瞳に程よく反射していて、少女漫画のヒロインのよう。そんな目の輝きは涙で倍加することも考えられるが、とにかくキラキラしているうちがチャンス。先にセレモニーをやってしまおうということ、そのクリームたっぷりのホールケーキにはキャンドルが立てられ、火が点される。

キャンドルの本数と同じ人数が円卓を中心に集まっている。楽器があればバンドの生演奏つきでお誕生日ソングを歌ってもよかったのだが、ここはアカペラでお祝い。

六月は火を吹き消す小梅を見ながら、

「火は消えちゃったけど、オイラ的には萌えー．．． 何ちって」

シスターズが勢ぞろいした今だからこそ、逆に確信するものがある。彼の意中は一人に絞られていた。春一番はまだ吹かずとも、心の中はとっくに旋風状態<sup>つむじかぜ</sup>。人はこれを思春期と呼ぶ。

拍手の余韻が残る中、板書担当が声をかける。

「こういうお祝いは、続けて行っちゃいましょう。三つめは、プライベートのようなそうでないようなですが、蒼葉さん、どうぞ」

「え、これ私が外すの？」

両端のテープを剥がすと、今度は「祝・千住蒼葉さま 準大賞ご入選！」

「アハハ、櫻姉、ありがと」

サプライズネタの筈だったが、小梅 六月 弥生 業平といった連絡網で周知されていたようで、インパクトは弱め。当該作品を披露できればまた違ったのかも知れないが．．．

「ああ、そうそう持って来たよ。気が利くっしょ」

舞恵の怪しげ紙袋、そのでかい方には拝借していた蒼葉ブルーの佳品が忍ばせてあった。

「おお．．．」

一同、特に男性諸氏は揃って嘆声を漏らす。

「って、これとは違うんだよね」

「連作って考えれば、これも賞モノ、かな？」

「とにかくさ、アトリエで眠ってるのも持ち込んでさ、センターで個展なさいよ。舞恵、画伯の絵、好きよ」

「が、画伯でか。そりゃどうも。じゃ漂流・漂着をテーマに、ってことで」

センターの新たな活用策が導かれることになる。そんなこんなも含め、祝賀会らしく再び拍手が広がった。

「ルフロンさ、詞の方は？ 画からインスパイアされてどうこうって」

「ああ、この後、八クンと練れば完成。あとは曲だけど．．．」

ノリを求めるなら業平だが、しっとり聴かせる曲を、ということなら千歳か。ソングエンジニアの二人は、その絵を観ながらすでにディスカッションしている。この際、合作というのもいいかも知れない。

「で、四つめはお祝いって程じゃないかも知れないけど、この通り。祝・季刊誌、無事発行！でございます」

「ま、ブログで蓄積があったとはいえ、ここんとこのイベントラッシュなんかもよくまとまってたし。いいんじゃない」

文花は手を叩きながら、軽く贅辞を送る。

「ついでに申し添えますと、二月の定期クリーンアップの方も無事済みしましたこと、改めてご報告．．．」

言い終わらぬうちに、ブーイングが飛ぶ。

「それはね、抜け駆けっていうのよ。二人だけでズルイっ！て正直思った」

「そうよ、あたし達だって、楽しみにしてんだから」

蒼葉と弥生である。彼女らなりの社会科学的アプローチを以って、しっかり卒論はクリアした。今となってはデータの分析も何も、差し迫った用件はない。さらなる向学心ゆえの発言ともとれるが、からかい半分、憤懣半分、といったところだろう。

「まあああ、もとはお二人で始めた取り組みなんだから、たまにはいいじゃない、ねえ？」

文花が取り持ったところでどうにかなるもんでもない。

「二人の愛は、この蒼より出でて．．．」

「川の青、空の青よりも深し、か」

絵画を前に、なかなかの詩人ぶりを見せる妹分二人である。櫻は真っ青、否、真っ赤になって喝。

「もうっ！ さっさと移動！」

円卓に丸いケーキがいくつも並ぶというのも悪くはなかったが、お茶会会場はあくまで会議スペースである。珈琲は人数限定ながら、お茶の方はポットサービススタイルでいくらかでも。とにかく準備は整っている。

パンケーキが冷めてしまっはいけないので、挨拶は至って手短。

「皆さん、いつもありがとうございます。で、この度はいろいろとおめでとうございます、です。とにかく乾杯！」

まだ呑んでいないのだが、文花はすっかりご機嫌である。仕切り役がこの調子なので、あとはご自由にご歓談．．とはなら**なかった。始まったのは独占会見である。**

「舞恵としては試験の出来が気になる訳さ。特に英語、どだった？」

「ええ、自分で喋る訓練した甲斐あって、聞き取るのも楽でした。ヒアリングはバッチリ。訛<sup>オマ</sup>ってなかったけど。へへ」

「Oh-oh, Good grief！」

「え？」

「ヤレヤレ、とか、あきれた、って意味よ。悪かったわね、ブロークンで」

「感謝してます。Great Teacher Okumiya さん」

略すと、どっかの破天荒教師になりそうだが、ま、いいか。

「小論文ってあったの？」

こういう質問をするのは、最近まで論文に追われてた女性しかいない。

「ええ、人間環境学に関係してか、お題の一つにボランティア論があったんで、それで。自分で実際にやってみて思ったことを率直に、あとは弥生さんとやりとりした中で感じたこととか．．．」

社会奉仕という観念だと、きっかけにはなるが自発性に欠ける。ボランティアは文字通り自発性が求められるが、その自発の根源にあるものが利己か利他かで分かれる可能性がある。自己満足や功名心と表裏一体な面があるのは織り込み済み。だが、そういうのが見え隠れしないボランティア活動を求める人もいる。それをより明確に定義するとしたら？

「で、これからは課題解決型市民によるソリューション行動が欠かせないのではないか、といったまとめ．．． ちと大げさでしたかね？」

弥生も同じようなことをぶち上げて、一大宣言してしまったのは記憶に新しい。だが、ケータイメール程度でそこまで省察が及ぶものなのか。いや、現場体験から導かれる実学の力が大きかったことは言うまでもない。そして何より干潟に集う人達が、当の課題解決型市民（根底にあるのは蒼氓の精神）だからこそ実感を以って書き得たのである。

あまりに立派な御説だったので、掃部先生も地酒そっちのけで割って入る。

「いやぁ大したもんだ。親父さんにも聞かせてやりてえや。役所ってのは課題解決どころか、時に課題を増やしちまうからな」

「でもセンセ、役所がしっかりし過ぎちゃうと、市民の出番がなくなってしまうんじゃ」

「ま、何事も程々ってことですな。ワッハッハ」

お酒も程々に、と文花が返したかどうかはいざ知らず、である。

会見はまだまだ続く。

「とすると、初音嬢としてはどんなソリューションをお考えで？」

業平が起業家らしいことを訊く。

「マッピングとか、流域予報とか、何かこう分析系に基づいたお役立ちネタを。あ、クリーンアップの調査結果もほしいです」

「そしたら、こないだの分も合わせた集計表、送りますワ。アドレスは？」

こうなると、かねてからのお約束を思い出さない訳にはいかない。

「そうだ、メーリングリスト！ 入れてください」

「おお、そうでした。では、担当の隅田クン、よろしく」

円卓には再びPCが戻る。千歳はブラウザで管理画面を開くと、初音にアドレスの入力を促す。

「ケータイ用じゃなくてPC用ですよ。だったら、ohatsu@．．．と」

「え？ 初姉さん。おはつって、あだ名？」

「何か変スか？」

「おふみ、おすみと同じシリーズだなあって思ってさ」

higata@への仲間入りを果たしつつあった初姉だが、それを祝す向きばかりではないこと

を知る。卓の脇にはいつしか小梅が立っていて、

「お姉ちゃんいいなあ、ってゆーか、小梅、仲間はずれみたいな感じ．．．」

実に淋しそうにしている。まさかメーリスが姉妹を分かつことになってしまうとは。管理人としてはそれは不本意というものなので、一つ策を打って出る。

「小梅さま、自宅PCは何台？」

「二台あります。でも、お姉ちゃん専用が一台、小梅のは．．．」

三人共通のデスクトップがあるらしい。それでもアカウントは分けてあるようなので、メールの設定は大丈夫。あとはサーバ保存日数を間違えなければ、共有可能である。

「じゃ今から姉妹共通のアドレスを作ります。この通り設定すれば、どっちも受信できるし、どっちからも発信できるよ」

「今から、ってのがスゴイし」

「さすが、千兄！」

十代の女性二人からこのように激賞されるのは何とも言えない気分である。テレを隠すように、設定メモをちょちょっと直してプリントアウト。その間、姉妹はアドレスを決める。

「ははあ、sisters@って．．．そのままじゃん！」

「そりゃ、仲良し姉妹だもん。ね、小梅？」

「じゃあ、自己紹介メールとか、第一報は姉妹で一緒になってことで、よろしくね」

会場のスマイルマークが奏功したか、いやいや、初音はとうに表情の作り方を会得している。そして何かを伝える時は、表情を伴わせることで、より力強さが増すことも体得済み。姉は実にイイ笑顔で妹に優しく語りかける。

「小梅、今までほんとゴメン。ツライ思いさせちゃって．．．」

仲良し姉妹云々のくだりですでに半泣きになっていた小梅は返す言葉もなく、ただ頻りに頷くばかり。千歳も同じように首をタテに振ってみる。記念すべき場面に立ち会えたことが何よりも嬉しい。sisters と打つ手が震えて仕方ない。

と、いつしか Sisters が増えていて、何やら騒々しい。

「いやあ、千住姉妹もイイ味出してっけど、石島姉妹もいいねえ。泣かせるワ」 ルフロンが口火を切る。

「櫻姉も見習ったら？」 蒼葉はまだ姉に絡んでいる。

「ま、とにかくめでたいめでたい。ハハ．．．」

櫻はパースデイケーキのホイップを付けたまま、おどけてみせる。

「晴れて higata@に入ったことだし、社会勉強から何から。天気もかな。でもって、家族も友達も、とにかくいろんな意味で環境を学んでいこうと思いますっ！」

またしても結構なお話が出るも、

「でもさ、初姉。これからはやっぱ恋でしょ、恋」

「ルフロンたら何言ってんの。初姉のことなんだから、ちゃんと彼氏．．．いるでしょ？」

櫻が妙なことを言うもんだから、千歳は思わず息を呑む。大いに気になるころではあるが．．．

「お姉ちゃん、学校ではハード系でモテてるらしいんだけど、怖くて近寄れない男子が多いのも事実だそうで。へへ」

姉の顔色を窺うことなく、妹は堂々と言っている。この小梅情報に一同納得も、ついついニヤリ。想像に難くない逸話である。

「なーに、これからこれから。higata ブラザーズ見て学習したし。もっとステキな人見つけちゃうんだ」

初音の社会勉強の範疇は広がった。誰とどう比較したのかは不明だが、本日ここにいる三人の兄さんが含まれていることは確実。

「ま、恋の悩みがあったら、舞恵姉さんにネ。パンケーキLサイズで相談のったげるし」

「あーら、ルフロンがお悩み相談？ 悩んだ経験があるようには見えないんですけど？」

「櫻姉と違って、こっちはアップダウンが激しかったんざんす。ペー」

「あーあ、また始まった（Good grief?）」

小梅はお手上げ、千歳は沈黙。初音は大笑いである。泣いたり笑ったりでおいそがしいが、外は彼女の泣き笑いに関係なくずっといいお天気。自然とスマイルも広がる。

### 魔女の筒条書き

離れたところで様子を見ていたのは弥生と京。メイン会場では、清と南実が問答してたり、それを肴に文花が一人で酌をしてたり。業平、六月、八広はパンケーキを頬張りながら、よもやま話。そろそろ中押しというか、何か一席入りそうな時間帯ではあるが...

十六時近く。一応開館中のセンターに客が尋ねてきた。ここは接客係の出る幕ながら、

「おっ、来ましたね」

ひょっこり顔を出した初老の男性に対応したのはルフロンである。

「やあ、奥様。久しぶり」

「奥様？」

祝賀会場は俄かに騒然。あの舞恵さんを奥様と呼ぶあたり只者ではない。千歳はどこかで見覚えがあるようなないようなのだが、果たして何者なんだろう。

「皆さん、ご紹介しますワ。監事筆頭候補、入船寿（いりふね・ひさし）さんでございます」

同年代と見受けや、すかさずカモンのおじさんがチャチャを入れる。

「し、しさし、さんかい」

「寿と書いて、ひ・さ・し、です。生粋の江戸っ子ですが、掃部先生と違って、ちゃんと発音できますから」

「そいつは、ひつれいしやした」

「？」

事前に関係人物情報を得ていたらしく、お互いを紹介し合うのにそれほど時間はかからなかった。千歳のこと寿氏はちゃんと憶えていて、

「ああ、隅田さん。その節はどうも」

「いやはやまさか、あの時の方だったとは。洒落じゃないですけど、本当にひさしぶりですね」

「もうすぐ退職って時に、善意ある方に接することができて、何よりでした」

「あの日はね、入口の入船、奥には奥宮、のパターンだったんよ。いい時にご来店くだ

さって」

「奥には奥宮．．．そっか、それで奥様かぁ！」

千歳はえらくウケているが、他の面々はその日の出来事がいま一つつかめていないので、疑問符が宙を舞っているような状態。八広の爆走、櫻を襲ったアクシデント、縁結び、この際まとめて披露した方が良さそうだ。

祝賀会に打ってつけの一席はこうして仕立てられ、否応なく盛り上がることになる。が、そんな奇遇だけで監事に推したり、逆に名乗り出たりするものだろうか。実はこんなエピソードもあってのことだったのである。

「で、娘が子ども連れて十月のクリーンアップに出かけたんですがね、その子、あぁボクにとっちゃ孫ですが、何でも転んじまったそうで。でも、優しいお姉さんとお兄さんが助けてくれて、って聞きました。他にもその日あった話ってのが良くてね。奥様はその場に居なかったから詳しいことはわからなくて云うんだけど、とにかくその干潟の人達とNPO法人の件が繋がってる、ってのはわかったんで．．．」

「そのお姉さんとお兄さんて、もしかして」

「初姉と千兄だよ、きっと」

本人達を差し置いて、櫻と小梅がタネ明かししてしまうのであった。ま、何はともあれ、あのハプニングは注射器を発見するためだけに起こった訳ではない、ということがこれで明らかになる。

「娘や孫とはその後、そっちの干潟に時々行ってたんです。下流の方だったから、これまでは皆さんとはお会いできませんでしたがね。今度は皆さんとこ行きますよ」

「ね、待った甲斐、あったっしょ？」

「さっすが奥様！」 文花は絶賛するも、

「魔女だけのことはある」 櫻は毎度この調子。

どうやら雨も嵐も、その魅力ならぬ魔力によって連れてこられてくるようだ。

「そういうのは、気象予報士の担当外、だと思う．．．」

初音の言い分、ごもつともである。

棒状のものを持たせると、通常はつい彼氏を叩いちゃったりするが、魔女ともなれば然るべき使い方がある。クルクルやれば何かが起こる？ 今はマーカ-を手に行している魔女さんは、

「へへ、まだ早いけど、ほぼ決まりネ」

電飾を外し、会場に運び込まれたホワイトボード。その前に立つや、サラサラと走らせる。五行目には「祝・監事決定！ パチパチ」と書き足された。

奥様の走り書きに気を良くしたか、寿氏は監事就任にあたっての前振りのような講話を始める。アルコールが入っても従容としたもの。さすがである。

「巷じゃ2007年問題だとか言って、定年退職者を地域でどう迎え入れるべきか、なんて話も出てましたよね。先生はどう思われます？」

「まぁ、余計なお世話つつうか。シマを持って余すくらいなら、しっかりお役に立ってもらおうてのはわかるけど、そっとしておくのが一番じゃねえかな」

「かと思えば、NPO法人作るんだとか何とか、旗を揚げたがるのも出てくる。何かチグハグな感じがしてね」

こういう話になると黙ってられない論客が居る。若手先鋒と言えば、勿論この人。

「いわゆる団塊の皆さんが何かやろうとする時って、必ずと云っていい程『立ち上げる』って言い方しますよね。すでに先行例があったとしても目を向けない。自分達がやらなきゃってのが前面なんスよね。チグハグなのはそれも一因じゃないでしょうかね」

「立ち上げる、か。何か今まで倒れてたみたいで失礼ね。確かに」

程々に酔いは回っているが、文花は今のところ正気。

「他の退職者連中には、いますよ。立ち上げどうこうとかやってた輩が。ま、第二の人生、地域なり何なりで頑張ろうってのはわかるけど、それじゃ勤めてた頃と行動原理が同じだろって。ボクはそういうのとは一線を画したかった。出しゃばらず、されどできることは力を尽くす、だから人材バンクの話はありがたかったなあ。市民社会への側面支援、これだ！ってね」

初音が小論文で一説投じたところと相通じるものがある。それは己を利するよりも他者を利するの精神論。こういう人物ならまずは安心、いやそれ以上か。

「オレがオレが、みたいな人が入ってくると面倒でしょ。人の出入りって言うか関わり方なんかもしっかり監査させていただくつもりですから。ひとつ、よろしく」

監事殿は浅めの会釈。対するご一同は深々と頭を下げる。

「そうそう、法人の口座の件なんですけど、ここはやはり入船さんにご相談するのが早道ですかね」

「法人用ってのは何かとお手間を煩わせたりしますから。当行をご用命いただけるんでしたら喜んで開設等、お手伝い差し上げますが」

「よかったあ。ちなみに法人名は．．．」

事務局長は、ここぞの達筆で前半九文字、後半八文字の長々しい名称をボードに記す。

「ああ、金融業界ってのは融の字が付く割には融通利かないもんでして、特定非営利活動法人の略称ってまだ用意してないんじゃ．．． とにかく貴団体名がしっかり表示なり印字なりされるよう合わせて手続きしますよ」

そんなこんなの細かい話はまた追い追い。本来なら法人理事&運営委員用のメーリングリストでもあれば、より円滑に進められそうなところ。ネックとなっているのは、おじさんブロガーである。

「んまあ、監事さんも決まることだし、俺が何とかすりゃいいだけってことなら。緑のおばさんもEメールやってるつうしな」

と来れば、千は急げである。

「じゃ、清さん、設定しましょう。手引書もすぐ出せますし」

かくしてComeonシリーズ第二弾、comeon/に次ぐ、comeon@がデビューすることになる。本日のお祝いネタに加えても良さそうな一大事ではあったが、祝う気になれない女性が一人いた。

「なあんだ、せっかくコメント機能が付いたと思ったら」

「いやあ、コメント返してくのも何つうかまどろこしいっっちゃうか。まあ、こまつあんとは直接やりとりしたいな、俺は」

「先生 . . . 」

グッと来た南実だったが、すぐさま切り返す。

「わかりました。退屈しないようにマメにメールしますから、覚悟しといてくださいね」  
どんなキャッチボールが交わされることになるのか、お互い今から楽しみである。

顔見せ程度のつもりが、何となく長居してしまった。

「では、また来週お目にかかります。ごきげんよう」

入口の入船さんは、出入口へ向かう。行員時代の名残か、そのスツとした去り方はなかなかのインパクトがあった。どこかのおじさんの蟹股歩きも強烈ではあるが . . .

まだまだ明るいので、宴も易々とは終わらない。メンバーは思い思いの時を過ごす。

[ 魔女 vs 小悪魔 ]

準大賞紹介の際、これといったインタビューをしそびれてしまったものだから、副賞の話がすっ飛んでいた。櫻としては好都合だったが、舞恵は思い出したように食い下がる。

「へえ、姉様と兄様にディナー & ご宿泊をプレゼントってか。やるなあ、画伯」

「自分の分はちゃんととってあって、教室を開く時の投資に回すとか何とか」

「フーン、でも舞恵が気になんのは、そのご宿泊の方かなあ」

野菜スティックを手に小さくクルクル。これは秘め事を聞き出す時のプチ魔法。櫻はつい乗せられてしまうも、時すでに遅し。

「ナヌ？ 曲かけて横になってたら寝ちゃってた、だあ？」

「シーッ！」

しばしの沈黙の後、魔女さんが溜息まじりに問うてみる。

「咲く love とか言ってる割にはどうなってんのぉ？」

「私が何か仕掛けると、千歳さん倒れちゃうから。でもね、あんな感じの豪華ディナーって二人では初めてだったから、それだけでまず満足。で、デザートでチョコレートケーキが出てきて、すっかり甘い感じになっちゃって、へへ。だから、お泊まりはオマケなの」

小悪魔アプローチを封印したとは到底思えないのだが、聞いてどうなるものでもない。舞恵は手にしていたスティックを口に放り込む。

「そっかそっか、多様でいいんだもんね。愛の形も人それぞれ」

「あとは、春になってからのお楽しみ」

「て、もう立春過ぎてるしい」

持ち込みワインのせいだが、少々絡みがち。だが、至って爽やかである。

「そんで、そのカラオケデータ、今日はないの？」

千歳からもらったCDを櫻は常時持ち歩いている。媒体があれば、あとは装置。十月のクリーンアップで活躍したアンプスピーカーとPCをラインでつないでみる。程なく会場にはBGMが流れ始めた。メンバーにはおなじみ『届けたい . . . 』である。

「あ、ルフロン、まだ聴いてなかったわよね」

CDには練習済みの五曲に加え、ボーナストラックだとかで、ルフロンと櫻の新曲のデ

モ version が入っていた。櫻は持ち歌をスキップして六曲目をダブルクリックする。

「ハハ、こんな感じになるんだ。ボサノヴァチックでいいわぁ」

今のところ小品だが、緩やかな波を連想させて実に心地良い。聴いてりゃつい寝入ってしまうのも無理はなからう。

[おはつ&ハチ]

「へえ、あれルフロンさん作曲、で、編曲が千兄さん？」

「詞はまだ途中なんだな」

「あのままとりあえずお店で流したい、かも」

「だって、ヒーリング系とかイージーリスニング専門じゃ・・・」

「野菜とかと同じスよ。地元ミュージシャンの旬モノを流さなきゃ、ね」

とか話してたら、音合わせ会の話題になり、それならぜひ、となる。週末名物ニコニコパンケーキが再開されるのはしばらく先になりそうである。

[トライアングル]

CDはランダムモードでかかっているの、何が飛び出すかわからない。弥生担当のハッピーな一曲が今は流れているのだが、それが裏目に出たか、トライアングルお三方が何やらもめている。

「何かとウワサは絶えないけど、私、これでもステディ路線よ」

「チョコとか渡してないでしょ？ あたしならちゃんと。ねえ、Goさん？」

「それは得意の弥生流ソリューションでしょ。何でもズバッとやりゃいいってもんでもないワ」

正直なところ、ひょっとしてひょっとすると、という期待が高まっていた業平は文花の思いがけない肩透かしバレンタインに、かえってドキドキ感を募らせていた。弥生のアタックが実を結ばなかったのは、そんな大人の女の策が的中したため。駆け引きが高じれば三角形も安定感を欠いてくる。

いつかはこうなるとわかってはいたが、いざ本番を迎えると、全く手の打ちようがない。ビジネスモデルとはてんで勝手が違うのである。

「そりゃ焦っちゃダメなのはわかってるけど、この恋NGだったら、また引きこもりになっちゃうもん。やっぱ譲れない！」

「なーに、若いんだから大丈夫よ。弥生嬢ならすぐにいい人見つかるって」

地酒が利いてきたか、やたら陽気かつ攻撃的な文花である。業平は思う。そう言えば、聖しこの夜の時も笑い上戸が過ぎて大変だったっけか。そんなところがまたいいんだけど・・・。

ポーッとなっている場合ではない。今まさにこの時をどう乗り切るか、ある意味これも課題解決型市民の宿命である。

「てゆーか、Goさんがハッキリしないからダメなんじゃん！」

「いやぁ、どっちもいいなあって・・・」

ドラマだと張り手を食らいそうな展開だが、元来淑やかなお嬢二人はそこまでは熱くない。

「ま、今日は祝賀会デーなんだし。ひとまず休戦ネ」

「当面は良きライバルってことで」

業平はへなへなになりながら、地酒の残りをグイ。途端にへ口へ口になっている。と、

「おや？ また新曲？」

切ない曲が流れてきて、今度はそのまましんみり。彼のこういうところが女心をくすぐる、らしい。

[ ブロガー 管理人 コメンター ]

晩夏の思いが込められたその曲がかかる中である。その作曲者に何らかの動機を与えた女性が今またちょこっとしたアクションを起こしていた。

「はい、これは先生に。直接お渡ししたくて」

「ハハ、何年ぶり、何十年ぶりだろな。ありがとさん」

「で、こっちはお千さんに」

「おせんにキャラメル、だったりして」

南実と接する時は、何かと用心を要する。こうでも言うておけば、場面がシリアスになるのを緩和できる？という一策である。

「まさか。私は先輩と違って、王道ですから。でも、何チョコって言えばいいんだろ？」

気持ちの整理はついているものの、パターンの適当な表現が見当たらない。慕ってはいるが恋じゃない、兄に似てるけど兄じゃない、正に義理某と言いたいところだが、世間では違う使い方がされているし。

「何チョコでも別に。ありがたく頂戴します。あ、お返ししなきゃね。粒チョコとかどう？」

「嬉しいけど、櫻姉さんに怒られちゃいますよ。それよりまたどっかでお茶でも。お話ししたいことがあって・・・」

今となってはドキリとすることも無いのだが、どうにも意味深に聞こえてしまうからこまってしまう。清がいたから助かったようなものである。

「ツブって言やあさ、例のブツはどうだった？」

さりげなくシャレを入れつつ、話を転じてくれた。

「幸か不幸か、見つかりませんでした。大きな魚じゃないと捕食しないのかも知れませんね」

要するに自らの手で解剖した、ということである。文花が聞いたら卒倒しそう。千歳もさすがに言葉に詰まる。話を再度転じた方が良さそうだ。

「それはそうと、これ、開けてもいいかな？」

「ええ、それもある種、臓物ですけどね、ちゃんと食べられますから」

「?!」

ドキドキしながら開けると、ハート型のチョコが出てきた。ま、確かに臓の仲間ではあるけれど・・・。

ニヤリとする南実の頬には、えくぼ。やはり胸が高鳴ってしまう千歳であった。

[ セレブな二人（蒼葉と京） ]

こちらもハートの話で持ちきりだった。

「へえ、ハートの型抜きで」

「やっと納得行くのができたって感じね」

「この何となく弾力のあるところがプラスチックらしいというか」

「でもって、何となく脆そうなのがハート向き」

「京さん、その感性、さすがですね。姉妹はそのあたりを受け継いだようで」

「ホホ、蒼葉さんにはかないませんでば」

お茶会らしい優雅な会話が交わされている。

「でも、それ用途としては？」

「気持ちを伝えるのに使うんですって」

母は次女にそのペレットハートを渡しに行った。

[ 若い二人（六月と小梅） ]

曲は変わって再び『届けたい・・・』である。折りよく京から小梅に届け物がされた時、六月はノートPCを操作中。インターネットで時刻表を再点検しているってんだから、達者なものである。来月十五日からはダイヤが改正されるので、より入念。

「姉御、時刻表、調べたよ。アキバ集合でいいよね。木更津には・・・」

それほど凝ったルートではないので、聞いているだけでも構わないのだが、小梅の耳にはあまり入ってない様子。というよりも何かを躊躇っているような、そんな感じ。

「六月くん、二日遅れだけど、これとこれ・・・」

リボン付きの小箱、プラスチックハート添え、である。

「おお感激。って本命？」

「へへ、それは君次第」

「え？」

「ルフロンさんだって、八兄さんよりお姉さんだしね。でも背が追いつくまでは何とも言えない、かな。今日のところは切符の御礼ってことで」

恋の何とか切符というのを聞いたことはあるが、現物主義の彼にとっては関心外。だが、目に見えない特別な切符というのは存在する。今、確かにその一枚を手にしたような、そんな気がした。

「入学したら、とりあえず先輩って呼びます。いろいろ教えてください」

心の中で発車のベルが鳴る。あとは列車が動き出すのを待つばかり。

\* \* \* \* \*

祝賀会はひとまず幕引きとなり、概ね片付いたところで清と石島家三人はご退場。六月

は一人図書館へ。となれば残るは higata@の九人衆。干潟端ではないが、メンバー恒例のディスカッションに興じているところである。

舞恵は、残り少ないボードの余白にマーカーを滑らせる。どうやら一つの結論を得たようだ。

「よござんすか？ 蒼葉嬢のA、櫻姉のS。男性は苗字を使う。隅田さん、ま、千さんでも同じだけどS、エド氏も一応メンバーなんで、Eをいただく。で、こまっつぁんは南実でM、トリは弥生嬢のY」

「ASSEMY？」

弥生はまだピピと来ていない。

「あわてちゃいけない、お嬢さん。ここからが正に組み立て。宝木氏はハクンだからB、そしてこの舞恵さん、我らがLe FrontさんのLを足してみよう。あーら不思議」

スティック、いやマーカーが綴ったスペルは、そう、

「A S S E M B L Y！」

である。これぞ魔女っ娘ルフロンの本領発揮？と仮にしておこう。

「ま、私は一リスナーとして応援しますワ」

「先輩も何か楽器とかできればねえ」

「人前でそんな。トライアングルがいいとこね」

ということで、文花のFはひとまず除外。しかし、もっと大事な人物を忘れてはいないか。

忘れられてる当人は、「ト、トライアングル、う．．．」とすっかり固まってしまっているので、放っておいてもいいのかも知れないが、そうはさせじと、BGMが響いてくる。ズバリ『私達』である。

「作・編曲者、というよりバンマスなんだから、ねえ」

旧友の千歳がちゃんとフォローする。だが、

「Goさんなんて知らない。入れなくていいし」

ここぞとばかり、毒づく乙女もいる。

「しゃあないなあ。じゃこれでどうだ！」

A S Sの上に小さく、敬愛すべきマスターの名が付け加えられる。即ち、

「Go Hey with ASSEMBLY いいんじゃない？」

こうして若干一名を除く、私達一同の同意は取れた。さまざまなプロセスを経て、ここまで組み上がってきた彼らの取り組みを象徴するようなネーミング。E氏も文句は言わないだろう。

簡条書きの末尾に「祝・バンド名決定！」が加わった。一本締めとかはないけれど、拍手は起こる。そして止む。CDもちょうど、止まった。これもマジックのうち？ だとしたら、心憎いばかりの演出である。

外を見遣れば、夜の帳。漸う暗くなってきた。

三寒四温七日

二月最後の土曜日に、大詰め理事会は予定通り行われた。春一番吹き荒れる中だったが、

疾風に議事が飛ばされるようなハプニングもなく、また一步前進。入船氏の監事就任とともにメーリングリストも動き出すことになる。そして、その翌日は、寒さ逆戻り&再強風。天候に連動するかのように、怒涛のセッションが繰り広げられる。

ち「七曲全部仕上がれば、格好はつきそうだけど．．．」

ご「本番まであと六週間？ ギリギリかな」

ま「何を仰るバンマスさん。あと、じゃなくて、まだ、よ」

順調に仕上がっては来ているのだが、本気でライブを演るには、もうひと押し欲しいと考えているメンバーである。仮に十曲そろえば、アンコールの設定もできるし、何を隠そうフルアルバムだって夢じゃなくなってくる。千歳のメッセージソングはまだ音合わせしていないが、詞ができればいつでも。

詞が先行しているのもある。舞恵の原詩に曲が付けば九曲、つまりあと一曲となる。まだ六週間あると思えば、実現可能性は低くはない。

メンバーが集結しているのはいいとしても、全員が全員、本調子という訳でもなく、季節の変わり目のお疲れなんかもあって、「きまった！」っていうのが出ないのがもどかしい限り。だが、スペシャルゲストは至って満足そう。彼女の笑顔に助けられ、本日のセッションは成り立っていると言っている。来てもらって本当に良かった。おまけに手土産までいただいて。

アツアツではないが、パンケーキは元気の素である。

「よし、初姉のお祝いの続き。気合い入れて行こう！」

マスターのかけ声で、難曲『Re-naturation』の再演が始まる。リードボーカルは蒼葉。

「蒼葉さん、カッコイイなあ。でも、南実さんもステキ。入学祝いに買ってもらおっかな」

両親は運動オンチではないので、二人の娘もその気になればイイ線行く筈である。長女に限って言えば、これまでは親に反発していたので、スポーツの類もあえて避けていたフシはある。だが、晴れて進路が拓けたことで、それも解けてきていて、親譲りのいいところを見直す段階に入っていた。腕力と肺活量を鍛えればとりあえずいける。ことサクスに関しては、音の良し悪しは温度と湿度見合いなので、その辺もバッチリ。あとは表現力、そして指の細かな動きといったところか。

南実の巧みな指遣いを見て、それが粒々を<sup>え</sup>振り分けるのと無縁ではないことを知る初音である。すっかり魅了されてしまったようだ。

\* \* \* \* \*

三寒四温を繰り返して、春は着実に近づいてくる。スギ花粉が本格的に飛散するシーズンも容赦なく迫ってくる。花粉症に悩まされる前に何とか一曲。これが千歳の当面の目標である。花粉に追われる曲作りというのは、何ともやりきれない面もあるが、発奮するには好材料と前向きに捉えることとし、在宅作業の合間を縫っては、D T Mに明け暮れている。演奏順を想定すると、アンコール二曲目か。つまり締めくくりに相応しい曲．．．。

「石島姉妹、小松さん、奥様、そして姫様．．．」

女性ばっかしというのが気になるが、とにかく皆の笑顔を思い出しながら、リセット直

後の情景なんかを重ね合わせている。

この新曲のおかげで、姫様とお会いするのもお預け中。今月は二十九日まであってちょっと得した気分になるも、その一日が逆にネックとなる。とにかくこのおまけの一日をフルに活用して仕上げてしまおう。そして出来たてを一番にお聴かせしよう。翌日の話だと言うのに、三月がやたら待ち遠しい。

南からの暖かな風が余計にソワソワさせてくれる。

(ふたたび、三月の巻 へ続く)

© monologger